詩篇の一　終わりの世界－Obscurite－

暗いアーチ。彩られた花々は枯れ朽ち始めている。
闇の門。硬く閉ざされてあらゆる者を拒絶している。
柩の群れ。沢山の者達が屋敷の庭に眠っている。
並んだ樫の樹木は、所々が裂けながら。捻じ曲がって、空へと伸びている。
青銅の肉体を持つ者達。
蝙蝠が羽ばたく。
森の中から、獣達の鳴き声が響き渡っていく。
黒い土の匂いが漂っている。
ぱらぱらと、一つの個室の中で。風で本がめくれていく。
冷たい大理石。
雪花石膏のランプ。
この部屋は、深く閉ざされている。
獣の走る音。遠くから聞こえる咆哮。
天空に亀裂を入れるように、雷が走る。
……。
シェリダーは。
ゴブレットに赤いワインを注いでいく。
彼は“実体の無い存在”だ。
彼はあらゆる宗教圏の神を冒涜していく詩を書き綴っていた。
インクに羽ペン。あらゆる価値観を否定する冒涜的な詩篇を記していく。
彼は何者であって、何者でも無い。
閉ざされた世界。柩のような場所。
彼はマントを羽織る。
彼の顔は、包帯によって覆われている。
何処までも続く闇。
暗黒の地。
人間の持つ闇の集体によって形作られた世界。
彼は魔界の住民だった。
冷たい屋敷の中に、無数の幽霊達が彷徨っていた。
彼らは何者なのだろうか。それはシェリダーさえも分からない。
只、分かっているのは。かつて、彼も人間だったという事。
そして、今は。存在していない存在なのだが、確かに実体を伴って存在している。
彼は、概念なのだった。
彼は自分自身の中に、亡霊を飼っていた。
いつしか、亡霊は彼の心を蝕み。彼を飲み込んでいった。

気付くと、魔物達の集まる闇の地で生きる事になった。
囁き声が。耳元で聞こえる。
ばりばりと。
背中が裂けていく。
夜。今宵も、他の何かに乗り移ろうと、彼は意識を飛ばしていく……。

†

フェンリルは。
自分自身の指針を作らなければならないと思った。
揺れ動いてばかりいる感情。
それは自分の愚かさでしかないのだと。
決して揺るがない、何かを手に入れなければならない。
さかしまのような生き方。
自分の持つ強い女性性。少女性。
それは、生温い女々しさとは別物なのだ。
傷付けられるのが苦しいから、他人を傷付けるしかない。
本当はとても優しいと言われて、そんな自分に苦しむ。
鏡を眺める。
自分の整った顔が映っている。
何処か陰気で。憂鬱そう。
自分自身の自己愛は、強い自己否定と相反している。他人が嫌い過ぎて、自分だけしか好きじゃない癖に。自分を強く攻撃し続ける。
「で。オレはいつになったら。人を殺せる覚悟が出来るんだ？」
分かっている。下らない。
他者を殺害する事に意味は無い。
逆に言うならば。これまで、ずっと。他人を殺さずに戦い抜いてこれた。
けれども、どうしようもなく他人が嫌いだ。自分が完璧でいたいからなのだろうか？
自分は何の為に生きているのか。何も分からないまま、生きている。
この身体が汚れていきそうで。
この顔が醜く思えて。やるせなく。赦せなく。
きっと、在りのままの自分を受け入れる事が出来ないからだろう。
蝕んでくる他人を受け入れる事が出来なく。
受け入れた時点で。自分が生きられなくなる。
けれども、何かを目指したい。
目指し続けていれば、何かに届くのだろうかと。
どうしようも無い程に、消してしまいたい他人。

自分が消されそうになるから。受け入れる事が叶わなく。
けれども。世界の全ての者達を殺したいとも。自分がこの世界からいなくなりたいとも思わない。どうすれば、生きられるのか。探している。ひょっとすると、自分が生きる基盤などこの世界には存在していないのかもしれない。だからこそ、自分が自分であるという事を守り通さなければならない。決して、汚れぬように。
迷い続けた先に、何かあるのだろうかと。
自分が自分で在る為に戦う。誰の人生でもないのだから。
そう、他者に敵意を抱いてしまうという弱ささえも糧として、強く生きなければならない。

†

何も無く。生きてきた。
空っぽの世界。
一体、自分の人生には何があったのだろうかと。
全てが石化しているように見える。
全てが無色透明のようで、色を失い続けている。
誰も愛せずに生きているのだろう。感情の波は何も無く。
世界が全て、無色透明に見える。
空ろ過ぎる街中を歩き続ける。
オルドルはぼうっと空を見上げた。
満月だ。
いつになく、同じ世界を眺めている。何処まで行っても、同じ世界。全てが空漠で凡庸に映っていく。
信じられるものなど。何も無い。
何処に行けば。何かが生まれるのか。
積み上げてきたものが何も無いから、信じられるものが無いのか。
そもそも、生きていたという実感がまるで無い。
生きていた歴史を探している。何処にも無いのかもしれない。
漂流者なのだなあと思った。

†

闇にも様々な種類がある。
一言で闇といっても。みな、様々なものを抱えている。
人間が持つ。負の集積体。
あらゆる時間軸の彼方において、人間が持つ負。
分かり合う事は出来なくても、負は確かに存在して、人間を蝕み続ける。

コッペリアは重過ぎるものを抱えていかなければならない。
果たして、そうやって生きていく事が出来るのだろうか。
苦痛と恐怖を見続けなければならない。

†

他人の顔を消してしまいたい。自分の顔もだ。
此れほどまでに、何故。自分が嫌いなのだろうか。
自分の顔形が醜く思える時も、身体が醜く思える時も多い。
勿論、それは自分自身の意識の問題なのだが、どうにもならない。
フェンリルはメビウスの後を付いていった。
「これから。混沌の可能性を持つ者達を討伐しに向かおうと思ってな」
黒衣の女は淡々と告げる。
彼女は何の感情も感慨も無く、只、自分が生まれ落ちた使命として行動を起こす。
暗黒の大地が広がっていた。
屍となった身体の者達が、意識の無いまま。貪食だけを維持し続けて、蠢いている。魂の無い動く屍達。この地は呪われているのだ。
彼らは生前、何者だったのだろうか。
ひょっとすると、何者でも無かったのかもしれない。何者にも為れなかったからこそ、未練だけで空ろな生の残骸を生きているのかもしれない。
しばらく行くと。大きな河に出た。
そこには、巨大な船が浮かんでいた。
「あれは何だ？」
「『忘却への桟橋』と私は呼んでいる。冥府へと続く渡し舟だな」
二人は巨大な船の上へと乗る。
帆船だ。
屍となった者達が、舵を取っている。
巨大な幽霊船。
河の中を見渡す。漆黒が一面に広がっている。
天空も一面が、暗黒によって覆われていた。
冥府の入り口へと、このまま続いているのだろう。
「この向こうには。死の先があるのか？」
「そんなものは無い」
メビウスは淡々と告げる。
「人は死ねば終わりだ。ゾンビや幽霊は人間の身体や思念の残骸にしか過ぎない。もうそれらは本来の人間ではない。人間は死ねば終わる。死後の世界など、この世界には在り得ない」
フェンリルはそれを聞いて。頷いた。

死ねば、全てが終わる。
それはどうしようもない、摂理なのだ。
殺害してしまいたい他者。
他者の気持ち悪さをつねに抱えながら、生きている。
自分を蝕んでくるものを、受け入れる事など出来はしないのだから。
自分の顔、声。身体。纏う服。髪。思考。
全てを肯定しなければならない。+
誰に否定されようが。何に否定されようが。それでもなお。
他人の生き方や価値観、思想や思考を受け入れてしまえば。自分の全てが崩れてしまうようで。どうすれば、この世界の中で生きられるのか未だ分からず。
分からないこそ、他人と戦って思考するしかないのだ。
彼は決して揺るがない。
振り回してくる周りの全てを。受け入れない。
けれども。今、戦う意志を見つけようと思う。
自分の中に眠っている力。きっと、それは自分で思っている以上に無限大の強さが眠っているのだと信じたい。この世界全てを折り潰すかのような。
だから、自分の底の底にある力を信じなければならない、信じられるものなど、結局の処。自分自身しかいないのだから。
自分は美しいと、思いたい。
誰かの為に生きているわけじゃない。
鏡に映る自分に誇りを持ちたいから。
暗黒の中に、靄が掛かっている。
暗い水面の下は。何があるのだろうか。
冥界の海の只中。永久凍土のような、冷たく深い海底。
巨大な幾つもの水棲生物が。水面を泳いでいる。
その生物達は、どれ程の大きさなのだろうか。
もしかすると、見えている部分は一角だけで。国一つ程の大きさを有しているのかもしれない。

詩篇の二　イメージの牢獄－L'illusion du maniaque－

　シェリダーは、館の中に住んでいる。そして、毎日。同じような生活をしている。
　カタカタと。
　食器が一人でに動き出す。
　この館の中では。見えざるものが歩き回り、生活しているのだ。
　彼らは一体、何なのだろうか。ひょっとすると、自分達が何だったのか。その実体を忘れてしまった者達なのかもしれない。
　彼は、只、存在している。そして、書物を通じて。あらゆる世界に行く事が出来る。
　シェリダーは。背後で囁き続ける男に話し掛ける。
「お前。まだ俺と話したいのか？」
　ぼんやりと影のようなものは、光の粒を纏って佇んでいた。
「セイタン。……お前は何故、俺を好む」
　くっくっ、と。光と影の中間のような男は嘲る。
「お前の抱えているものに興味があるからだ」
　セイタンは、言いながらも蝕まれていくような気分になる。実際、この男を嘲っているつもりが。嘲られるのは、自分の方なのだろうと。
　光と影のような。
　シェリダーは大広間に絵画を飾っている。
　壁全体を覆い尽くす程の大きな絵だ。
　それは、聖者が彼を慕う使途を集まって、晩餐を開いている絵だった。聖者の顔は、慈悲深くも、何処か何かを見透かしているかのよう。
　絵画の中へと吸い込まれていきそう。
　セイタンは思った。
　絵の向こう側へと向かいたい。
　様々な世界、
「こんな暗い館の中で何を待っているのだろうな？」
「さあな。お前には関係が無いだろう？」
「無いな。確かに」
　セイタンは男を睨み付ける。
　この男は浅ましいとしか思えない。
「誰かに乗り移ればいいだろう？　シェリダー。それがお前の力なのだから」
　彼は悪魔的に囁く。
　しかし、本当に悪魔的なのは。この席に座っている者の方なのだ。
　こいつの本質に近付けば、食い破られる。セイタンはそれを知っている。

†

オルドルはもう四十をとうに過ぎている。
未だに、未婚で。まともな職に付けなかった。
今は浮浪者寸前の生活に追われている。
食べるものと言えば、乾燥したパンと水ばかりだ。
日々、回ってくる。ゴミ回収の仕事などで食い繋いでいる。
纏っている服は、孔だらけだ。異臭がこびり付いている。
気付けば、彼は暗黒の地の中へと迷い込んでいた。
伸びた顎鬚。
ふらふらと、暗い草原を彷徨っていた。
暗い、暗い、大草原だった。
そこは、只。闇ばかりが満ちている。何処まで行っても、闇ばかりが続いている。
獣達の気配がする。涎の臭いも漂ってくる。
彼はぼろぼろの記憶を抱えている。自分の人生は一体、何だったのかと。馬鹿馬鹿しいにも程がある。受け入れられなかった人生。
何処にも辿り着けない悪夢そのもの。
思えば過ちばかりの人生だった。ずっとやり直す事など出来ないのだろう。
やり直そうとするならば。何からやり直せるのだろうか？
自分の過去の記憶を、痕跡を巡っていく。
朦朧とした場所。
まるで、自分の人生は陽炎のようで。揺らめきながら消えていく蜃気楼のよう。

†

分かち合えない他人。
共感し合えない感覚。言語ゲームを共有出来ない。
噛み合わないコミュニケーション。
お互いにとって、お互いが愚鈍な馬鹿だと認識してしまう。
それは、もうどうしようもないと思いながらも、他人を憎み続けてしまう。
もし、自分の容姿が醜かったら。誰も愛してくれないのではないのだろうかと。
地位や権力などを見て、人は人を獲得しようとする。
愛は無償じゃない。分かっている。
何かを自分が手にしていないと、与えられないものだと。
他人にとって、分かって貰えなさそうな葛藤や苦悩。
自分の抱えている生きる重さは、他人には分からないのだろう、知っていた。しかし、誰かに媚びる為に生きているわけじゃない。
自分自身の強さ、意志。消したくないし、忘れたくないから。

　他人を受け入れてしまった時点で。自分の全てが崩れそうで。
　自分の中にあるものを、決して汚されたくはない。
　それが、自分が自分である事なのだから。
「けれども。オレは確かに生きている」
　弱さを握り潰したい。
　他人を嫌う事でしか生きていけないし、他人を拒絶する事でしか生きていけない。けれども。

†

　コッペリアの視ている世界。
　傷付きやすさが重く痛い。
　あらゆるものを抱え込んでしまう。
　そう、いつの頃からだろうか。記憶を辿っていく。確か、物心付いた頃からだったと思う。自分は他人と違うんだと突き付けられた。
　初めて自分の特性に気付いたのは、幼年時代の頃だった。
　よく、女のようだと言われた。更に言えば、女の子よりも弱いのだと。
　そういった脆さを抱えて生きてきた、たとえば、道端に落ちている動物の死体。そういったものを見るだけで、胸が引き裂かれるような思いをした。
　この心は。何故、弱過ぎるのだろうか。
　きっと、ずっとこの体質は消えないのだろう。
　その地点からでも、生きていかなければならない。でも、思うのだ。
　仮に自分が何かを為したとしても。
　歴史の中に埋葬されていく。
　歴史に名前を刻む事が、どれ程の意味を有しているのだろう。
　彼が残したいもの、それは傷という存在、それは傷を負った者達が生きた証なのだから。
　傷は心の中で膿んでいき。何度も何度も反復していく。
　傷付きやすさを乗り越える事は出来るのだろうか。
　きっと。それは生まれ持ったものだろう。
　人間同士はみな、違う生き物でしかないのだと。

†

　シェリダーは他人の記憶を『映視』し。更に、他人の記憶に自分の記憶を混ぜて。他人を操作する事が出来る。
　彼は眠りに付いて。他人の中へと入り込む事が出来る。
　眠りの中において、色々な他人になって生きている。性別、場所、歴史を超えて。色々な人間

へと変わっていく。そして、一つの夢の中で一つの人生を終えていく。
　彼は世界の真理を悟ったのだと思っている。
　彼は夢を見る。
　夢の中では、様々な者達の背後へと到来出来る。
　数多の人間の人生を、彼は見つめている。
　この世界において、理解出来ないものは無いのだと思っている。
　シェリダーの背中から。無数の影のような黒い翼が生えてくる。
　背中が引き裂かれるよう。
　また、誰かの下へと向かいたい。
　自分は何者なのだろうか。
　力が、奥底から湧き上がってくるかのようだった。
　あらゆるものを支配出来そうな力。
　彼が乗り移れば、誰でもコントロールする事が出来るのだろう。
　今日も、他人の夢の中に入り込んで。悪魔的な事を囁き掛けた。
　相手は普通の人生を送っている。

†

　空には巨大なクジラが泳いでいた。
　フェンリルは眉を顰める。
　不可思議な絶景が広がっていた。
　此の地では。魚達が空を泳いでいる。
　まるで、蜃気楼や霧のような姿の空を泳ぐもの達。
　さながら、天空の水族館のようだった。
「さてと。私は私のするべき事をする」
　鮮やかな色取り取りの魚達が空を泳いでいる。
　そして、雲の隙間に珊瑚のようなものが咲き乱れていた。
「混沌の芽を潰さなければならない」
　メビウスの捻じ曲がった金色の髪が。風に靡く。
　二人の目的は相容れない。
　フェンリルは思考し続けている。
　自分の力の可能性を。
「オレはまだ、生きられる。軟弱さの中に留まりたくないから」
　自分の存在を。自分の肉体を。自分の性別違和感を抱えながらもなおも。
　分かり合えないこの世界と戦いたい。自分自身の為に。
　メビウスは、そんなフェンリルの意志を尊重している。
　空飛ぶサメが。魚の群れを追い掛ける。

　此処もまた、一つの非現実の景色が広がっている。

†

　オルドルは動く石像に仰天していた。
　いつの間にか、迷い込んだ場所。
　遠くには、巨大な館が見えた。それはさながら、地獄の門のようだった。
「俺の名はマレブランケと言う。お前は迷い込んだものだな？　この館の中に。異邦人は入れるなと言われているんだが。そうだな」
　くっくっくっと、石像は笑い続ける。
「お前、俺の問答に答える事が出来れば生かしてやる」
　オルドルはあたふたとうろたえる。
「お前、この世界が嫌いか？」
　うっうっと、矮小な男は。慌てて動く石像の言葉を聞き取っていた。
　そして、言われた事を吟味して頷く。
「き、き、嫌いだ。嫌いだとも。俺は、俺はずっと」
「そうか」
　石像は男を吟味している。
　瘴気が辺りに流れている。
　湿った土の匂いが鼻に付く。
　大気が重圧を持って、迫り来るかのようだった。
「お前は俺に付いていく資格がある」
　石像は笑っているような、慈しんでいるような不思議な表情になる。
　石で彫刻された人とも獣とも区別が付かない顔、オルドルは震え上がっている。
　石像は翼を広げた。
　オルドルはいつの間にか。
　宙に浮かんでいた。
　全身がぶらぶらと揺れている。
　どうやら、背中を掴まれているみたいだ。
　空から大地を見渡している。
　初めてみる景色、こんなに世界は広かったのかと。呆れるくらいに自分が無力だ。
　遠くまで運ばれていく。
　大都市が見えた。
　一面には明かりが灯っている。
「お前はあの光明の中で暮らしたかったんだろう？」
　絶景を目の当たりにして、オルドルはうろたえていた。
　幸せそうな家庭の姿が、ちらほらと。目に焼き付いてくる。

気付けば、オルドルは涙を零していた。
自分は、何も生きてこなかったのだと。
石像は嘲弄する。

†

ずっと自分の事を想い続けて欲しい。
彼女が死ぬその時まで。
何年も何十年も、自分以外の異性に想う事無く。
自分だけを想い続けて欲しい。
男は、万年筆の束から。一番、気に入っている年代物の品を取り出す。
彼は恋文を綴り続けている。
相手の事を想い続ける。
彼女はずっと、自分の事を考え続けるのだろう。未来永劫、死ぬまで。
それが、彼の有する力なのだから。
甘い甘い言葉の刃を刺し込んでいく。
デイエス・イレは。
彼に魅了された女の意識を固定する事が出来る。
心を液状化させて、魂を束縛する事が可能なのだ。
相手の女は。彼の意識と溶け合って、生涯。生き続ける事となる。
デイエスは目も眩むような美青年の姿をしていた。
鏡を見る度に、全ての女を支配出来ると思えてしまう。その自尊心は崩れない。
恋文を。彼を慕う女の一人へと届ける。
彼の事ばかりが綴られた、女の一人からの返信だ。
デイエスの事が好きで好きで仕方が無いといった内容だった。彼はほくそ笑む。この女は貴族をしていた。上流家庭で育っており、幸せな結婚へと向かっているが。それでも、デイエスに想いを馳せて。結婚を諦めようかと書かれている。
ある意味で言えば。これは呪いのようなものだ。
相手を縛り続けていく呪詛の言葉。
デイエスは彼女達と出会わない、彼女達に言葉を届けるだけだ。それが呪いとなる。
愛していると言う為に。何十行にもわたる言葉を綴る。女は狂喜する。
相手の言って欲しい言葉を巧みに選んでいき。自然の情景や日々の生活の話を踏まえながら、相手への愛を伝える。
それがどうしようもなく、心地が良い。
自分以外の男に靡いて欲しくなどない。
自分だけを永遠に崇拝し続けて欲しいのだから。
心の全てを彼のものに。

みなの心を檻の中へと閉じ込めていくのだ。
狭く、狭く、暗い恋という闇の中へと閉じ込めていく。手足をもぎ取っていく感じ。
デイエスは自分から他人が離れていくのを、恐ろしく思っていた。
忘れたくても。何度、彼の事を忘れたくても忘れられないようにしたいから。
自分は確固として存在している。女達の感情によって自分は存在し続けている、そういった確信はある。けれどもだ。執念的に相手を縛るからこそ分かる事もある。
恋愛はきっと不滅では無いから。
心を縛りたくなる。
自分に縋り付くしかない相手を見ては。自分自身が楽になる。
時は移り変わっていく。それは変わらない事実だ。だから、恋は不滅ではない。どうしようもない、美も不滅ではないのだから。
自分の存在は他人によってしか、維持出来ない。
裏切られるのが怖いから、自分は裏切らないのだろう。
何名もの女を抱えてもなお。誰も裏切らないという意思を守っている。
むしろ、それは彼自身が裏切られるのが怖いのだから。どうしようもない程に。
鏡に映る自分の端整な顔立ち。
それが崩れ去れば、誰も自分には見向きもしなくなるのではないのかと。
過ぎて行く時間が長過ぎる。それは、辛く怖い。
いつか終わりが来るのではないのかと。
呪い続けて。願い続けて。
捨てられていくのが怖いから、同じ苦痛を可能な限り、多くの者達に与えたいのだと。
愛とは呪いそのものだ。相手を縛り、自分という世界へと押し込めていく。

†

オルドルの過去……。
読書に耽っている時間も長かった。
彼は書物を読み続ける。
あらゆる知識の総体が書物の中には描かれている。
文字を羅列させて、克明に文章を描写し続けていくと、人間というものが大体、分かってくる。だからこそ、他人と関係を持つ事は無価値なのだと彼は考えている。
彼は世界中の者達は。自分と同等かそれ以上の知識を有しているのだろうと考えていた。
彼は自身が明晰かどうかなどを映す鏡が無いからだ。
だからこそ、読んできた本の内容を神聖視するかのごとく記憶して、他人との差異を図ってきた。しかし、現実を生きていく上でまるで意味が無かった。彼は現実に敗北して、挫折していったのだった。
誰に会っても。自分よりも賢明であり、明晰なのだと認識している。

彼は書物の世界に居続ける。
全ては神秘的なのだ。
全ては理解し難いものなのだ。
彼はまともに生活する事が困難だった。
暖炉に薪をくべ過ぎて、家を火事にしかけた事もあるし。料理すらもまともに出来ない。
身体も弱っていて、一日の大半を寝て過ごしている。
ぼんやりと夢の中を彷徨っているような感覚。
口の中は虫歯だらけだ。まともに生活する事さえ出来ない。
時折、涎が口の端から落ちる。
涎はよれよれの汚い服へと落ちていく。そういえばまともに洗濯なども出来なかった。
文字を追い続ける事ばかりしか出来ない。
文字が頭の中を駆け巡る。
自分は取り残されてしまったのだと。
歴史の中から。あるいは、全ての価値観の中から。全ての中から疎外された地点で、自分は他人からどう映るのだろうか。
彼には他人という鏡が無い。
観念の迷宮の中から、抜け出す事が出来ない。

†

狼の鳴き声が響く。
小さな生き物達を襲っているのだろう。狼は集団で襲い掛かる怪物のような獣だ。
館の周辺にある森。
くすくすっと、小さな哄笑が響いていた。
ラハブは森の中で、夜会を広げていた。
彼は館の外から、館を俯瞰している。
館の中に住まう者達には、強い思い入れがある。
もう少しだけ、この世界を楽しみたい。
思い入れのある、愛しい愛しい世界。

詩篇の三　出口の無い迷路－Un reve－

かちゃかちゃと。銀のスプーンとフォークを。真鍮の皿の上に向ける。
静かな晩餐会は続いていく。
ゆで卵の殻を向いて、塩を振り掛けて。口の中へと放り込む。
相変わらず、同じような時間を無情に過ごしている。同じような日々。
無情な時間を過ごし続けていても。
こうやって、食べて飲んで暮らせているのだから、きっと幸福なのだろう。
燭台の焔は揺らめいている。
ぼんやりと。自分の意識が遠のいていく。
気付けば、色々な人生を想起している。
また、自分の背中が裂けそうだ。
シェリダーは。別の世界へと飛んでいく。
気付けば、他人の意識の中へと入り込んでいる。
いつの間にか。あらゆる、人間の人生を歩んでいる。
シェリダーは、また本を開く。
それにしても、此処は一体、何処なのだろうか。
そして、自分は一体、何者なのだろうか。実はそれさえも忘れてしまっている。
自分は外へと出て行かない。只、館の中にいるだけで人生が充足している。
この力があれば。あらゆる他人の人生を生きる事も可能だ。

†

フェンリルはもぐもぐとチョコの乗った生クリーム入りのエクレアを口にする。
やはり、菓子類はとても好きだ。
自分が男とは思えない。
何か違うものなのだろう。
今後の事を、考えて。自分自身の檻から抜け出さなければならない。
もっと、強い意志を固めていく為に。
メビウスを眺める。
彼女は球体関節人形の肉体を有している。
一体、それはどういう事なのだろうか。
女のフォルムこそしているが。男でも女でも無い身体。
少しだけ、羨ましく思える。
その腕も脚も、全てが完成された肉体のようで。
正直、妬ましいとさえ思ってしまう。
自分に対する強い自己愛と自己否定は、何処から来るのだろうか。

　何だか分からない他人に対する敵意の根源は、そこにあるのかもしれない。
　フェンリルは首を傾げた。
「混沌ってのは何だ？」
「世界の調和を破壊したいと願う意思だ」
　メビウスは端的に答えた。
「分からないな」
「只、在るという事実が問題になっているという事だ」
　船は岸辺へと辿り着く。
　暗礁の中から、何かが手招きしているかのようだった。

†

　全ての愛を詰め込むように。
　人形制作工房にて。等身大の人形が作られる。
　髪は人毛を使う。
　彼は憑依されたように人形を作り続けていた。
　大体、年齢は二十代半ばくらいの女の人形だ。
　髪型は黄金色で、長い渦巻きのよう。ウィッグは先に制作する。
　丁寧に、丁寧に、髪の毛をこしらえていく。人毛を加工して作っている。
　腕を作り、脚を作り。胸を作り、腹を作っていく。
　生殖器は存在しない。性別を凌駕した存在。
　そう、この世界には存在しない聖なるものを生み出そうとしたいのだ。
　顔は無表情。
　両目の黒い孔の中に、水晶の球を押し込める。
　人形と対話してみる。それはきっと、自分自身の内奥にある女性。
　何度も捏ね繰り回した粘土細工。
　綺麗に顔の輪郭を彫っていく。
　頭の中で組み立てられているイメージが一つ、一つ、形になっていく。
　創った身体のパーツを繋ぎ合わせる。
　工房の中には、光が刺し込んでいく。
　少しずつ、神々しい何かを感じ取っていくかのようだ。
作り上げていく過程で。何かが、降りていくかのよう。
コッペリアは、その光に触れていたい。自分がより高い次元の何者かと対話している感覚に襲われるのだから。
　本当に、何かが降りてくるんじゃないだろうか。そんな風に思っている。実際、降りてくるのだという感覚に襲われる。自分自身が何者かに憑依されていくんじゃないのかと。
　乾いた粘土の粉塵が舞う。

身体中、べたべたと汚れているが。気になどならない。
メビウスは宿命の為に生まれた。
この世界の秩序として。何が秩序なのか分からないが。
只、自分はシステムとして存在しているのだと。
フェンリルは自分で自分を肯定しなければならない。
それ以外に、この世界に生きる意味など無いのだから。
朽ちた墓石が並んでいる。
空には満月。
このメビウス・リングとかいう奴を倒してみたい。
あるいは、彼女が追い続けている敵を。
いつか、彼女の心と一体化していくんじゃないのかとコッペリアは恐れ戦く。その時に、一体、何が見えて、何が映るのだろう？
世界を無価値にしていく何か。
メビウス自身でさえも、分からないのだと言う。
その痕跡を追い続けるしかないのだと。
未来の芽の為に。
「全てを虚無化していく。混沌。虚無を持つ者それ自体ではなく。現象としての状態が、虚無でしかないのならば、それはきっと世界に生きる者にとって赦されない事だと。私は感じている。私はそれを倒さなければならない」
メビウスは告げる。
「私には私にしか出来ない事をする。お前にはお前にしか出来ない事をしろ」
フェンリルは。
敵意とも戸惑いとも分からない表情を。動く球体関節人形へと向ける。
彼女は感情というものを、まるで吐露させないからこそ。彼の不安定な他者に対する違和感をより一層、刺激させる。
やはり、彼女は何か苦手だ。
感情の波が無く、無機質過ぎる相貌が。何処か自分が滑稽に思えて仕方が無い。
「誰かは誰かの価値観の影響の下、生きているが。結局の処、自分がどれだけ他人の影響を受けたとしても。自分は自分でしかない。それが可能性だ」

†

「復活した後に。私の力である『ウロボロス』が劣化してしまってな」
彼女は指先を空中へと向ける。
砂塵が浮き上がり、円を描いていく。
「著名な人形師に頼んで。肉体を再構成させて貰ったのだが。やはり、巧くいかないな。力が出し切れない」

　メビウスは自分の衣に覆われた右腕を眺める。
「『館』にいるのは。おそらくは、全てが空しき者達だ。全て始末する。お前も手伝ってくれるんだろう？」
「ああ……」
「といっても。私一人では倒し切れないかもしれないんだけどな」
　漆黒ばかりが続いている。
　暗いアーチを抜けると、巨大な建造物が見えてくる。
　巨大な城のような館だ。
「混沌ってのは何か。やはり、分かりかねるな」
　フェンリルは、やはり腑に落ちない顔になる。
　辺り一面は暗い森に包まれている。
　遠くから、狼の遠吠えが聞こえてくる。
　地面にはヘリオトロープの花々が咲いている。
「混沌。全てを虚構にしてしまうものと言うべきか。殺す事も世界への懐疑も。虚無を持つ人間は虚無そのものではない。只、虚無という状態はあるという事だ。ある意味で言うならば、混沌とは真理の最終段階なのかもしれないが。私はそれと戦わなければならないのだろう」
　メビウスは告げる。

†

　傷が深過ぎると、他人がとてつもなく怖くなる。他人という存在が暴力性を帯びてくるのだ。
　だからこそ、疑う事ばかりを続けている。
　とても強い他者への不信感。それを持つ自分は余りにも弱いのだという自覚がある。
　信じれば信じる程、裏切られるのではないのかと。
　そんな事ばかり考えて。辛さの渦に呑まれていく。何もかも堂々巡りだ。
　自分でも馬鹿馬鹿しいと思っているのだが、どうにもならない。
　いつも、自分は幼稚で弱弱しく思えてしまう。どれだけ弱さを重ねていけば、本当の自分自身に出会えるのだろうか？
　分からない、何もかもが分からない。自分を知ろうとすればする程に、自分というものが遠ざかっていきそうだ。
　他人を信じ続ける事が出来るのだろうか。
　滑稽さと自嘲ばかりが込み上げてくる。
　ひょっとすると、もっと大きなものを信じたいのかもしれない。それが、彼の場合は人間存在がもっている、深い深い傷なのだろうと。
　少し一息付くべく。
　工房から外に出る。
　シャワーを浴びた。

殆ど体毛の無い肌。白い陶器のよう。
何だか、自分自身。此れまでの人生を人形として生きてきたんじゃないのかと思えてくる。
コッペリアはふうっと、溜め息を吐いた。
人形という名前を与えられたもの。
本名の方は、忘れてしまった。
中性的で女性的な肉体と顔立ちを有しているが。自分は紛れもない男だ。
コッペリアという名前の由来は詳しくは知らない、只、人形制作に当たって。作家としてのペンネームが必要だった為、友人が名付けてくれたものだ。
この名前に重いが出てくるのだろうか。ずっとずっと、刻んでいけるのだろうか。
縫い目ばかりの、ガーゼの服に着替える。
ボンテージ・パンツを履く。
首に枷を嵌める。
唇にうっすらと紅を引く。
漆黒の髪に。薄っすらと麦のような茶色が混ざる。
整えられたロングボブの髪。
髪を丁寧に櫛で梳かし始める。
とても愛しい人形達、全部。自分の投影なのだから。

†

どれ程までに男性性や女性性を欲したとしても。人間は肉体によって、生理的機能や他者からの認識によって。性別という檻の中へと閉ざされていく。
肉体に性別が存在している限り、中性なるものや無性なるものには為れないのではないのだろうかと。それ故に、葛藤する。
抜け出せない自分自身。激しい苛立ちに襲われる。
何処かから鐘が鳴り響く。
何処にも無い鐘が、音色を奏でている。
フェンリルは眉を顰める。
共同墓地のような墓石が並び続けている。
何処の言語か分からないが、どうやらアルファベットによって墓石に文字が刻まれている。明らかに当て付けのような威嚇。
そんなもので、怯える程に弱くは無い。
「フェンリル。敵だ」
メビウスは微動だにせずに、そう言った。
フェンリルも頷く。
空中から、羽ばたき音がする。
それは奇妙な音だった、鳥というよりも機械の轟音のような。

　石像のような肌を持つ。蝙蝠の翼を持った悪魔のような怪物だった。
「お前は？」
　フェンリルは詰まらなそうに訊ねた。
「俺か。俺はマレブランケ。この館の門番だ。お前らは何者なんだ？」
　怪物は訊ねる。
「どうだっていいだろう」
　フェンリルは心底、下らなそうに言う。
「お前に言って。何かオレの得になるのか？」
　マレブランケと名乗った怪物は嘲笑った。
「大層な口を聞くじゃねえか。俺様は門番のガーゴイルなんだ。客人には誰何しないといけねえ。館に住む者達を守らなければならないからな？」
　フェンリルは無視しようかどうか考えるが、仕方無く。黒衣の女に訊ねた。
「メビウス。あれは何だ？」
「何かの力で作った意思のある置き物だろう。大した力は無い。相手にするだけ無駄だと思うが」
「オレもそう思っていてな。どうしたものかな？」
　怪物は困ったような顔になる。
「へっへっ。俺を相手にしたくないと？　俺は舐められたものだよなあ？」
「そうだな」
　フェンリルは少し、見下げるように言う。
「お前、オレ達に敵わない事くらいは理解しているから。本当はへりくだっているんだろう？　相手の実力を理解出来る知性がある事くらいは認めてやる。お前が何しようが、オレ達の侵入を止める事は出来ないと思うんだけれどもな？」
　彼は下らないそうに言う。
「そうでもないぜ？　此処にある墓石の全て。全部、俺が始末してきた奴らのなれの果てだ。俺は大層、強いんだぜ？」
「大した奴らじゃなかったんだろう？　たまたま、此処に迷い込んできた奴らだとかな」
「そうでもないぜ？　たとえば……」
「お前程度にとっては、苦戦する相手だったんだろうな？」
　マレブランケは二人に近付かない。
　つねに数メートルの距離を取りながら、空中から様子を伺っている。
「なあ……」
「試してみるか？」
　フェンリルは強く。無情な声音で告げた。
　相手を黙らせるには充分過ぎる程の威嚇だった。

†

　デイエスは自分の鏡を眺める。
　美し過ぎる自分の容姿。ナルシスの化身のような姿。
　自分自身の顔形が整い過ぎて、自分自身に恋焦がれそう。
　そして、女達は。そんなデイエスに恋愛感情を抱き、求愛する。
　面長な顔立ち。うっとりとするような二重瞼に蒼い瞳。
　彼は自分の才気を信じ切っている。
　女は自分に魅了されて当然だと考えている。
　彼の声は、女を支配していく。
　彼の姿に、女は見惚れて、眼が離せなくなる。
　絶対的なまでの神格化を与え続ける存在。デイエスは多くの者達から求愛される事によって、自身が神と一体化していくかのような妄想へと入り込んでいく。
　全ての女は言葉と、顔によって動かす事が出来る。実際、此れまでそうしてきた。彼は神なるものと一体化出来るのではないかという妄信に近付いていく。自分に対する絶対視。それが募り、募っていく。
　自分に対する絶対的な自信。
　妄執に近い程の確信。
　彼は強い独占欲によって、支配されている。自分を支配したい女を、自分という檻の中へと閉じ込めてしまいたい。抑え切れない欲求によって満たされている。
　自分の美貌には絶対の自信がある。自分の言葉にもだ。
　それでも何処か酷い物足りなさを感じる。いつか、みな離れていってしまうのではないのかと。彼は自分で自分を在りのまま肯定する事が出来ない。
　何故ならば、館から出る事が出来ないのだから。
　幾ら崇拝されても、彼自身は女達に触れる事は適わない。どうしようも無い事。
　世界を取り巻くものの全てが、自分を引き立てるものでしかない。
　そうやって、世界を眺め続けている。自分で自分を信仰する。

†

「先ほどの怪物が言うには。館には三名の混沌を有する可能性がいる。全員、私が始末する。フェンリル、お前は人を殺せないんだったな？」
「人間以外のものなら、殺せる自信はある」
「成る程。奴らは人間の姿をしていない可能性が高い。それから、奴らは使い魔を使ってくるだろうな。やっかいなものを出してくるかもしれないから。その時は頼む」
　メビウスは。毅然と言いながらも、少しだけ自信が無さそうだった。
　彼女いわく、以前のようには力を使えないらしい。
　欠陥品だな、と自嘲のような事を口にする。

「この迷宮のような館。それぞれ、シェリダーとセイタンとデイエス・エレという名の三名が住んでいるらしい。彼らは混沌を有するものだ。三名共、別々の人生を歩んでいるらしいな。他にも何名もの異形の者達がいるらしいが。あらゆるものが不明だ」
　回廊を歩いていく。
　長い回廊だ。黒い絨毯が敷かれている。
　マレブランケを通して、自分達の存在はとっくに伝わっているのだろう。
　対策を色々と立てられているのかもしれない。
　だが、此方側の手の内を何も明かしていない。どんな手段を用いてきても、打ち勝つ自信がある。
　だから、こんな場所に果たして強者などいるのだろうか？　そんな疑問が巡る。
　絵画が壁に飾られていた。
　何も描かれていない、真っ黒な絵画だ。
　キャンバスの上に。無意味に黒を塗りたくったかのような。
「で、お前は何者だ？」
　フェンリルは絵画に訊ねる。
　くすくすと、絵画から笑い声が響く。
　ぼんやりと、奇妙なものが映っている。
　べったりと、手形へと変わった。
　フェンリルは淡々とそれを眺めている。
「お前の名は？」
「君の名は何かな？」
　ふん、とフェンリルは首を捻った。
「どうせ。本体じゃないんだろう？　そこにいるのは。戦うつもりなんて無いんだろう？　オレ達が何者なのかを吟味したいと。で、どうするんだ？　オレ達がお前らを始末するのには変わらないんだけどな？」
　ぱあっと、光の粒が広がり続ける。
　それは人の形へと変貌していく。
　辺りに眩い光が広がり始める。
　指や鼻などの、細かい輪郭までもが出来上がっていく。
「私はシェリダーを守っているんだが。お前達に彼は殺させないよ？　私は彼を気に入っているからね」
　くっくっくっと、凝縮された光は話す。
「セイタンだな？」
　メビウスは告げた。
　光は。はあっと、息を吐いた。
「ああ。私の事を知っているあなたは何者なんだ？　私は憑依者である彼に対して、更に憑依しているんだが」

「そうか。しかし、お前達の生きる意思は違うのだろう？」
　メビウスはつまらなそうに言う。
　まるで、全てを見透かしているような。
　光の男は顔を顰める。
「私はお前達、三名を始末する。お前達はこの世界にはあってはならないものだからだ。世界を構成するシステム。殺人や虚無よりも世界の構造を破壊していく”混沌”の可能性をお前達は有しているからな」
「混沌？　何の事かな？」
「お前達は何も生まずに。全てを無へと導いていく力を有しているという事だ。それはこの世界にはあってはならない。たとえ、世界中の者達全てを殺せる力を有していたとしても。本人の無意識下において、それを律しようとしているならば。私はその者を可能性の芽と見る。しかし、お前達は違う」
　光の粒は首を傾げた。
「言っている意味が分からない」
「そういう力に至っているという事だ。私はそれを突き止める力を持っている。その者達の下へと向かえる力をな。空間が捩れていくように。回転の軌道が分かる。私の力である『ウロボロス』の一端が、お前達のような存在を始末しようとする意思が働いているのだろうな」
　フェンリルは二人のやり取りを聞いていて、思考していた。
　おそらくは、メビウスの力は。運命の道行きなどを見れるのかもしれない。
　彼女には、力を持つ者達の可能性が見えるのだろうか。
　フェンリルは、光で出来た者、セイタンに関して分析を続ける。
　人の肉体を持っていないか。もしくは、本体は別の場所にいるのか。
　直観で見れば、おそらくは彼の肉体は実体がある。
　彼の能力はおそらくは自身の身体の一部を、光と融合させるといった処だろうか。
「何となく。分かってきたんだが、セイタンと言ったか。お前は本体を残しているのか？　それとも、肉体の一部を光と同化させて。此方にやってきたのか？」
　それを言われて、光で出来た者は唸る。
　そして。
　おもむろに、フェンリルはメビウスとセイタンの二人を残して、回廊を進んでいく。
　まるで、関心の全てを失ったかのようだった。
　メビウスも得心がいき、光の男を無視する事に決める。
　後に残った光の男は、大人しく絵画の中へと戻っていった。

†

「あのセイタンという男。何とでもなるだろうな」
　フェンリルは詰まらなそうに言う。

「問題は残りの二人……。先ほどから、何か見られているような気配を感じる。これは一体、何なんだろうな？」
　メビウスは頷いた。
　明らかに微妙な感覚で、視線の気配を感じている。
「シェリダーかデイエスとかいう奴の力だろうか。それにしても、不快だ」
　フェンリルは少し考えを巡らせる。
　背後をさり気に眺める。誰もいないが、視線を感じる。
　歩き方を変えてみて。相手の視線に対して、牽制を掛けてみる。
「別々に行動してもいいんじゃないのか。それぞれ別の敵を倒せばいいんじゃ？」
「お前は人を殺せるのか？」
　メビウスは訊ねる。
「その辺りは何とでもなる」
　フェンリルは邪悪な笑みを浮かべた。

†

　自分の中に進入してくるものを、全員、殺したい。
　けれども、殺せない。
　抑え切れない湧き上がる殺人願望と。殺人行為に対する嫌悪感。
　二律背反。
　そんな自分さえも、嫌っていて。自分の顔もまともに見れない時がある程、嫌いで。
　傲慢で歪んだ自己愛の塊で。
　けれども、そんなものを抱えて生きていくしかなく。変わらないという事を知っているから。自分は自分でしかないのだと。
　フェンリルは割れた鏡の破片を覗き見ながら。自分自身と対話する。
　結局の処。自分の自己愛は、他人からの強い否定的な感覚を感じ取っている為。好きになれる他人がいない為に、自己愛へと走る。
　いつになれば、自分を肯定出来るのか。
　自分という存在の重みに耐えられなくなりそうで。いつか、自分の思考や意志に潰されそうになるかもしれないが。それでも戦い続ける事を決意している。
　いつもいつも、人と会ってきた時には。
　シャワー・ルームの中で汚濁を流す。他者に触れられて、汚れてしまったんじゃないのかと思い詰めていく。
　他人と関わって気持ち悪かった日は。いつも長く湯船に浸かる。
　全てが汚らわしく感じる。
　何故、身体が男なのか分からない時がある。
　自分の持つ他人に対する敵愾心。

それは決して無くす事が出来ないのだろう。
その地点で戦っていかなければならない。
拒絶したくなる他人。
他人の言葉が気持ち悪い。
どうしても、他人の言葉の裏側を見透かそうとしてしまう。
自分を汚そうとするものは、全て敵なのだから。

†

コッペリアは鏡を見ながら、自分の顔を真似て人形制作に勤しむ。
何度も何度も事細かに刃物で粘土を削っていっては。顔を完成させようとする。
骨組みの上に、粘土をかぶせていく。
自分に似た模造品の少女。
彼女の頬に接吻する。
彼は自分が男であるという事が信じられない。
この華奢な肉体は、同性との齟齬ばかりを生んでいる。
どうにも、男とは分かり合えない。同じ性別の筈なのにだ。
少女のような姿をした男。
他にもいると、彼の主人から聞かされている。
コッペリアは、何処かで彼の事を意識している。会った事こそ無いが、極めて強い興味を惹き立てられる。
凛然としていて、強く気高いというイメージがある。そして、美しいと。
崇拝するメビウスから聞かされているフェンリルという存在。
彼とは会ってみたいと思っている。
コッペリアと同じような感覚を有しているのだろう。きっと。
一体、どんな話が出来るのだろうか。今から、空想している。
お互いに似通った少女趣味、きっと話しが合う筈だ。
コッペリアの創った人形は。街でよく展示されて、買い手が付く。
彼はいつも女だと思われる。
男だと疑われる事も多い。
同性から告白される事もあるので。それも困ったりする。

†

コッペリアはよく、フラッシュバックに襲われる。
眩暈がする。
自分はとにかく、傷付きやすい存在なのだと知る。

呼吸が荒い、心臓が脈打っている。
心の痛みをどうやって、みなに伝えよう？
それは身体をズタズタにしていく事だったり。声を使っての訴えだったり。
いつも亡霊的なものに蝕まれていく。
自分の背後に、亡霊が立っている。それは背筋が凍り付く程に恐ろしい。
生きている事が、どんどん不安定になっていく。
まるで、死の向こう側へと呼び込まれているよう。
どうしようもない、自分という存在の弱さ。きっと、それは生涯。乗り越える事は叶わないのだろう。ならば、どう。そのような生まれ持った弱さと戦っていく必要があるのだろうか。分からない。人一倍傷付きやすい、自分という存在。
自殺して終われば、解決するというものでもない。生きていかざるを得ないと選択している。どうすれば、苦しみは終わるのか。ずっと悩み続けている。けれども、生涯続いていくものだと分かった瞬間に。そのままの自分を認めて、覚悟を決めるしかないのだと知らされた。
ありとあらゆる場所に、傷跡が見える瞬間がある。それは自分の傷なのか、他人の傷なのか。もう、何もかもが分からない。
強くなりたくないとも思った。弱さの中で生きていたく。弱さを生きる事こそが、聖なる道を歩む事なのではないのかとも。
また、強くなる事など出来ないのだろう。自分は耐久度が余りにも人よりも脆過ぎる。
人が傷付かない事で、傷付く。
他人と共有出来ない感覚。それがどうしようもなく、圧し掛かってくる。
自分自身が重力から解き放たれていき、その後に。強い重圧に押し潰されていく。それが繰り返されていく。重圧と無重力を行ったり来たりしているような感覚。
解決出来ない他人の持つ暴力性。
どうすれば言葉の持つ感覚の共有出来なさを乗り越える事が出来るのだろう。

†

シェリダーは言語によって。世界の全てを理解出来ると考えている。
全ては文字の羅列によって理解し尽せるし。
彼の力である『アナテマ・シット』による他者への憑依を使えば、他者の体験してきた事も理解し、認識する事が出来る。
まるで、神になったような気分だった。
情報さえあれば、全てを掌握出来るのだ。
世界など、自分一人で動かせるし。他人なんて、自分が全て理解し尽くす事が出来る。
そんな風に彼は生きているし。幸福だとも思っている。
そう、全ては知識によって掌握する事が出来るのだ。
世界など、知識さえあれば。憑依してコントロールする事が可能だ。

だからこそ、彼にとって世界など極めて下らない。
何故ならば、全ては言葉によって語り尽くせるからだ。
彼に苦悩など無い。
只、倦怠的な人生を送り続けている。虚無にさえ蝕まれない。
彼は読んでいる本を、テーブルに置く。
ワイングラスに酒を注ぐ。
とくりとくりと、赤黒い液体がグラスの中へと注がれ続ける。
ロースト・ビーフが皿の上に並んでいる。
静かな晩餐だ。
ナイフを赤い汁が滴る肉の上に入れていく。肉の味が口の中に濃厚に広がる。
光の粒が浮かんでいく。
背後から、光に満ちた魔人がぼんやりと浮かび上がる。
セイタンが何かを喋り続けている。
彼も下らない男だと思っている。
何かしら、シェリダーに張り付いて離れない。
まるで、彼を呪うかのように囁き続ける。
このシェリダー、一体、何者なのか。セイタンは理解が出来ない。
只、おそらく。彼は“概念”なのだろうと思っている。
本で得た知識の世界。
セイタンはシェリダーの影のように現われ続ける。
まるで、シェリダーの世界を否定したいかのよう。
けれども、シェリダーは嘲る。この光の粒が凝縮された男には、何も出来ないのだと分かっている。

†

自分自身の抱えている闇。何度も何度も反復していくもの。生涯、消える事など無いのだろう。その上で生きていかなければならない。それは覚悟なのだ。
心の傷は決して埋まらないのだろう。
いつから気付いていたのだろう。自分は弱さに対する耐性が無い事に。
コッペリアはメビウスに認可される事によって生きている。
ひたすらに、粘土をこねて人形を作り続ける。
自分自身と格闘する為に。
文章や絵画や音楽で、自分との対話を行っている者達もいるが。
コッペリアの場合は、それが人形だった。
人形を見ていると心が落ち着く、自分でも作ってみたい。それが衝動だった。
これから先、ずっと傷付いていくのだろう。

　それは覚悟するしかないのだ、自分の存在を認めるという意味で。きっとそれが、自分が与えられた命の定めなのだろうから。そう、自分はそういう風にしか生きられないのだろう。コッペリアは深く、深く、他人の傷、心の傷というものを寵愛しているのだから。それこそが、神々しいまでの恩寵なのだから。

†

　自分の弱点。詰まる処、弱さを理解した上で戦うべきだ。
　フェンリルはシェリダーという男に興味が湧いた。
　この迷宮のような館の何処かにいる男。
　この館を支配しているような存在なのだろう。
　肉体という存在が気持ち悪い。
　全てを飛び超えたい。
　いつも、そう思っていた。自分は遥か彼方へと飛んで行きたいのだと。
　そこには、きっと自由が在るのだろうと。
　自分自身の内部にあるものは、一体、何処まで深く広がっているのだろうか。
　シェリダー。直感的な何かが告げている。
　自分にとって不快な存在なのだと。
　暗い屋敷の中を歩いていく。
　明かりの灯らないシャンデリア。
　何処までも続く紅いカーペット。
　遠くから見ると、館は小さなものに見えたが。いざ、内部に入り込んでみると。巨大でとても入り組んでいた。暗黒の海溝の中へと突き進んでいく感覚。
　ざわざわと得体の知れない者達が、囁いている。
　窓が風も無いのに、かたかたと揺れている。
　この場所にいるだけで不安定になってくる。いや、元々。自分は不安定な人間なのだ。
　それにしても、自分自身という存在が重過ぎる。
　この館に住んでいる者達の有する力。それらにはとても興味がある。
　自分という存在を乗り超える何かに繋がるのではないのだろうかと。
　只、今は負けたくない。そんな感情ばかりが湧き上がってくる。
　少なくとも、この館に住んでいる者達は生きる事に対して疑問を抱いていない。ひょっとすると、彼らには苦しみというものが無いのかもしれない。
　どうせ。自分は孤独をずっと生きてきたのだ。今更、何を恐れる必要があるのだろうか。
　それにしても、この暗い館の中では。まるで自己の内部にある暗闇と対面させられているような気分に襲われる。
　夜風が開いた窓から拭き抜ける。いや、今は果たして本当に夜なのだろうか。
　歩みを進めていく。

　きっと、これからもずっと独りなのだろう。それでも構わないのだと思っている。
　そういえば。
　館の中で、階段が見つからない。
　上へ昇る階も。下へ降る階もだ。
「さてと。どうしたものかな？」
　彼は口の中で呟く。
　かたかたと。置かれている石像の一つが動き出す。
「どうしようもないだろう？　お前は住民達を探しているのか？」
　フェンリルは面倒臭そうな顔になる。実際、どうだっていい。
　一応、誰何してみる。
「お前は」
「俺ね、俺はエピゴーネン。まあ、真似って意味だな」
「ああ、そうか。オレはお前には興味が無いんだが。お前の主人の誰かと会ってみたいんだが。教えてくれるのか？」
　石像は山羊の頭をしていた。
　背中には裂けた翼が生えている。鳥とも蝙蝠とも昆虫とも付かない翼。
「俺はお前を殺さなければならねえんだがな？」
「そうか。今度にしてくれ。それで、お前の主人の場所。教えてくれないのか？」
　山羊頭の怪物は。
　全身を三百六十度、捻じ曲げながら。
　フェンリルに襲い掛かった。
　右手の大きな鉤爪により、フェンリルの顔面を引き裂こうとする。
　まるで、揺らめく水の中を掴むように。怪物の爪は空を掴んでいた。
　フェンリルは。特に、移動したという様子は無い。
「牽制なんだろう？　お前の力は何なのかな？」
　フェンリルは淡々と訊ねる。
　山羊頭の怪物は口腔を広げた。
　真っ赤な孔の中から、大量に。魚や腐った植物などが零れ落ちていく。それらは、フェンリルの下へと飛び掛かり、這っていく。フェンリルは。
　いつの間にか、エピゴーネンの背後へと立っていた。
　怪物の全身に。無数の剣が突き刺さっている。
「お前ごときの相手などしている暇なんて無いんでな」
　彼は冷たくせせら笑う。
　こんな奴、本当に相手になんてならない。
　気付くと。黒白のドレスを纏った青年の姿が無い。
　完全に、相手にされていない。
　羊頭の怪物は、がぼがぼと。全身が裂けて、鳥や蝙蝠を発生させながら。怒り狂った。

　ぶわわっと、蚊や蝿などの羽虫を辺りに無数に撒いていく。

†

　やはり、この館は迷宮のように入り組んでいる。
　ひょっとすると、無限に広がっているのかもしれない。
　それにしても、どうしても違和感を拭い去れない。
　つねに何かから見られている気配は感じる。
　彼を監視している何か。それは一体、何名いるのだろうか。
　しかしそれにしても、視られていると思う事自体が。この館の構造なのではないのだろうか。そんな疑念も湧き上がってならない。
　フェンリルの持つ力。
　それは空間と空間の位置を転移させる。
　つまり、彼は瞬間移動の能力を持っている。
　それは、他の者には中々、無い力なのだ。
彼は異空間の中以外だと、見えていない位置も確認して移動出来るのだが。
　この館の中では、見えている位置しか転移出来ない。
　それにしても、また何体もの怪物達に襲われる事になるのだろう。鬱陶しいし、面倒臭い。適当に配置している駒なのだろうが。
「操っている三名は人間ではないとすれば、オレは殺せるのだろうかな？」
　決意を胸に生きたい。自分にはいつも覚悟が足りないような気がする。
　倒すべき敵は直感が告げる。
　自分自身の感情の波が激しい。
　どうにもならない衝動性をコントロールしないといけない。
　自分の持つ強い少女性と女性性。同時に、自分の軟弱さと女々しさは大嫌いだ。
　そういった不安定なバランスの中で、自己というものを確立していっている。
　結局の処。生き残る為には策略を練りに練って。しっかりと周りを見渡す力が在るかどうかという事だろう。そうでなければ、生き残れない。死へと直結するからだ。

†

　コッペリアの作る人形が街の美術展に飾られる。
　どれも見目麗しい姿をしている。
　球体関節人形というものは不思議なもので、ビスク・ドールやヌイグルミなどよりも、より奇妙で不可解なオブジェとして存在している。
　生き人形と言っていいのかもしれない。
　何よりも、人形という表現を使って自分自身の感覚が混ざるものなのかもしれない。

どれだけ痛みを、作り出す人形によって伝えられるだろうかと考えている。苦しみを悲しみを人形の中に押し込めている。
彼は他人の痛みに共感しやすい感受性を持っていた。
彼の人形を見に来て、見惚れる者達は、みなとても苦しくて悲しそうな顔をしている。
そういった者達に、少しでも元気を与えて上げればいい。そう思って、彼は人形を作り続けている。同時に、自分の苦しみを理解されない事も含めて。背負おうと。
彼は、誰よりも苦しまなければならない、そういった強迫観念にも襲われる。
アンティークの食器や棚の中に混ざり、コッペリアの創った人形が置かれている。
物悲しく、辛そうな印象を受ける人形。
退廃的な絵画のよう。それは、不可思議なポートレートのようだった。
彼の作り出す人形は、まるでこの世界には存在しない物体のように思えた。一見、禍々しく狂的なまでの恐怖感さえ齎すが、それでもなお見入られる。
あらゆる者達が、彼の作り出す人形を見て。様々な負の感情を投影していく、そこには苦悩が感化されていくのか。それとも、救済が得られるのか。まだ、分からない。
コッペリア自身が苦しく辛い体験をしてきたというよりは、彼は本の記録や他人の話などから、酷く辛い体験談を聞かされる事によって。それをまるで、自分自身が体験したかのように幻視する特性を持っていた。
他人と心が一体化していくかのように、苦しく辛く感じる。
彼は世界に満ちた闇を追い続けてきた。結果、心がぼろぼろになっていった。もし、このような特性が無ければ普通に幸福になれただろうに。けれども、彼は日々、世界中に満ちている痛みを心に刻まれる事によって生き続けている。
そんな事を人に言っても、伝わらない。他人の痛みは所詮、他人の痛みでしかないのだと返される。
生きる上で、痛みの重みが圧し掛かってくる。
コッペリア自身は、あまり話す事が得意ではない。只、イメージを人形という媒体に刻印しているのだ。
彼に光を与えてくれたのは、メビウスだった。
メビウスと出会ったのは、数年前だ。
彼に人形制作を教えてくれた。
メビウスの指示は的確だった。細かい作業の一つ一つが、コッペリアの頭の中に自然と入ってきた。
イメージとイメージを結合していく、自分の中で人形の形が固まっていく。自分の感じている世界観を完全に表現出来るように。彼は強い意志を持って、創作を続ける。
粘土を捏ね繰りまわす作業は、彼のズタズタだった心を落ち着かせてくれた。日々、入ってくる苦しみのイメージの反復から眼を反らす為に、粘土を無心に捏ね続けた。
そして、一体目。二体目と人形を作り続けていった。
最初は本当に自分が制作出来るのかと思い悩んだ。

苦しむ事を選んだわけじゃない。けれども、結果としてそういう風にしか生きられなかったから。ずっとずっと、自分の弱さと痛みは続いていくのだろう。
幼少時を思い出す。元々、傷付きやすい幼年時代を過ごしていた。
女の子達にさえも、小馬鹿にされた。泣き虫だねと。
自分は弱く生まれてきたのだ。それはもう、どうしようもない事なのだ。
人形制作に何時間も没頭しているうちに、朝になり、夜が来る。
制作の間、ずっと水ばかりで過ごしている事も多い。
だから、どんどん体重が減っていく。

†

セイタンは肉体を欲している。
正直、シェリダーには怒りばかりを感じている。彼には肉体があるのに、館の外に出る事無く。読書ばかりに耽っている。嫉妬心ばかりが湧き上がってくる。
セイタンは肉体を持たずに、生まれた。
この世界には、魂というものは存在しないらしいのだが。どうやら、自分は魂みたいな存在として生きているらしい。自分自身が謎ばかりだ。
彼は声を発したり、全身を強く輝かせたりする事は出来るのだが。たとえば、コップを持ったり、物を食べたりする事が出来ない。ひょっとすると、自分はまだ生まれていない子供であり、何処かの女の腹から生まれる前の存在なのかもしれない。
しかし、この意識が存在してから。少なくとも、数十年以上の年月が過ぎ去っている。その間、ずっとシェリダーは本を読み続ける事ばかりしている。そして、たまに自身の力を使って誰かの人生に憑依して、それを自分の人生として生きている。
シェリダーとは、一体、何者なのだろうか。
セイタンは思う。
セイタンには、強い劣等感がある。自分の存在に対してだ。
他人の人生が酷く羨ましく思える。
自分は何にも根差されていない。何処にも存在する事が出来ない。
只、彷徨う亡霊としてのみ生き続けている。
彼には、道が無い。何処に向かって行けばいいのか分からない。意思を持ってしまった時点から、彷徨い続けている。生きる目的は自然と培われるものだと聞く、けれども、彼には基盤が無いから道筋が見えない。
この肉体は、まともに他人に触れる事が出来ない。
それから、食事をする事も出来ないし。雨や風などの心地良さも知らない。
セイタンは人生を生きたいと思っている。自分の人生を。
この閉ざされた館の中から、抜け出したい。それを強く願っている。
だからこそ、相反するシェリダーを酷く嫌っている。見ているだけで嫌悪感が湧き上がって

くる、彼の厭世主義が大嫌いだ。
　何者なのか分からない男である、シェリダー。
　もしかすると、セイタン以上に実体が無い存在なのかもしれない。
　館に入り込んだ侵入者達、彼らは生きる意味も在るだろうし、何よりも肉体を持って動いている。妬ましい。

詩篇の四　光と空　－La blessure qui est repetee－

　暗い陰気な回廊が続いている。
　ぼうっ、辺りには鬼火が灯り出し。ガス状の生き物が漂っている。
　全部、彼にとっては無害だし。たとえ、攻撃的な何かを行ってきても、適当に対処出来るような奴らばかりだ。
「ふうっ。それにしても」
　他人を愛せない、自分しか愛する事が出来ない。
　そういった感覚は、きっと一生、抱えていくものなのだろう。
　そういう風にしか、他人を見る事が出来ないから。
　他人と同じようには、世界を見る事が出来ないのだろうから。
　嫌われる事よりも、好かれる事の方が苦し過ぎるから。
　きっと、誰も自分を見ていないのだろう。分かっている。
　抑え切れない、感情の反復。それは日々を重ねるごとに、募っていく。
　フェンリルはだから、他人を嫌う。自分らしく生きたいのに、生きられない。だからなのか、今の自分に好意を抱く相手を激しく憎む。違う誰かを見ているようで。自分の孤独は、他人との関係性によって、ますます深まっていく。
　全ては振り払わなければならない。
　他人を嫌わずにはいられない定め。本当は、自己否定が強過ぎるから。
　この世界がとても居心地が悪い。
　この居心地の悪さは、丁度。この館にとても似ている。
　無数の階段に突き当たった。
　螺旋を描いている。
　一体、この館はどれくらいの広さを持っているのだろう。完全なまでに入り組んでいる。
　まるで人間の大脳の中を駆け巡っているかのようだ。
　螺旋を描くような世界。思考という迷宮に入り込んでいくような感覚。つねに不安が付き纏い、押し潰されていきそうだ。
　勝手に自分の本質だの性質だのを、他人が決め付けると。自分が汚されて、死んでいくから。だから、自分が自分に為らなければならない。

†

　オルドルは高い時計塔の上に取り残されていた。
　あの石像の怪物は、彼を変な場所に置いていった。
　此処からは、巨大な館を見渡す事が出来る。
　聞く処によると、無限に広がっているように思えるが。相当、入り組んでいるだけで、実は館それ自体には、何の魔力も無いらしい。

もし、魔力があるとするのならば。館に入り込んできた者達の側に問題があるのだろうと。そういうものらしい。
止まった時計。
錆び付いた巨大な鐘が釣り下がっている。
まるで、自分の人生そのものだ。
全てが凍り付いてしまったかのような時間。
結局、自分は何者にも為れなかった。
四十を過ぎても、何者でも無い。
地位も名誉も、女も手に入らず。芸術の才能も無かった。
子供を育てたいと思った時期もある、でも駄目だった。女にとって、彼は魅力的な男性では無かったらしい。
彼は空ろな時間を彷徨い続けている。
停止してしまった世界。何処までも続いていく迷宮のような場所。
時計塔には降りの階段があり、そこには質素な家具が置かれている。
浴室や便所もあり。食料庫には干し肉やワインなどが置かれている。更に、ハーブ入りのソーセージや程よく発酵させたチーズのブロックも置かれている。
てっきりあの怪物は、自分を酷い目に合わせたいのだろうと。もっと言うならば、弄んで殺すのだろうとばかり考えていたが、まるで違っていた。
彼は、お前は俺と似ている、と奇妙な事を言っていた。
オルドルは小汚いソファーの上に座る。妙に居心地が良い。
寒空を歩いていたが、此処は妙に暖かい。室内は寒さを遮断する造りになっている。
それにしても、見当たらないのは時計だ。あるいは、日付を確認するもの。
紅茶を沸かす為のサモワールが置かれている。気が向けば、いつでも良質な茶葉の紅茶を口に出来そうだ。
何だか、ずっとこの場所に留まっていたい。
上質な煙草の粉とパイプ。
質素だが、細かな生活用品は一通り揃っている。ずっと、此処で生きていたいような感覚。壁には大きなガウンが掛けられていた。
ひょっとすると、このまま此処で老いて死んでいくまで過ごし続けるのかもしれない。
彼は何も無い、空っぽだ。倦怠な虚無に浸かっている。
このまま何も無いまま、寿命を待つのだろうか。
そもそも、自分が死んでまともに悲しむものなどいるのだろうか。しばらくは、親や昔の友人達とも会っていない。その日、その日をずっと適当に生きてきた。
こんな人生しか送れないんだろうと、幼少時から漠然と思っていた。実際、そうなっていた。
満月が絶景を照らし出していた。

†

　マレブランケは翼を畳む。
　彼の主人は、デイエス・エレと言う。
「あの、その。侵入者がいます」
　美貌の男はむっとしたような顔になる。
「客人と訂正して欲しいよ。俺は此処を訪れる者と対話がしたい」
　そう言いながら、彼は香水瓶を弄くっていた。
　そして、くるくると万年筆を指先で回す。
　大理石の机の上に、手紙の束を置く。
　そして、ぱらぱらと手紙の一つ一つを取り出して、じっくりと文字を眺めていた。
　何度も、何度も。心の中に染み込んでいくように。相手の言葉の行間までをも、読み取るように。相手の心の裏側にも踏み込んでいけるように。この男は、そういう風に。他人の文章を読んでいっているのだ。
　彼はどうやら、貰った女達から恋文をじっくりと読み返しているみたいだった。そして、ふうっと溜め息を吐く。
　石像は、そんな彼を尊敬している。
「迷い込んだんだろうなあ。それにしても、俺とシェリダーとセイタンは此処で奇妙な共同生活を営んでいる。俺は彼らの事がよく分からない。何故か、此処に流れ着いた。なあ、君。此処は何なんだと思う？」
「……マンションですよ。人々の想念が実体化されたマンション。此処の住民達は、何かしらの共通項が合って。お互いによく分からない存在にも関わらず、妙な共同意識を持っている。何てか、集まってくるんですよ。此処は」
「処で君は何で、俺をそんなに慕ってるんだ？」
「俺は貴方様の使い魔になりたいんですがね。貴方のお役に立ちたい」
「君は自分一人で、何かをしてみたいとは思わないのかい？」
　デイエスは不思議そうな顔で、石像を眺めていた。
「俺は誰かに使役されている方が楽なんですよ。そして、弱い奴をいびるのも正直、好きなんです。下らない奴でしょう？」
　デイエスは万年筆でさらさらと紙に文字を書き綴っていた。

†

　他人にとっては理解不可能な事で傷付いたりする。
　自分の脆さが嫌になる事が多い。
　やはり、此処にいると。不安定さに押し潰されそうだ、いつだってそうなのだが。
　フェンリルは、むうっと。眉間に皺を寄せた。
　そんな事を考えながら、彼はシェリダーに対して思考し続けていた。

今ある情報の中から、敵の力の正体を予測しておきたい。
ひんやりとした風が吹き抜ける。その後。
回廊にて。
風を刻むような音が響く。
フェンリルは壁に寄り掛かっていた。そして、顎に手を置いて、もう別の事を思考しようとしているみたいだった。
奇襲は完全に失敗した。
セイタンの顔面が、縦に割られる。
斬られた部位から、光の粒が広がっていく。
軌道がまるで見えない、その攻撃を避ける事は出来なかった。
フェンリルはあっという間に、彼の肉体を断ち割ったのだった。
セイタンの小細工など、まるで話にならなかった。
フェンリルの攻撃の軌道が見えなかった。
「オレはお前には興味が無いって言っているんだけどな？」
冷たい声音。
セイタンはぼうっと、発色を繰り返す。
「シェリダーっていう奴に興味がある。メビウスが探している“混沌なるもの”が一体、何なのか分からないが。オレはオレ個人の目的で動いているのだからな。というわけで、お前には何の興味も無い」
何の衒いもなく、本当に興味を無くされる。
ふっと。
セイタンの姿が見えなくなる。
フェンリルは、彼の能力もすでに分析していた。
おそらくは、大気と同化する事が出来るのだろう。光の肉体を有している男。
そして、こいつが大体、どういう事をしてくるかも。先読みしている。
「姿を隠すのはいいが。オレはお前を相手にするつもりは無いぞ？　透明になる力を有しているみたいだが。見えない何かで攻撃してきた処でも」
フェンリルは、近くにあった階段の下へと降りる。
身軽に、落下していく。
そして、奇妙な違和感が過ぎる。
セイタンは肉体を大気と一体化させながら、彼の姿を探した。
……黒白のドレスを纏った青年が消えている。
確かに、この辺りに隠れている筈なのだが。
セイタンは焦る。彼はあのフェンリルとかいう青年の能力を理解していないのだ。
何とか、あの青年の持つ力を見抜こうと思考する。しかし、分からない。理解が出来ない。セイタンは焦り始めていた。

†

　メビウスはシェリダーを探していた。
　自分の力である『ウロボロス』がかなり弱体化している。
　コッペリアはまだまだ人形作家としての実力が未発達だ。これから彼が成長していく事を望むしかない。
「駄目だな。歪曲の距離も速度も、以前よりも遥かに使い物にならない。さて、どうするべきか」
　しかし、目的は達するべきだ。
　混沌なるもの、それはメビウスが意思を持った頃からの戦うべき敵だというのが分かっていた。それを倒すのは、彼女の中に本能として備わっている。
　この世界のシステムを破壊しようとするもの。
　それを、メビウスは“混沌”であると認識している。全てを無価値化していき、人々の意思を奪っていくエネルギー。
　それは、決して到達してはいけないもの。
　それに至ろうとしている者達が、この館には集まってきている。おそらくは、此処はそういう場所なのだろう。いわば、“混沌の坩堝”とでも言うべき場所か。
　ウロボロスがもっと完全な状態ならば、簡単にこの館の構造を読み解く事が出来たのだが。それが出来ない。
「今の私は幕を引くべきなのかもしれないな。彼の方に任せたい処なのだが」
　おそらく、この館。増築に増築を重ねていった結果、相当、入り組んだ構造になっているのだろう。
「そうだな。コッペリアならば、何と言うのだろうか。彼ならば、こう言うのだろうな。此処に集まってきている者達は、弱さの塊であるのだとな」
　……。
　シェリダー。
　やっかいな敵だ。
　セイタンという男は、あちら側から姿を見せたが。シェリダーという男の方は、逃げ続けようとするだろう。この館の相当、奥深くにいる筈だ。
　自分やフェンリルが、果たして彼に到達する事が出来るのだろうか。
　拒絶を手にする男、シェリダー。彼は決して、全貌を明かさないのだろう。何処にでも行けて、誰にでも為れる。それは一体、どういう事なのだろうか。
　本を開いて、本の人物の世界を生きる事が出来る。それが、あの男だ。
　彼はある時は、貴婦人にも為れて、道化にも為れて、国王にも為れて、歴史の偉大な人物にも為る事が出来る。発明家にも数学者にも、法律家にも料理人にも何にでも為れる。
　それこそが、世界を逸脱して、無価値を与え続けるという事なのではないだろうか。
　メビウスはシステムだ。本当の意味において、システムが行うべき事は人々が思考し、悩み続

ける事だと思っている。
　フェンリルにも、コッペリアにも戦って欲しい。戦い抜いて欲しい。
　それが、可能性を作るという事なのだからだ。
　メビウスは赤い部屋の中に入り込んだ。
　部屋中が赤で埋め尽くされている。絨毯や壁も。窓枠も。シャンデリアも赤い。
　メビウスは人間で言う処の、眉間に皺を寄せる、といったような微妙な表情になる。
　この部屋全体から、違和感が漂っている。
　誰かが住んでいる形跡も無ければ、何か意図的な理由で部屋をデザインしたというのも考えられない。
　答えは一つなのだが、問題は。
「どういう攻撃なのかな？」
　彼女はウロボロスを発動させる。
　辺り一帯に、捩れの空間を作り出していく。
　どうやら、分かった事は。
　部屋が少しずつ、狭まってきている。彼女に気付かれないように、少しずつ。
　そう、おそらくは此処は巨大な口なのだろう。
　メビウスは下らなそうな顔をする。
　ウロボロスが幾ら弱体化しているとはいえ、この程度の敵は相手にならない。相手をする気にもなれない。ウロボロスで回転による防御を作り続けていれば、まず攻撃が到達する事など無いのだから。

†

「腹が減ったな」
　フェンリルは何処からか、サンドイッチを取り出して。口に運んでいた。
「少しベーコンに塩分を入れ過ぎた。レタスも水気が足りない。しかし、チーズは絶品だな。トマトの味と溶け合って口の中に染み渡る」
　彼は手に付いた脂を煙たそうにしていた。
　光の肉体を有した男、セイタンはしばらくの間。彼と追いかけっこをしていた。
　セイタンは半分、苛立ちながらも。段々、彼と会話するのが不思議と楽しくなってくる。
　何処かしら不可思議な魅力を感じているからなのか。
　掴み取れない感覚、掌握出来ない心の中。
　まるで、彼の思考は理解が出来ない。人を食っているようでいて、本当にどうだっていいような。あるいは、他人なんて初めからどうだっていいかのような。
　彼は振り返る。
「処で。お前って、何か。物とか食えないのか？」
　セイタンはむうっと、唸る。

「そう、それだ。俺はそれが羨ましい。お前ら肉体の在る奴が憎くて仕方が無い。俺はお前らが大嫌いなんだ」
　ふんっ、とフェンリルは嘲る。
「オレと間逆なんだな？　オレは自分の肉体が気持ち悪くてな？　成る程、そういう感覚というものもあるものなんだな？」
　くくっと、フェンリルは笑う。少し、自嘲的に。
「シェリダーとやらの居場所を教えて貰おうか」
　黒白のドレスの青年は詰まらなそうに言う。
　鋭利で怜悧で、高圧的な口調。
　相当なまでに、傲慢な性格をしているのだろう。強い自己否定を持っているみたいだが、他人を嫌悪し、馬鹿にさえしているように思える。
　鋭い目線。光の男は首を捻る。
「そうしてやりたい処なのだが、どうにもならない。本当は俺が奴を殺してやりたいくらいなのだが、お前は奴に辿り着けないだろう。お前がシェリダーを殺すつもりならば手を貸してやりたいくらいなのだが……」
　ふーん、とフェンリルは考える。
「成る程……。相当、やっかいな力の使い手なんだな？」
「そういう事だ……」

†

「彼はな。俺が誰よりも明晰であり、賢明で。そして、誰よりも強いのだと言っている」
　セイタンはもったいぶったような口調で述べていく。
　明晰、賢明、強い、という言葉のイントネーションを強く上げて喋る。
　それを聞いて、フェンリルは笑い転げた。
「そうか。そういう種類の人間か。滑稽だな？　そういう種類の人間の下らなさをオレは知っている。知性という観念ばかりが肥大化していって、結局。誰からも逃げまくる。結果として、誰とも対決しようとしない。そんな処か？」
「いや、シェリダーは実際、強いぞ？　彼の持つ力は『アナテマ・シット』と彼自身が呼んでいるのだが。あれは中々のものだ。少なくとも、俺にはどうする事も出来ない」
「ふーむ」
「まず、他人に“憑依”する。そして、他人の行動をコントロールしていく。そして、挙句に“他人の人生”さえも、自分のものとして歩いていく。だからこそ、彼には全てが下らなく思えるのだろう。彼は書物や知識、情報を媒介にして、他者に憑依する事が可能なのだからな。かなり、やっかいな相手だと思うぞ？」
　フェンリルはそれを聞いて、首を傾げた。
　何か、疑問に思っているかのよう。

　セイタンは何度も、肉体を弾け飛ばしたり。収縮させたりを繰り返す。
「お前の能力じゃ駄目なのか？」
「俺の力である『アバター』じゃ駄目だな。俺は物質に浸透する事が出来るのだが、彼の力を潜り抜ける事が出来ない。俺もまた、憑依されて操作されてしまうからな」
「お前はどうやって、殺すつもりでいるんだ？」
「色々あるが、たとえば俺は光の中に俺の持つエネルギーを混ぜて。それを膨張させて、結果として。物質を弾け飛ばす事が可能だ。つまり、俺は現象として物体を自分の肉体の一部に変換する事によって、所謂、爆破させる事が可能なんだな。しかし、シェリダーには通じない」
「そして、お前はお前の能力を敵である俺に教えてどうするんだ？」
　フェンリルはにやにやと意地の悪い笑みを浮かべていた。
　セイタンは引き攣った笑顔を浮かべる。
　彼は自分の力を明かそうとしていない。セイタンは彼の力がどのような働きをするのか理解が出来ない。
「オレはお前も倒すべき敵として、認識しているつもりでいるんだけどな？　さてと、お前は多分、能力の全貌を明かしてしまったんじゃないのかな？　そして、オレに妙な協力を求めていると。それって、ひょっとして。かなり間の抜けた行為なのかもしれないぞ？」
　セイタンはますます、顔が引き攣っていく。そして、彼から少し距離を置き始めた。
　こいつ、本当に食えない……。
　親しく話し掛けてきたと思ったら、含みの在る事を言ってくる。おそらくは、彼はセイタンともう戦うつもりなど無いのだろうが。それでも、不安を感じずにはいられなくなる。
　相当、色々なものを見透かそうとしているかのような。
「メビウスという奴。オレと一緒に来た奴は、お前ら全員を始末したがっているらしいが。オレは自分の存在の目的を探しに此処に来た。オレはまあ、言ってしまうと。“旅人”なんだろうな。まあ、それはいいとして。メビウスやお前の話を聞いて、シェリダーという男は。何と言うか、腹が立つな？　だから、協力してやってもいい」
　フェンリルは壁にもたれ掛かる。そして、何かを熱心に思考しているみたいだった。
　セイタンはおそらくは、彼は色々と策を練っているのだろうなあと感じた。
　そして、そんな彼の思考には触れられない。彼は他人に自分の内面を明かさない事によって生きている。
「観念は何処まで他人を理解する事が出来るのだろうな？　たとえば、オレは哲学書などを熱心に読む。しかし、中々、生きる上で役に立たなかったりする。そして、オレはオレの持っている能力と本から得た情報を組み合わせながら生きている。まあ、知識と体験は違うのだと思い知らされるのだが。それにしても、そのシェリダーって奴。成る程、そいつは強そうだな？」
　セイタンは、彼を図書室の中へと案内する。
　埃やカビの臭いで満ちている。フェンリルはしかめっ面をしながらも、本を手にしていく。
「この館には誰が張ったのか知らないが。色々なトラップが仕掛けられている。みな、それぞれ好き勝手な思惑で過ごし、生きているからな」

「ふーん」
　彼は詰まらなそうな顔をしていた。有名な世界各地の古典文学などを漁っている。
「当然、この図書室の中も。何か罠が仕掛けられているのかな？」
「それは分からん」
　セイタンは彼の周到さに唸る。
「石像の怪物と山羊の化け物に襲われたんだが？」
「ああ……マレブランケとエピゴーネンか。奴らは多分、デイエスの信奉者なんだろう。デイエス自身はどうでも良さそうにしているが。彼らは何と言うか、強い物に媚びたがるタイプで。弱いものを嫌っているタイプの連中だからな」
　フェンリルは本当に、興味無さげな顔をしていた。
「下らないな、何故。自分自身が強くなろうとしないんだ？」
「それこそ、自分自身の人生を生きていないからなんだろよ」
　セイタンは吐き捨てるように言った。
　同属嫌悪そのものだ。せめてもの救いは、少なくともセイタン自身は独立した自我を生きていると思っている。他人を支柱にして生きているわけじゃない。
　そう、シェリダーなんて。存在していないのだと思いたい。
　思いたくて、自分は存在しているのだと。
「お前、何で自分の人生を生きられるんだ？」
　光の男は黒白の青年に訊ねる。
　フェンリルはよく分からないといったような顔をする。その後、少し顎に手を当てて答える。
「負けられないから。女々しくありたくない」
　彼はそれが自分の中では、当たり前のようなのだ。
　決して、他の者達には混ざらないが。けれども、自分を規律する意志だけは何処までも何処までも強くある。
「俺は男の人格だが、性別が無い。肉体が実体として存在していないからな。だから俺は人生に目的を持つ事が出来ないんだ。俺はお前ら人間が羨ましく思える。いや、恨めしいのかもな？」
「ふん」
　フェンリルは髪をかき上げた。
「お前はオレの欲しているものを持っている。しかし、お前にとっては他人が恨めしい。馬鹿みたいだな？　相当、滑稽なんだろうな」
　彼はまるで貪るように本を読み続けていた。
　そして、意味有り気な視線を光の男へと向ける。
　その瞳は霊廟のようで、暗礁のように此方の心の内に踏み込んでくるかのよう。
「お前、ひょっとして」
　セイタンは何かに気付いた。
「みんな嫌いなんだろ？　本当に。どういう事なのか分からないぞ、俺には」
「そうだな。あるいは自分も嫌いなのかもな？」

　彼はセイタンの方を見ようとしない。
「それにしても。オレは何も出来ずに死んでいくだけの人間には為りたくなくてな？　まあ、自分自身。他人に触れられるつもりは無いのだが」
　セイタンは微妙そうな顔をした。
「ああ、処で」
　当たり前のように告げる。
「勿論、お前も嫌いだ。下らない」
　フェンリルはふふんと、笑った。
「それにしても肉体という牢獄に閉ざされているオレと。精神という牢獄に閉ざされているお前、どっちが幸せなのかは価値観の違いなんだろうな？　まあ、それも下らないが」
　そして、彼はぽん。と何かを閃いたかのようだった。
「ああ、そうだ。決めた」
　楽しげに笑う。
「セイタン。お前もメビウスも、シェリダーも。全員、粉砕してやる。オレは殺せないけれども、お前ら全員が嫌いだから。何の衒いも韜晦も無く言える。さてと」
　彼は少し鼻歌交じりになる。
「ああ、お前はもういい。興味を無くした」
　ふん、とフェンリルは図書室を出て行く。
　セイタンは呆然としていた。
　完全に、彼を掴み取る事が出来ない。もう何も分からない。
　理解しようと思えば思う程、離れていく。

†

　釣り下がった無数の手足。全てが人形のパーツだ。
「メビウス様、僕。ちゃんともっと良い身体を創り上げて、貴方に差し上げます。貴方の望む人形作家になりたいのです。貴方は僕の存在理由なのだから、僕は貴方の為に生きている」
　メビウスは彼の事をとても良く言う。
　人形という媒体でしか自分を表現する事が出来なかった少年は、創る事以外には何も出来ないのだと項垂れる。創れなくなった時点で、メビウスを含めて、誰からも必要されなくなるのだろうからと。
　この世界に内在している。みなの心の傷を何処まで引き受ける事が出来るのだろうか？
　彼は惑い、迷う。自分に何処まで出来るのだろうかと。実際、重過ぎる使命を与えられているような気さえする。だから、彼は自分の才能を信じて、創作に打ち込み続けるしかない。それ以外は何も無いのだから、それ以外に出来る事は実質、何も無いのだから。
　つねに不安と戦ってきた、息苦しさとも。
　自分が何でこんなに傷付きやすいのか分からない。

　思えば幼少時からだった。よく泣く子供だった。
　男の子でいる事が何だか辛過ぎた。
　気晴らしに小説でも読む事にした。
　難しい言い回しや単語が使われていない冒険小説だ。
　中身が入ってこない。
　今、酷く不安定だ。打ち込んでいるもの以外に集中する事が出来ない。

†

「まあ。多分、オレだったら何処に隠れるかって話なんだろうけどな？」
　フェンリルは髪を弄くる。
　やはり、もう少し金色と銀色のコントラストを深めたい。
　自分自身の姿に対する執拗なまでの完璧主義。自分で自分を理想の存在へと変えていきたい。
　自分で自分を規律する。それが他者に汚されないという事なのだから。
　独りで戦い続けるしかないのだと、分かっている。
　誰かに動かされる為に生きているわけじゃない。
　フェンリルは自らの髪を撫でる。
　隣には、全身の部分部分にナイフを突き刺された漆黒の毛並みをした熊の怪物が横たわっていた。致命傷は適当に避けて刺し込んでいる。
　彼は激痛でのたうち回っていた。
　最初、人間の男だったのが。巨大な熊の姿へと変貌した、獣人といった処だろうか。
　彼は一体、どんな攻撃を受けたのか理解出来ないみたいだった。
　只、気付けば。全身にナイフを刺し込まれていた。
「化け物ばかりの屋敷だが。面倒臭いが、デイエスって奴に最初に会っておく必要があるのかもしれないな？　シェリダーの居場所を知っているのかもしれない」
　フェンリルは熊の怪物の頭を踏み付ける。
「痛いだろ？　脂肪が多めの辺りに刺し込んでみて。まあ、後遺症は残らない。ナイフも小型のものを使っている。でも、オレはお前の首を切り落とす事も出来るわけだが。お前ら化け物共を統率しているのは、デイエスって奴なんだろう？　さてと、そいつの居場所を話して貰おうか」
　半ば命令口調だ。有無を言わせない感じ。
　ぐううううっと、獣人は唸り声を上げている。怨嗟のような、気だるさのような微妙な声音。全身に走る激痛を何とか和らげたいのだろう。
「で、デイエスって奴は何処にいる？　出来るならば、シェリダーっていう奴も探したい処なんだけどな？」
　獣人は小さく吼えた。やがてそれは小さな悲鳴へと変わっていく。
「此処から真っ直ぐ進むと。右に曲がる。その後、階段が四つあるから右から三つ目。それからドアが七つある。その四つ目……」

　その後も、延々とこの迷宮におけるデイエスという男の住む部屋へのルートを言われ続ける。
　フェンリルは覚えるのが面倒臭いので、メモを取っていく。
「成る程。よく分かった。もう眠っていろ」
　彼はこの場から消えた。
　大熊は彼の姿を探す。見つからない。
　そして、ふと。大熊は再び、地面に倒れた。
　彼の背中から、べりべりっと、男が這い出してきた。
　彼は顔を包帯で覆い隠して、マントを被っている。
「中々、手強いな……」
　そう、呟いた。
　その後、ばっと雲散霧消する。
　獣人は呆けていた。一体、何が起こったのだろうかと。
　そして、ふと気付いた。
　あの包帯の男は……。
　かつて、自分が人間だった時に出会った事があるような気がする……と。

†

　セイタンは館の中を浮遊し続ける。
　彼の肉体の構造は光の粒子であり、壁などを透過する事が可能なので。この館は迷宮としての構造を持っていたとしても彼には何の障害にも為らない。
　彼はそのままメビウス･リングの方を探し当てていた。
「決めたのだが、私はお前は可能性だと判断したから。始末するつもりは無い」
　セイタンは面食らっていた。
　メビウスは詰まらなそうな顔で、光の男を眺めていた。
　捩れた髪の女は、そう断言する。
　セイタンは全身が分裂して、発光を強める。
「おそらくは偶発的に生まれた産物がお前なのだろうな？　お前からも強い混沌の影響が見られたのだが。それは感じなくなった。よって、お前は始末対象から外す」
　強い断言。何かを理解しているような感じ。
　彼女は興味が無さそうに別の部屋へと向かっていった。
　セイタンは思い切って、訊ねた。
「一緒にシェリダーを倒さないか？」
　訊ねてみる。
「お前じゃ無理だろう。私かフェンリルでやる」
　本当に詰まらなそうな声になる。
　セイタンは、ふと気付く。

　自分は誰にも存在を赦されていないんじゃないのかと。それは何処までも自分が無意味であるのだと告げられているようなものだ。
　そうやって生きていくのは苦し過ぎるし、全てが空っぽに思える。
　実際、自分には何も無いのだと気付いている。
　他者の温もりが分からない。人は他人と関わって生きていく、それが彼にはとてつもなく羨ましい。
　そう、セイタンは人間に為りたい。人間としての人生を歩みたい。
　この肉体は、あまりにも欠陥品なのだ。
　彼は誰にも相手にされていない。
　きっと、それは肉体が無いからなのだろうか？　あるいは彼の持つ言葉に重みが無いからなのだろうか？　自分の歩むべきもの、欲しいもの。セイタンは思うのだ、きっと人間は肉体という限界があるからこそ、意思があるのだろうと。
　セイタンが羨ましがっているもの。
　肉体という存在。
　それが無ければ、彼は所詮。観念の産物に近くなってしまうのだから……。

詩篇の五　閉じた意思　－Huis clos－

　嫌悪の先には何が在るのだろう。
　この先にはデイエスという男がいる。
　ノックはしない。
　只、足音を立てている。扉の向こう側の相手にも彼の存在が伝わっている筈だ。
　どんな能力者なのか、正体不明だ。
　そろそろ、人を殺すという覚悟をするべき時なのかもしれない。ずっと、自分は卑怯だと思っていた。重圧が全身を覆っていくかのよう。
　心の中に、刃を作り出していくようなイメージ。
　彼は“扉を開けずに”部屋の中へと入った。
　その男はすらりとした長身だった。
　透き通るような金髪を伸ばしている。
　頭には月桂冠のような髪飾りを嵌めている。
　確かに、美しい男だ。神話に登場する美男子や美の神を想起させる。
　けれども、不快だ。とてつもなく、不快だ。
「お前がデイエス・エレか……」
「やあ」
　男は飄々と笑顔で返す。
「オレはお前を始末しに来たんだけどな？」
　冷たい煌きが空間を滑る。
　問答無用で。
　フェンリルはデイエスの目の前に、いつの間にか手にしていた剣を振り翳していた。
　デイエスは咄嗟に、壁に掛けられていたレイピアを手にして。それを防いでいた。
「中々やるな？」
「はは、君こそね」
　デイエスの右頬に渾身の蹴りが叩き込まれる。彼はそのまま机の上に叩き付けられる。
　彼は唇から血を流す。
「お互い顔は大事だろ？　顔を狙うのは止めてくれないかな？」
「オレの顔は大切だが。お前の顔は潰れていいな？」
　フェンリルは何の容赦も無く。彼の顔面に膝蹴りを打ち込んだ後、更に胸元を踏み潰すように蹴り付けた。
　そのまま、デイエスは動かなくなる。
「と、普通だったら。次は喉下を切り裂いて止めを入れておくんだが。本来ならば、オレはもっと強い筈なんだが……」
　いかんせん、……殺せない。
　どうしようもない、超えられない自分自身。

　彼は少し、思考し。眉間に皺を寄せた。
「で、お前は今、一体。何をしているのかな？」
　フェンリルは面倒臭そうな顔をする。怯む事無く、凛然と目の前の男を見据えていた。
　既に、この男が攻撃を行っている事に気が付いている。
　部屋の中がどろどろと溶けていっている。
　溶解の攻撃ではないだろう、とフェンリルは踏んでいた。幻覚的なものでもないだろうと、もっと違う何かだ。それを理解して、分析する必要がある。
「君は人を好きじゃないんだろう、見れば分かるよ」
　デイエスは余裕のある声音で言う。
　フェンリルは下らなそうに彼を見下ろす。
「自分と他人を隔てるものが何も無くなる。さて、俺の『ディストラクション・トータル』は一体、何をしていると思う？」
「さてと、何をしているのか。身体に訊ねてもいいんだけどな？」
　フェンリルはするり、と脚を動かす。
　長身の美形の全身が、再び壁に叩き付けられる。
　フェンリルは、何の躊躇も無かった。まるで自分自身の嫌悪している部分を破壊したいかのよう。
　おそらく、彼の能力は……。フェンリルは思考する。
　そして、再び彼の顔面に蹴りを入れる。
「シェリダーの居場所を知らないか？」
　見下しながら、訊ねる。
　フェンリルの周囲を、泡のようなものが渦巻いている。
　彼は少し、溜め息を吐いた。
「お前の能力は、大体、分かった。つまらないな？」
　フェンリルは余裕を持って、背中の屈伸運動を始める。
「それにしても、お前。ナルシストだろ？　オレもそうだ。何か同属嫌悪が湧き上がってくるんだよな？」
　それを聞いて。くっくっくっ、とデイエスは笑い続けた。
　それは、心の中に反復するように突き刺さっていくかのような言の葉。
「君は何で、そんなに自分の容姿を否定するのかな？」
　デイエスは困ったような顔で、フェンリルに問い掛ける。
　まるで、同属を見ているかのように。
「お前ごときに何かを言われる筋合いは無いんだけどな？」
　フェンリルは強い敵意を美丈夫に対して向ける。
「ふふっ、強がっちゃって。可愛いなあ」
　フェンリルは、この優男をしげしげと眺めていた。
　おそらくは、かなり相手の心を掌握する事が得意なのだろう。

「で、お前はオレを馬鹿にして楽しいのか？」
　思わず、悪態を付いてしまう。
　癇に障るような声音。
　彼に対しても、何かが腹が立つ。
　大体、どいつもこいつも嫌わずにはいられない要素を持っているのだが。
　特に、こいつは何かが心底。嫌いなのだ。
「お前、オレを分析し尽したいみたいだが。オレは自分の性格的な弱さも。能力の性質の弱点も全部、考え抜こうとしているからな？」
　こいつは危険だ。
　おそらく、こいつは男でも。精神的に操作される。
　果たして、それが彼の持っている異質な能力なのか。生まれ持った特性の一つなのか。
　自分という存在を魅了させる。意識は溶解して、彼のイメージが入り込んでくる。そうやって、他人は彼に心を支配されていくのだろう。
　他者の意識に憑依していき、他者の意識を自分の物にしていく。
　彼は自分の肉体も。精神も信じ切っているし。異性にとっても強い魅力的な存在なのだと信じて疑わない。
　彼の虜になった者は。生涯、彼を信仰して生きる事になる。
　それは女性に限らず、男にとっても。悪魔的なまでに彼の美貌に憑かれる。
　長く伸びた金色の髪。
　魔性の美だ。
「君は俺の顔を蹴り飛ばす時、無意識の内に手加減している。ほら、歯の一本も折れていない。それは自分自身がやられたら嫌だから、と無意識下で思っているからだろう？」
「……オレが人を殺せない理由も、その理由の延長線上なのかもな？」
　ふん、とフェンリルは鼻で笑う。
「瞬間移動なんだろう？　君の力は」
「意識と物質を溶解して、融合させていくんだろう？　お前の力は」
　二人は互いを凝視する。
　交差していく。お互いの視線が、刺々しく痛い。
　多分、こいつは本当に沢山の女が好きなのだろうなあ、と思った。
　フェンリルは他人が好きという感覚に戸惑い、迷う。ひょっとすると、正しく生きているのは目の前のこいつの方ではないのだろうかと。
　だが、フェンリル自身、正しさを生きるつもりなど、まるで無い。そこには、何の迷いも無いのだから。立ち向かう事に対して、迷う事など何も無い。
　何で、そんなに他人を強く愛せるのだろう？　いや、異性をなのか？
　強く深い、拒絶感が湧き上がってくる。
　おそらくは、すでにこのデイエスの能力をこの身に受けている。彼の思念のようなものが入り込んできている。

「ふふっ。君の心を掌握し始めているよ。心と心で繋がる、それが」
「成る程な」
　フェンリルは彼を見上げる。腕を強く組む。
「心を支配して、相手を言いなりにさせる力か。下らない。お前ごときにオレは敗れない。馬鹿だな？」
　デイエスの腰は、強く踏み潰されていた。異様な音が響く。
　彼は流石に、苦痛で呻く。
「分かりやすく現すならば、サディズムとマゾヒズムとやらの関係として心を拘束する力とでも言うべきか。けれども、お前の下らなさは。人間の意志というべきものを馬鹿にし過ぎなのだろうな？」
　フェンリルは、心底。侮蔑の篭る眼で彼を見据える。
「それにしても、お前のどうしようもなさは。人間は同じ感覚を共有する事が出来るわけが無いにも関わらずに、他人を所有しようとする。愚かだな？　そうやって自分を崇拝する他人を幾ら集めた処で、そんなものにどれ程の意味があるのか分からないが。けれども、他人を所有する事の無意味さに何故、気付かないのか理解出来ないが」
　相手にするだけの価値が無い。
　そうだ、シェリダーというのを探そう。こいつは多分、情報を知らないのだろう。
　本当に馬鹿みたいな男だった。そうやって、他人の心を掌握して、支配する事に何の意味があるのだろうか。そんなもの、敗北の上に敗北を重ねていく事に過ぎないのではないのかと。そう、少なくとも、こいつは現在を生きていない。
　過去も未来も生きていないのかもしれない。
　閉ざされた空間の中で、何処か違う世界に閉じ篭っている。
　彼は実際に、女性達と対峙しない。それは彼の弱さ故だ。
　文を送って、言葉だけで彼女達に接する。
　そうやって、彼は満たされている。
　彼は言葉以外は、観念だけで生きているのだ。
　心の中のもやもやが取れない。攻撃を食らったからだろう。
　それにしてもと、彼は思った。
　あの男、本当に。女々しく、弱いのだろうなあと思った。そうやって、他人という存在に認められる事でしか自分の存在を肯定出来ない。下らない。
　自分自身が掲げた自己愛は、自己憐憫なんかじゃないのだと、思いたい。

†

　共感したつもりが、全ては分からず。自分も何も伝えられず、自分自身もまた、他人の痛みをまるで理解していないんじゃないのかと。
　コッペリアは思い、悩む。

自分自身を刻み込んだ、命の模造品。
結局の処、人形制作とは自分自身の中のものを吐き出しているに過ぎないのじゃないかと。けれども、無数の傷に蝕まれていく。小さなナイフで人形の顔を削っていく度に、自分の顔を削っているような気分になる。整形手術の投影のよう。
自分で自分の顔を作り変えていくような感じ。
自分に出来る、可能な限りの感情を、感覚を、人形の中へと閉じ込めていく。
彼はあらゆる芸術作品の中から、自分の感覚に近いものを取り出していって。自分の感覚と融合させていく。
自分の中の本物を創りたい。
それは自分の中に眠っているものなのだろうか？　それとも、世界に散らばったものと、もっともっと対話していって。やっと辿り着けるものなのだろうか。
コッペリアは美しかった。眼も眩むような美少年だった。
紅い唇。宝石のような両眼。雪原のような肌。
彼自身が置き物のよう。
自分自身の傷を表現しているのだろうか？
何故、自分自身を追い詰めて、傷を重ねていくのだろうか？
コッペリアは、傷付く人を救いたい。だから、人形制作を続ける。けれども全てが独り善がりでしかないのではないんじゃないのかと。
他人の傷なんて分からない、全て自分の傷でしかないんじゃないのかと。
分かり合えないんだ。
涙を粘土の上に零し続けて、制作を続ける。
彼自身の心が弱いのだから。他の人間が傷付かないような事で傷付く。たとえば、態度の小さい移り変わり、声の威圧感。
コッペリアにとっては、恐怖の対象。
他の者達が恐怖しないものに対して、恐怖して。他の者達が傷付かないものによって傷付いていく。だからこそ、この世界は自分を傷付けてくる暴力によって満ち溢れているように思えた。
イメージが心の奥底まで、反復していく。大きな闇が重量を持って、迫ってくるかのようだった。

†

あの青年。
彼の言葉に少しずつ、蝕まれていくよう。セイタンは図書室の中を彷徨っていた。いずれは、この館を抜け出していかなければならないのかもしれない。しかし、彼には基盤が無い。生きる指針が何も無い。
あの青年の持つ強い意志と、自分自身に対する迷い、葛藤。それはセイタンにとっては無い強い生きる意思のようなものだ。正直、恨めしい。

確固たる生き方の指針を持っている事、その意思の道筋に沿って生きられずとも。それでもなお、彼は自分の意志を曲げはしないのだろう。
何千、何万とある蔵書。
それらを何の活用もする事など出来ないのだ。この館に閉ざされて、時間ばかりが流れていくだけなのだから。
文字は所詮、インクの羅列でしかない。その中に世界観は根付いているが。結局の処、自分の人生を何も生きてはいない。
図書室の天蓋の辺りには、空が見える。翼を生やした男が飛んでいる、マレブランケだ。彼は従者になりたいという目的を抱えながら生きている。
彼の主人であるデイエスは女達に、恋文を送り続けている。
セイタンは只の彷徨う亡霊のようなものだ。
本を開くと、人間の事ばかり書かれている。人間では無い彼は、人間の生活など分からないし、人間と違う肉体構造をしている為、人間の生活や人生というものを本当の意味では理解出来ない。つまり、人間というものは彼にとっては、理解不可能な認識の外側の存在なのだ。

†

フェンリルは思う。
孤独にも色々な種類があって、孤独同士は分かり合う事など出来ないのだろうと。
シェリダーを探そう。殺害するのはメビウスの役割だ。彼の場合は、適当に戦って適当に勝利すればいい。
此処の館にいる者達は、みな自分自身を守ろうと殻に閉じ篭っている。
乗り越えない弱さを、部分部分に持っているんじゃないのだろうか。
フェンリルも持っている、弱さをだ。だが、全ては誤解であるのかもしれないのだとしても。
館に向かう。
此処にいる者達は、それぞれあらゆるタイプの孤独を抱えているのだろう。
誰とも共感するつもりなど、無い。
自分の孤独は、自分一人の孤独なのだから。

†

ラハブは満月を眺めていた。
大きな釜を茹で続けている。隣では、ぱたぱたと蝙蝠が飛び回っていた。地面では、芋虫や団子虫などが立ち上がって歩き回っている。
虫達は、きゃきゃっと、踊り回っていた。
館から数キロ離れた場所。
くるくると、鍋を棒で掻き混ぜている。

時間の中から、切り離された場所であるこの空間は。延々と寒空が続いていて。
静かな刻限。
流れる時間を、風のように嗅いでいく。
夜会は続いていく。
狼達が彼の周りを踊るように走り回っていた。
箒達が踊り回っていた。ラハブは静かに天空を仰いでいるかのようだった。
静謐な世界が辺りを包み込んでいく。
ぼんやりと、光の粒が空中に集まっていく。
「セイタンかい。君はどうしたんだい？」
ラハブはなおも、釜を掻き混ぜ続ける。
「俺は此処を出てみたい。お前は外を知っているんだろう？」
「ああ。僕は境界に立っているようなものだからね、生者と死者の。それにしても、君は肉体が無いんだ。誰かを依り代にするとかはどうなのかな」
長い魔女帽が、空へと伸びている。
光の粒が辺り一帯に漂っていく。
光の男は、ぼんやりと彼を眺めていた。全ての思考が薄っすらと和らいでいくかのよう。
この少年は、何か柔和なのだ。
「さてと。僕は楽しい事がしたいかなあ、くるくる、ぐるぐる廻っていく世界の中で。君達は閉ざされた部屋の中に篭っている。それでも僕は君達が愛しいと思うよ？　さてと、どうしたものだろう？　僕の視ている世界を君に視せて上げようかな？　まあ、どうだっていいんだけどね？
何だか、道化じみているよね？」
ぐるぐる。ぐるぐると。
坩堝のように、ぐるぐると。周囲の大気がざわめている。
一体、どういう現象が起きているのか。光の男には分からない。
「メビウス・リングが入り込んだんだろう？　彼女は秩序なんだから、それに相反する混沌なるものを駆逐したいんだよねえ。僕は混沌に近付かない、きっと君達の誰かは至れるんだろうね？
ほら」
彼はまるで掴めない。ひょっとすると、決して掴み取れない存在なのかもしれない。
ラハブは指を指す。
釜の中、黒雲のようなものが渦巻いている。
セイタンはそれを覗き見る。
「混沌に食われては駄目だよ。それは、全てを無化していく。死への渇望も、虚無も。メビウスは肯定するけれども、混沌だけは駄目らしいね。それは世界の意味を消失させていくものらしいから。僕は傍観する事が出来る」
彼は空を見上げた。
空にある星々が、巨大なヒトデ形へと変わっていく。
世界が切り絵みたいに変わっていく。

　ラハブは棒の付いた巨大な飴玉を舐める。
　こいつの力の正体とは一体、何なんだ？　とセイタンは顔を震わせた。
　無邪気な少年のラハブ。彼は底知れないまでに、この世界にある何かの鍵を知っているのだろう。
「ラハブ、お前は何なんだ？」
「魔法使い」
　少年は、背嚢の中から絵本を取り出す。そして、それを開いた。
　すると、絵本に描かれているアニメ絵のような怪物達が、外へと次々に飛び出していく。
　まるで、現実の世界が壊れていくかのように。怪物達は、現実と溶け合っている。いや、初めから、この辺り一帯は、現実から切り離されていた。
　真実の世界というものは初めから何も無いのだろう。セイタンはそんな事を知る。この肉体が何なのかを、彼を通して知る事が出来るのかもしれない。
　おそらく、彼は非現実の彼方を見ているのだろうから。
「メビウス様とお話してみたいなあ？　僕は前々から彼女に興味があったからさあ」
　周囲に無数の飴玉が浮遊している。
　それは、爆竹のように弾け飛んでいく。彼は飴玉を空へと放り投げる、それはロケット花火のように飛んでいき、巨大な閃光の煌きへと変わっていく。
　彼の力が何なのか、セイタンには理解不可能だ。
「さてと、セイタン。君には力が無い。強さが無い。本当は強力な存在にも関わらず、何も出来ない。でもそうだね、君は傍観者でいる事がいいんじゃないかい？　僕は僕のやりたい事をしようと思うよ？」
　彼はにやにやと、捻じ曲がるように唇を動かす。馬鹿にしているのか、純粋に何かを楽しんでいるのか。
　それにしても、何故だか。とても楽しそうだ。
「それにしても、デイエスは強力な力の持ち主だったのにも関わらず。あの彼に負けたみたいだね。話にならなかったみたい。このままだとシェリダー君も危ういかな？」
　セイタンは微妙な顔になる。
「シェリダーは……」
「僕でも勝てるよ？」
　不敵に少年は笑う。
「まあ、もっとも。今は無理だね。確かに館の中から出ない彼はとてもとても強いからね？　大丈夫、セイタン。君は解放される。君は道標を手に入れる。さて、僕はしばらく見守っておくよ」
　ぼうっと、辺り一面が炎に包まれていく。それらの炎は森の木々と重なっているのだが、木々を黒く焼いていない。まるで、木々の上に別の色彩を重ね合わせたような。ポートレートの上に、ペンで絵を描いていったかのような。

†

　メビウスは両腕の関節を軋ませる。
　やはり、コッペリアの技量はまだまだだ。戻ったら、作り直させよう。
　彼の事は期待している、必ずや彼女の望むような肉体を作り上げてくれるに違いない。
「さて、シェリダーは混沌に近付き過ぎた。始末しなければならない。お前達は知らないのだな？」
　それでも、今の力だけでも。彼女に敵う者などいないのだろう。
　螺旋を描く死神。彼女の存在は絶対的なのだから。
　沢山の怪物達が、メビウスを取り囲んでいた。彼らはみな怯んでいる。彼女にまるで歯が立たない事を理解している。それでも、館という居場所を守る為に排除しなければならない。
「お前達は此処でしか生きていけないのだろうな。確かに私は壊そうとしているのかもしれない。しかし、此処は混沌に近付き過ぎた。いずれ、終わりへと向かっていくだろう。シェリダーは混沌に飲み込まれようとしている。彼が混沌と一体化したのならば。世界が無秩序によって侵食されていく。それは私はシステムとして止めなければならない」
　咆哮や金属音が鳴り響いていく。
　様々な姿をした化け物が犇いていた。
　この館に入り込んでくる怪物は、彼女から言わせれば。廃棄物ばかりだ。どれも、他で生活出来なかった為に行き着いた奇形達。
　翼を持った魚や剥き出しの襞の臓物のようなもの、触手だけではなく頭部が幾つもある蛸。目玉が無数にあるオジギソウ。
　メビウスは怪物達を相手にしない。
　怪物達はまるでメビウスに近付けなかった。
　その圧倒的なまでのウロボロスの防御を潜り抜ける力など、彼らには無い。
　回転の捩れによって、空間と空間を断絶している。
　怪物達は、ウロボロスの攻撃に巻き込まれて、圧死。収縮していく。
　システムとしての役割を担うという事。
　それ故に、彼女は絶対的なまでの力を有していた。

†

　デイエスは寝台に向かう。
　全身の節々が酷く痛い。左肩の骨や胸骨がへし折れている。
　鏡を見る。酷い痣が残っている。歯がぐらぐらし、鼻血が噴き出し続けているが、大した事は無いだろう。ひょっとすると、自分は自分の顔を、自分で思っている以上には評価していないのかもしれない。
　そんな部分が自分にある事を考えたのは、何となくあの青年に感化されたのだろう。

「よくも美しい俺を……。まったく」
　彼は戸棚からワインを取り出す。そして、カップに注いでいく。
　年代ものの高級品だ。カップの中身を一気に飲み干していく。
「シェリダーを倒すと……。彼は今、誰の人生を歩いているのかな？　おそらく、この館の中で彼が一番、自由なのだろうが」
　デイエスは陰鬱そうに笑った。
　心の中が灰色だ。いつにも増して視界が歪んで見える。かたかたと、指先を動かしていく。発酵したワインの味が全身に流れていく。
　少なくとも、これは生きているという感覚だ。ワインの味に耽溺出来るという事。それは生きているという事なのだ。
　時間が流れていく感覚を感じ取っている。
　窓の向こうには、ガーゴイルが彼を心配そうに眺めていた。
「マレブランケ。俺なら大丈夫だ。少し、身体を痛めたくらいだ。フェンリル……お前は、自分の苦悩の矛先が未だ見えないんだな？」
　窓が開かれる。
　石像は物憂げに彼を見ていた。
「俺は本当に役に立ちませんね」
「いや、この館にいる者達全員がこの世界にとって無価値そのものだ」
　自嘲的な笑いが響く。
「むしろ、俺はシェリダーよりも。よっぽど、あのラハブっていう謎の存在の方が気になるんだけどな。奴は外の者だろう。館に取り込まれているわけじゃない。俺達は館と共に生きなければならないが、彼は違う」
　デイエスは空ろな眼を空に向ける。
　空は濁っている。
　時折、空を透明な魚達が泳いでいた。
「ああ、クソ。俺は女と会えないんだよ。顔と言葉でしか語り合えない。そして、俺の魔力によって女達を虜にしていく。本当は触れ合いたいのにな？」
「寂しいんですね？」
　石像は辛そうな声で訊ねる。
「セイタンと俺は似ている。何者でも無いからな。俺達はこうして生きているのにも関わらず、外に焦がれているにも関わらず。館から抜け出せない、酷く滑稽だと思わないか？　数十、数百名もの女達を虜に出来る俺だが。誰一人として生で触れ合う事が叶わない。それがどれだけ空しく寂しいものなのか。正直、俺はシェリダーが羨ましい」
「でしょうね……」
　何だか空虚な声。この男に何もしてやれない苦しみが、マレブランケにはあった。
「俺達は全員が、観念の牢獄の中に住んでいる。精神だけは外の世界を飛翔する事が出来るが、結局の処。俺達はみな、館の中に留まっている。実際、それは空しく苦しい。さてと、お前は館

の外に出られるんじゃないのか？」
　石像は縮こまった。
「俺は。あなたと共に生きます」
「俺は下らないだろ？」
「仕えるに値するかどうか決めるのは俺です。あなた様に俺は魅了されているのです。その言葉にその意思に。あなた様は素晴らしいのです」
「そうか。お前はいつかちゃんと、外に出て行けよ？」
　デイエスは再び、ワインをカップの中へと注いでいく。そして、それをマレブランケの下へと差し出す。
「飲めるか？」
「飲めません。俺は只の動く石像でしかないですから」
「そうか」
　カップをガーゴイルの下に置く。そして。デイエスは別のカップを取り出してワインを注ぐ。
「ならせめて、乾杯しよう。俺達は同志であるのだと、誓いを立てよう」
「喜んで」
　グラスの鳴り響く音。二人は少しだけ、お互いの事を理解し合えた気がした。

†

　フェンリルは館から離れた丘の上にいた。
　もやもやとした攻撃から抜け出せない。
「ふん」
　彼の金銀の髪が風に靡く。
　何だか強い違和感を感じている。おそらくは、敵は館の中にいないんじゃないのかと。そんな気になって。外に出た。直感だが、館の中を幾ら探してもシェリダーという敵には出会えないんじゃないのかと。なので、一度。館を俯瞰して見る事に決めた。
　館の中にいると、不安感ばかりが募ってくるというのもある。つねに強い圧迫感に襲われ続ける。住民達の感覚が伝染してくるからだろうか。
　しかし、そんなものに押し潰される程、自分は弱くなんて無い。
　それにしてもだ。この館や森とは、一体なんなのだろうか。
　深い意識の迷宮の寓話であるかのような場所だ。
　丘の上から森を見下ろしていた。ぼうっと、煙が上がっている。まるで、目印のようだ。
「何だ？　あれは？」
　彼は顔を顰めた。
　見ると、あの光の男が浮かんでいた。
　彼の周りには不可思議なまでの世界が広がっている。フェンリルは眉を顰めた。
　光の男と話しているのは、黒い装束を纏った少年だ。何者なのかは分からないが。

「何だあいつは？」
　息を呑む。館に突入して見てきた者の中で、一番。得体が知れない。そして、おそらくはやはり直感が告げている。かなりの強能力者であると。
「近付かない方が賢明だが。彼は一体、何なんだ？」
　そもそも、あの少年を取り巻いている空間がおかしい。地面から幾つものかぼちゃのお化けが這い出してきて。布を被った正体不明の者達が、次々と現われて消えていく。豆の樹のような植物の蔓が、空へと伸びていく。
「メビウスは館にいる者だけを倒せばいいと言っていたが。あいつの場合はどうなるんだ？　あいつが一番、やばそうなんだが？」
　正直、戦ってみて。簡単に倒せるかどうか分からない。
　かなり、魅力的にさえ映る。
　戦えば、戦う程、自分というものが磨かれていくに違いない。
　フェンリルはそう考えている。
　あのセイタンという男は、微妙な顔で。黒帽子の少年を眺めていた。
　どのような感情を向ければいいのか、まるで分からないのだ。
　好感を持っていいのか、敵意を持っていいのか、嫌悪を持っていいのか。勿論、嫉妬や憎悪など湧き上がろう筈も無い。
　幽玄な光が灯る。
　ぽっぽっと、鬼火が増えていく。
　少年の黒帽子が空高く伸びていく。少年の足元の影は変幻自在に蠢いている。

†

「ねえ、セイタン。全ては幻影に包まれていくね？　何もかも御伽噺の中にいる。君達はそれを享受している。そして、僕はその境界線。ふふっ」
　光の男は、此処が現実なのか非現実なのか分からない。
　あるいは、今。どちらでも無いのかもしれない。
　ラハブは小さな木の人形を取り出した。まるで、人形の一つ一つがあらゆる人間の喜怒哀楽を模範しているかのよう。それにしても、みんな人形芝居なんじゃないのかとラハブは思う。誰もが、踊り狂って、人生を生きているのだ。
　そう、全ては物語で、嘘偽りの可能性だってある。
　そうだったとするのなら、もう何だっていいんじゃないのか。
　この世界を形作るイメージなんて、何だって。
　まるで、彼は偽りの生命を支配しているかのようだった。
　人形達は口笛を吹いていく。
　木で出来た彼らは、鼻がぐんぐんと伸びていった。
　そして、けたけたと笑い転げる。

「処で、館に入ってきた二人はシェリダーを探しているけれども。見つからないんだなこれが」
　地面から植物の根が生え出していって、蕾が出来て。開花する。
　それは、大きな人の顔になった、顔は笑っている。
「何故なら。彼は僕の世界の中にいるのだから。さてと、それでもまだ憑依を楽しんでいるみたいだね？」
　様々な種類の笑い声が聞こえる。みんな、楽しそう。
　てくてくと木彫りの人形達は歩き出していく。まるで、兵隊のように規則正しい歩みを進めている。
「それは本当なのか？」
「さあてね？」
　ラハブは無邪気に笑う。
　セイタンはどういう表情をすればいいのか、まるで分からなかった。

†

　何がやばいのかって聞かれると。やはり、他人に自分の人生を動かされている事で、更にその事に気が付かない事だろう。
　フェンリルは再び、デイエスの下へと戻った。
　何故、戻ってきたのか。デイエスは半ば呆けた顔で彼を見ている。
「お前はあいつが何者か知っているのか？」
　デイエスは傷口を消毒している処だった。
「俺はお前に敗北している……俺からはもう何も出てこないと思うけどな？」
「いや」
　フェンリルは首を横に振る。
「誰を始末すればいいのか、おそらくはメビウスは悩んでいる筈だ。メビウスが言っている混沌なるものをオレは全て理解しているわけではないが。おそらくは彼女は、混沌が憑依する相手を探し出している。狙いを付けて、最初はまとめて始末しようとするのだろうが。結局は多分、一人なんじゃないのか？　ジョーカーを探しているんだ。彼女にとって、都合が悪い存在である混沌なるもの。彼女の話を聞く限り、それは可能性を潰えていく存在というものらしいが」
　此処は歩いているだけで、強い閉塞感に襲われる。何かから抜け出せない感じ。
　館の外に出なければならない。此処は完全なる迷宮なのだ。
　まるで、絵本の中に閉じ込められたかのようで。あらゆる可能性があるように見えて、あらゆる可能性が絶たれている。言うならば、全ては観念という牢獄の中へと押し込められているのではないだろうか。
　そう、此処は。自我の密室の中なのだ。暗い意識の中で、自分自身と対話していって。結果として、他人というものを見失っていく。そんな場所。
「俺は館を出る」

　デイエスはぽつりと呟いた。
「街に行く。そして、女達と会話する。生のな。人の人生をコントロール出来る、俺の力。しかし、俺は彼女達と対面する資格があるのだろうかと」
　フェンリルはふん、と馬鹿らしそうに鼻を鳴らした。
　此処は、時間が停止している場所なのだ。
　虚空の中から抜け出したい。止まった時の中から。
　セイタンも、館の外を目指そうとしているのだろう。
　おそらく、この二人はメビウスの提示する混沌なるものには至らないのだろう。
　フェンリルは自分自身という牢獄から抜け出したい。自分はもっと、強くなれる筈なのだと。それを信じないわけにはいかない。
　この館の者達は、正直。相手にならない、弱過ぎるから。
　何処に行けば、自分は強く為れるのか。何処まで向かえば、自分の弱さを無くしていけるのだろうか。
　自分の弱さとは、一体。何なのだろうか。
　おそらくは、自分は何処まで行っても自分でしかないという事。
　その上で、歩みを進めていくしかない。
　シェリダーと、あの魔女帽の少年。
　戦うだけの価値があるのは、この二人。
「それにしても、シェリダーは。今、何をやっているんだ？」
「誰かの人生に憑依していると思う。探し当てるのもいいんじゃないのか？」

†

　浅はかな考え。人との距離感。どうしようもなく、通じない相手。
　分かり合えない言葉の羅列。みな、それぞれの人生を歩み、歩まなければならないのだろうから。
　デイエスもセイタンも、シェリダーと対決しなければならないと誓い始めていた。
　デイエスは自分を慕う女達を、深く愛している。
　セイタンは自分の存在の意味を創りたい。
　だからこそ、二人はこの館を抜け出さなければならないのだ。
　黒衣のドレスを纏った、捻じ曲がった金色の女が佇んでいた。
「お前達は、混沌から逃れた。私はお前達を始末する理由を失った。お前達は“可能性”になった。出来れば、祝福された道を歩まん事を」
　メビウスは告げる。
　混沌とは、如何なるものなのだろうか。この世界の可能性を停止させる存在。
　それはとても酷く抽象的で掴み難く、だからこそ駆逐しなければならないのかもしれない。
　実体として分からないからこそ、メビウスは駆逐しようとしているのかもしれない。

ガーゴイルの肉体を持つマレブランケは、主人であるデイエスの後ろを付いていく。
セイタンは、まだ館に留まり続けると告げた。彼は意味を思索し、突き止めなければならないのだと。
メビウスは理解している。
フェンリルの持つ、強さ。彼は人を殺せない代わりに、周囲に対しての強い影響力を持っているんじゃないのかと。彼自身が自分自身と対決している。つねに理想の自分であろうと。
空には、無価値さの風が覆っている。この館は終わってしまっている場所。
この黒雲を拭い去らなければならない。

†

フェンリルはデイエスに、館に戻るように示唆した。
「直感が働いているのかい？」
「いや……。明らかに拙いものが動いている」
淡々と告げる。
「何から理解したんだい？」
「怯えているだろ？　お前の従者達も、この館にいる妖魔達も」
「ふふっ。やっぱり、君は凄いよな」
デイエスは関心する。
彼といると、自分の生き方を考えさせられる。おそらくは、デイエスが持っていない何かを持っているのだろうから。似ているものは所詮、似ているものでしかなく、そもそも似ていると思い込んでしまう事自体が問題なのだろうから。
あのフェンリルは強い、デイエスよりも遥かに。
それは心の強さの部分においてもだ。
いつの頃だろうか。
デイエスにも、かつて本当に愛している恋人がいた。何年もの間、共に生活していた。他の女達は彼女の模造品にしか過ぎないのだろう。偽りの愛によって、自分自身を糊塗している。
気付くと、隣にはフェンリルがいない。デイエスは段々と、彼を理解してきた。
他人のペースになんて、まるで合わせない。自分に迷っている、けれども、その迷い方は、彼の意志に根付くものがあって。自分の意志を表現出来る場所を探しているかのような。彼は自分が戦える場所を探しているのだろう。

†

枯れ朽ちたような森。とても陰鬱だ。
遠くから狼の遠吠えが響き渡っている。
フェンリルは、なるべく距離を置いて、近付いていく。

少し、好戦的な意欲をそそられる。正直、戦ってみたい、戦う事によって自分自身と対面し、自分がもっと成長するんじゃないのかと。
他者に打ち勝つ事によって、解放感を得られる。
自分自身が自由になっていくような気分になる。
自分自身を飛び超えたいから。
そう、自分で自分に勝利したいのだ。揺るがない意志を持ち続けたい。
捻じ曲がっている木々。木々の一つ一つが、化け物のように見える。樹皮の一つ一つが顔のようにも見える。
無数の顔のあるかぼちゃが、空を飛び回っている。
こいつの能力の正体を見破らなければならない。
この奇妙な空間を生み出している力の概要を理解しなければならない。
全てが得体の知れないものによって、構成されている。
だが、だからと言って。怯むつもりなど無い。
奇襲も考えたが、真正面から対話する事にしてみた。
「で、お前は何をしているんだ？」
煮え滾る釜の中を、棒で掻き混ぜている少年。果たして彼は少年なのだろうか、ひょっとすると、フェンリルよりも何倍も年上なのかもしれない。
黒帽子の少年は笑った、漆黒の服装に身を包んでいる。
「やあ、こんにちは。今日は月が綺麗だね」
ふん、とフェンリルは鼻を鳴らす。
「お前は何者だ？」
端的に訊ねる。無駄な会話など、まるで意味が無い。
森がざわめき、それに合わせて。この少年の帽子が揺れる。
何か、全てを悟っているかのようで。
あるいは、全てを見透かしているようで。
とても、とても楽しそう。
「ああ。僕は混沌を見守る者とでも言っていいのかな？」
「そうか、メビウスには始末されるべき存在なのか？」
少年は楽しそうに笑う。無垢な笑みを浮かべる。
フェンリルは。心の底から、憎しみが湧いてくる。
「さてと、オレはお前と戦ってみたいんだが。駄目だろうか？」
「僕と？　あまり意味が無いと思うよ？」
「お前、かなり強いんだろう？　オレが何か解答を得られるかもしれない」
強い敵愾心を放って言う。
少年は、三日月のような笑みを浮かべる。奇妙な含み笑い。
フェンリルは彼を睨み付ける。
彼は何か儀式を行っているのだろうか。分からない。いや、ひょっとすると、何かを熟考して

いるように思えても、何も考えていないのかもしれない。
「お前の目的は何なんだ？」
　なるべく、底冷えするような声で訊ねた。
　巨大なかぼちゃが、地面から生え出してくる。
　深緑の蔓が捻じ曲がりながら、大地を這って行く。
　フェンリルは辺りの変貌を気にも留めていない。只、目の前にいる魔女帽の少年を凛然と眺めていた。
「んー」
　彼は口元に指先を当てる。
「この世界の掌握かなあ？」
　フェンリルは彼を睨み付けた。
　やはり、何を考えているのか分からない。おそらくは、それ程は何も考えていない可能性が高いからこそ。やはり腹立たしい。
「意味が分からない。もっと分かりやすく述べて欲しいんだけどな？」
「そうだね」
　ラハブは釜を回す手を止めた。
　まるで、彼は全てを見通しているかのような眼差し。
「さて。僕は観念が好きだよ。観念は人の創り出した世界そのものだからね。人間だけしか、観念の中に入れず。観念の海を生きる事が出来ないから。そうやって人々は思想を作っていくよね？　生きる指針だとかを。僕が作り出すのは本物の世界。人々が求めて止まないもの。知っていたかな？　全ての人間は自分のイメージの中で閉じているんだよ？　僕が操るのは、人々の想念そのもの。言葉や記号、視界。人々はこの世界を形作っていく。全ては空ろなのにも関わらず、人々は意味という観念に閉じたがるよね？　だからこそ、人々は生きているし、生きられる。虚空の中から花を掴み出す。僕はそんな人々が美しいのだと思う」
　フェンリルは彼の言葉を吟味していた。
　そして、何かを理解したみたいだった。
「成る程。お前の能力は……」
　彼は踵を返した。
　まるで、全てから興味を失ってしまったかのよう。
「逃がさないよ？　と言ったら、君はどうする？」
　フェンリルは詰まらなそうに、金銀の髪をかき上げる。
「お前ごときに負けるオレじゃない」
「そう。やってみる？」
「やってみろよ」
　風がざわめく。
　森の木々が揺らめいていく。梟がばさばさと飛び立っていった。
　切り株が突如、動き出す。そして、根を空へと伸ばしていく。それは、巨大な斧や剣へと変わ

っていく。それは、勢いよくフェンリルの方へと向かっていく。彼は面倒臭そうに、ゆったりと歩いていく。鋭く伸びる刃の攻撃を、彼はしなやかにかわしていく。
　ラハブは少し驚いていた。
　あっという間に、距離を詰められる。
　ほぼ、二人の距離は人一人分くらいの距離へと変わる。
　フェンリルは腕を組んで、彼を吟味していた。
「さてと。どうしたものか」
　ラハブは下手に動けずにいるみたいだった。けれども、まるで引く気にもならない。
「君は相当、強いんだね？」
　ラハブは問い掛ける。
「まあ、そこそこ、な？」
　フェンリルは強い自信を持って答えた。
「ふふっ。シェリダーは強いよ？　僕なんかよりも、ずっと」
「それは凄そうだな？」
　フェンリルはラハブの視線を凝視する。おどけたような表情の奥に、何処か得体の知れない何かが眠っている。
　全力で戦ってみたい、底知れない相手だ。
　胸が高鳴る。
　フェンリルは、少しだけ。冷や汗を流していた。
　これ以上、踏み込めない。
　この少年は、更に何かを練り込んでいる。だからこそ攻撃に踏み込めない。
　ひょっとすると、予想以上にやばい使い手なのかもしれない。
　戦う価値は在る筈なのだ。しかし……。
　フェンリルは嘆息する。
「今度は本気でやれよ」
　黒白の青年はつまらなそうに告げた。
　ラハブはふふっと笑う。
「君は相当、負けず嫌いなんだね？」
「さてな」
　屹然と、フェンリルは森を後にする。悔しさのようなものが滲み出ているみたいだった。

†

　人形の腕に傷を付けてみる。
　自分の傷付けた手首と同じ場所だ。
　無数の傷を人形へと刻印し続けていく。
　何処まで行けば、痛みを理解出来るのだろうか。

暗い赤色が、純白の腕に広がっていく。紅く染まっているのは、人形の腕なのか、自分の腕なのか。
もう少しで何かが掴めそうなのだ。
何か、まだ、視れないものがあるのだろう。だからこそ、もっと気高く、美しい人形を作れずにいるのだろう。自分自身ともっともっと戦わなければならない。
自分は人形と一体化しなければならない。人形と一つに為らなければ、本当の痛みを表現出来ないんじゃないのかと。
頭の中で、無数の傷口のイメージが広がっていく。それが自分の心と重なり合う。
その後で、自分の足元が真っ黒に広がっていき。世界全体が壊れて崩れてしまったかのような感覚の中を漂う事になる。
心の傷はイメージなのだろうか。イメージにイメージが足されていって、心の傷が反復していく。そして、心がぼろぼろになっていく。
あらゆる思念、あらゆる苦悩。
それらを何処まで理解する事が出来るのだろうか。
ひょっとすると、全部。自分が妄想した痛みでしかないのかもしれない。自分が他者の苦しみに感化されて、自分のイメージを広げていく。結局の処、そんなものは自分自身の意識の延長でしかないのだから。
血も涙も、全部。自分の物でしかないのだから。けれども、現われるものがある。
自分自身が神と一体化していくような感覚。性別も肉体という牢獄をも抜け出していき、自分自身の精神が神聖なるものに近付いていくかのような錯覚、陶酔。
人形を好きなように形作っていく。創る度に、ますます表現力が上がっていく。
それでも、分かるのだ。
彼の言葉は届かないのだと。
どんなに表現しても、理解出来ない相手には理解されない。

†

弱さと強さの狭間で生きている。
もう、誰にも負けたくない。自分自身にもだ。
「本気じゃ無かった。オレに害意が無い事が分かっていたからか？　ああ、クソ」
あのラハブ……赦せない。
いや、赦せないのは自分自身だ。
本気で対峙する覚悟が、いつも無いのではないかと思ってしまう。
殺す事は覚悟なのだろうか。誰も彼もが不快で仕方が無い。
全身が酷く重い。
意志と行動が、別になっていく。
ひょっとすると、自分が強くなれない大きな縛りが殺人に対する嫌悪感ならば、此れまで戦っ

てきた相手は。みな、フェンリルを侮って、あるいはフェンリルを相手に手を抜いて対峙してきたのかもしれない。
　それはどうしようもなく、赦せない事だった。
　自分は罪証を背負っていない、言うならば、覚悟も背負っていないのではないのだろうかと。
　殺せないならば、せめて自分自身を乗り超えたい。
　強くなりたいという意志が、この世界と戦う為の剣になるのだろうから。

†

「どんなものが生まれるのか楽しみだなあ」
　ラハブは釜を掻き混ぜる事を止めない。
　彼の力である『メテオール』は、現実と非現実の空間を一体化させていく。
　絵本の世界を現実の中へと持ち込み、溶け込ませていく。
　捻じ曲げられて、溶け込んでいった世界観。
　この世界を構成しているもの。
　あらゆる幻想やイメージ、それらを実体化させていく。
　人間の持つ観念世界。それはラハブがとても愛しく思っているものだ。
　くるくる、くるくると。
　まるで、残酷劇場のように、世界は廻っていく。
　誰もが他者を理解出来ない、故に悲劇が起きていく。ラハブはその事象を見届ける事を楽しく思う。彼は俯瞰者なのだから。
　みなの道行きを知りたい。どのように戦い、どのように自分自身に解答を重ねていき、どのように動いていって、人生を送っていくのかを。
　彼にとって、世界という坩堝はおもちゃ箱のようなものだ。
　とても楽しい童話のようなもので、絵本のようにも見える。
　彼から視える世界。とても、楽しく。とても、麗しい。
　そして、とてつもなく可愛らしいのだ。
　誰もが、自分の道を歩めないのではないのだろうかと。気付けば、誰かに決められた運命に従って生きているのではないのかと。
　何が現実で何が非現実なのか。何が自分で何が他人なのか。観念やイメージでさえも、意識や認識というものを有する現実でしかないのだろうから。
　だからこそ、人間は面白おかしく、分かち合えない感を広げていって。色々なものを作っていく。それらはイメージとイメージが重なって、どろどろに変化していっているという事なのだから。
　ラハブのメテオールは、現実とイメージを一体化させていく。
　それは、セイタンが光と溶け込む存在である以上に、ラハブの力は完成している。
　ラハブは圧倒的なまでに、強い能力者なのだ。それはセイタンなどとは、比較にならない程に

。底知れない少年、彼こそがまさに世界をコントロールしているのではないのかと。

詩篇の六　痛みとイメージ－Coppelia－

　巨大なマントを羽織った男が、チキンを貪り続ける。
　シェリダーはくちゃくちゃと音を立てて、物を食べていた。
　セイタンが現われない。いつも決まって、一定の時間帯になると、彼に怨恨をぶつけに来るというのに。
　ひょっとすると、もう彼は始末されてしまったのだろうか。
　ならば、好都合だ。あの光の男は人生が無い為に、憑依する事が出来ない。だからこそ、彼にとっては面倒臭い存在だったからだ。只、シェリダーはふと思う。
　……自分は、存在していないんじゃないのか？
　シェリダーは気付くと、虚空を掴んでいた。貪っていた筈のチキンが存在していない。
　彼は忘れていた。
　けれども、今、気付き始めた。けれども、きっとそれは遅過ぎたのだろう。
　鐘が何処からか、鳴り響く。それは、終わりを告げる音色だ。
　此処は、大聖堂なのだ。信仰によって、彩られている。
　みなが信じていた信仰とは一体、何だったのだろうか。
　それでも、終わりの鐘は。何処からか鳴り続けていた。
「お前を始末しに来たんだが」
　黒衣の女は静かに立っていた。
　それは、この世界に存在してはならない存在を抹消する為の死神のように、佇んでいた。事実、彼女は死神の役割も果たしているのだろう。
　彼の机には、無数の本が置かれている。
「お前が何者なのか分からないが。俺を倒す事は出来んぞ？　既に、俺の本体は別のものに“憑依”したのだからな？」
　メビウスはつまらなそうに、彼を見下げる。
「成る程」
　マントの男の肉体が、捻じ曲げられていく。それは圧縮されて、小さく小さく縮こまっていく。
「逃げられたか……」
　メビウスは淡々と呟いた。
　一体、この男は何処まで自分の存在を遠くへと飛ばす事が出来るのか分からない。

†

　オルドルは、口の中から食べていたものを吐き出した。
　ワインと共に召し上がる為の、生ハムだ。
　全身から脂汗が滲んでくる。

身体中の力が抜け落ちていくかのようだ。言葉を巧く発せなくなる。
「すまんな。お前に憑依し続けていたんだが。もう、飽きた。お前はお前の人生を歩め」
まるで、何かが背中から切り離されていくように、肉体からもげ落ちていくかのように、剥がされていく。それは奇妙な感覚だった。苦痛でも無く、快楽でも無く。
何か、感情の一部が抜け落ちてしまったかのような。
「俺の名前はシェリダー。次は別の者を生きる」
男は少しだけ、顔の包帯を取り外した。それを見て、オルドルは絶句する。
オルドルは全身が凍り付いたような錯覚を覚えた。そして、すぐに感覚が収まる。包帯の男の素顔を脳内で消そうとしている。何も見たくないと思った。
「お、お前はいつから」
「覚えていないか？」
マントの男は笑った。
「お前はお前の寝室にやってきて、訊ねた。お前は幸福じゃないんだろう？　ならば、お前は俺に自分の人生を託してみないかとな。そして、お前に憑依して生きてみたんだが。やはり、同じような人生を送っていた。お前はつまらなかったなあ」
マントを羽織って、顔を隠した男が塔の上から落下していく。
オルドルは塔の中に取り残されている。
彼を此処まで連れてきた怪物も、一体、何処に行ったのだろうか。
一人、取り残されて。ぼうっとオルドルは自分の人生を振り返っていく。
彼は、誰かに操られて生きてきたのだ。
何も無さは。自分の人生だった。
空漠な枯渇した水の無いような場所を歩いてきたのだろう。
そうだ、此れまで彼に人生なんて存在してなかったのだ。
何も無く。何も無い事に対して、ずっと浸り続けていた。
ならば、これから歩いて行けるのだろうか。
しかし、気付いたのは。自分はやはり空虚な意識の下、積み上げてきた生涯の糧など、全てが空っぽなのだ。
何を生き、何に縋ってきたのかさえも分からない。信仰も持っていなかったし、培ってきた人生の土台というものも無い。
全ては空っぽなのだ。虚無を抱えて苦しむ資格さえも無い。
ふと、目の前が明滅している。意識も混濁し始める。
それにしても、あのシェリダーという男。いつから、彼に乗り移っていたのだろうか。
彼の包帯の下の顔、あれは自分とまるで同じ顔をしていた。
鏡を見ているかのよう。
彼は自分だったのだろうか。自分から抜け出してきたのだろうか。

†

セイタンは考える。硬い包帯で巻いたシェリダーの覆面の下と、マントの下には一体、何が隠されているのだろうかと。
ひょっとすると、何も無いのかもしれない。
空っぽで、中身の無い存在。それが彼なのかもしれない。シェリダーには、顔が無いのかもしれない。
彼と対面すると、憎しみばかりが込み上げてくる。持っているものと持っていないもの。劣等感が溢れ出してくる。どうにもならない。
セイタンは館から出て行きたい。しかし、目的が何も見つからない。まず、人間に為れればいいのだろうか。館の外には、様々な可能性が広がっている筈だ。彼を人間へと変質させてくれる力を持っている存在が現われるのかもしれない。
希望と絶望の両面価値。それらを抱えながら、彼は館を後にする。
フェンリルは自分の肉体が嫌だと言った。人の肉体が嫌なのだと、だからセイタンのよな存在は正直、羨ましくもあると。幸福な生き方は人それぞれで、きっと誰もが自分に嫌悪して、他者の生き方を羨ましがるのだろう。他者の存在の在り方を。
きっと、この先はどのような生き方が出来るのだろうか。分からない。
けれども、何かを見つけられるのだと信じたい。信じれば、何か報われる事が出来るのではないのかと。
答えは探しに行こうと思う。
デイエスは幽霊船に乗っていた。此処から先には、新しい場所が存在するのだろう。新しい人生が。色々な思考を巡らせる。
フェンリルという存在は大きかった。あの破壊的で攻撃的で、強い憎悪に駆られながら、自らの意志を貫こうとしている。それはデイエスには無いものだった。
無い故に、羨望さえ抱いてしまった。何処に、あんな挫けぬ意志が在るのだろうかと。
ぼうっと、船は進んでいく。
亡者達が海の上を彷徨っている。彼らは一体、何なのだろうとデイエスは思考していた。
無数の顔や腕達、彼らは何を求めているのだろう。光なのか闇なのか。
暗黒の平原へと辿り着いた。そこには、空漠のようなものが広がっている。
ぼんやりと、仄かな光が灯っている場所があった。きっと、此処は出口なのだろうか。
セイタンは、そこへと近付いていく。
光が幕を開けていく。
セイタンは光を凝視する。彼は光と一体化していく。
美しいと、彼は告げた。きっと、泣きたい気分なのだろう。
それはきっと日の光だ。館と館の周辺には、存在しなかったもの。
セイタンは光の中へと溶けていった。自分自身の肉体を構成していくものが、辺りと溶け混ざっていく。デイエスは息を飲んだ。
全ては無情だ……。

光の男は無意識の内に、咄嗟に。向けられた膨大な光と熱の渦と一体化しようと試みる、しかし、自身の能力の速度を超えて。無慈悲にも、その攻撃は彼の別の物質と自身を一体化させていく能力を行使させる事が間に合わなく、彼の存在そのものを抹消していく。
そのまま、セイタンは消滅していく。
圧倒的なまでに、圧縮、膨張された。光と熱のエネルギー、その只中に置かれて、彼の力である『アバター』は、無残にも敗北していく。
後には、何も無かったかのように、彼の存在した痕跡は消えていた。
デイエスは息を飲む。
目の前で起こっている現象。
まるで、地獄から抜け出す囚人を待ち構えている門番のように、そいつは存在していた。
それは、巨大な翼を持った怪物だった。蛇のような頭部に、蝙蝠のような翼を生やしている。身の丈は、小さな山脈のようだった。
デイエスは完全なまでに、怖気付いていた。
セイタンは、数千度に達する高密度の熱エネルギーによって消滅したのだった。
光を求めた彼は、無残にも朽ちていったのだった。
……無情な光景。
そいつは、よく通る声で喋る。まるで、人間の声音のような響き。
「俺の名はブレイズ。まあ、見ての通り。ドラゴンという種族だ。メビウスから頼まれていてな。あの船から戻ってきた者は、全員、始末するように言われている。決して逃がしては行けない存在だとな」
彼は口から、ガスのようなエネルギーを噴出させていた。
「この暗黒の地では。所謂、人で無い者達が集まってくるな？　メビウスが向かった館は、この地の中でも。更に、未知の場所だったんだが。お前の相棒、始末させて貰ったが。問題無いんだろう？」
圧倒的なまでの威圧感。デイエスは全身が凍り付いていくかのようだった。
「お前は人型をしている。だから、始末に躊躇している。人型で無い者は“覚醒者”だか、“近付いたもの”だが、知らんが。呼び名はどうでもいいな、その可能性が高いから出来れば始末してくれと言われるが、そうだなぁ」
何だか、気だるささえ感じ取れる声音だった。同時に、何だか申し訳無ささえも垣間見える。デイエスは戸惑う。
この怪物は、自分に対して、どうしたいのだろうかと。
「なあ、俺は間違いを侵したのか？　だとすると、情報伝達に問題があるぞ。おそらくは、メビウスはお前達の命なんて、どうだっていいんだろう。奴は奴の使命ってので、動いているっつーと思うし。俺は奴から、純金のペンダントを貰ってな。巨大な翼を幾つも象っているアクセサリーだ、俺でも嵌められるようにな。特注らしいな」
ドラゴンは、ばっさばっさと翼を閉じたり広げたりしていた。
「その、えと。君は一体、どうしたいんだ……？」

　デイエスはおそるおそる訊ねた。
「交渉しようぜ。俺はお前を見逃す、その代わり。お前の頭に付いている冠が欲しい。それでどうだ？　ついでに、守ってやってもいいぜ？　この辺りは思考の無い化け物ばかりで大変だろうからな？」
　デイエスに選択の余地は無かった。
　只、彼の言いなりになるしか無かった。
　館の外には恐ろしいものがいる。それはもう、どうしようもないくらいに。
　ブレイズは尻尾をデイエスの方へと巻き付ける。そして、背中へと乗せた。
「ごめんな。お前の友人だったか？　俺が、その焼き殺してしまった奴」
　セイタン……。人間の肉体を欲していた者。
「いや。分からない……」
　デイエスは眼を閉じる。
　セイタンはあれで良かったのかもしれない。
　彼はきっと、これから先も何も見つけられなかったのかもしれないから。……とすると、それは自分自身の問題でもあるのだ。これから先、何も見つけられないのではないのかと。
　実際、デイエスは彼の死を悲しんではいない。どうしようもない倦怠感ばかりに襲われる。倦怠は何処から来るのだろうか、自分の無力さからか。
　何に対しての無力さなのか、もうそれさえも分からない。
　巨大な山脈へと連れて行かれる。
　そこは、巨大な髑髏によって積み上げられていたものだった。
　頂上の地面は、積み上げられた骨が平らに砕かれており。その上から、様々な種類の動物の毛皮が並べられている。
「俺は人間が好きでな」
　彼は淡々と告げた。それにしてもよく通る声だ。とても、化け物が発する音声とは思えない。
「人間の創る芸術品などを集めるのが好きだな。所謂、黄金や宝石などで創られたものから。所謂、ブランド物とか呼ばれているもの。それは俺の人に対する憧れなんだろ」
　彼はふうっと、疾風の溜め息を吐いた。
「ああ、そうだ。その辺りにワインセラーのようなものがある。適当に開けて飲んでくれ。色々、揃っているらしい。もっとも、俺はボトルのデザインが気に入って集めていたんだがな。グラスも置かれている筈だぞ」
　妙に、この飛竜は親しげに話す。
「セイタンもずっと、人間に為る事に憧れていた。君もそうなんだね」
「知らんよ。俺は只、人間が好きなんだろう。化け物が嫌いだ。この辺りの感覚を分かって貰えるのはやはり人間だからな。人に為りたいとは思わんが、俺は化け物共を嫌悪している。奴らは人を節操無く殺戮したがるからな」
「君、何ていうか、かなり変わっているね」
「まあ。俺の人間の友人。沢山、死んでいったからな」

　彼は少し寂しそうな顔をしていた。
「あの光の男とは仲が良かったのか？」
「……特に。只、情緒的なものが。俺と彼は似ていなかった。共にメビウスに外に出るように言われて、館の出口である船を渡った」
「メビウス……。お前らの事、何とも思っていないぞ。彼女に情緒や感情を期待するだけ無駄だ。下らない。あれは合理性のみで動いているからな。なんつーか」
「いや、いい。セイタン自身、消える事も望んでいた部分があった。どうせ、彼もまた、館の外に出た処で。その存在の意味を掴む事は出来なかっただろうから、それにしても君は」
　本当に、人間らしい優しさを持っているな。とデイエスは告げた。
　ブレイズは唸る。
「正直、始末人、処刑人の役割を回されるから。俺自身としては何とも言えないんだけどなあ。この辺りだと、何か問題が合った時に、強大な力を持っていて。辺りを席巻出来、制圧出来るのは。俺くらいだからな。俺以外の化け物の奴らは人格に問題があったり、殺されていったりした」
　ふうっと、一呼吸置く。それは猛烈な吐息となって、空を劈いていく。
　大きなドラム缶に、デイエスは酒を注いでいく。
　そして、自分のグラスに同じ酒を注ぐ。
　二人は、それを軽く叩く。
「君に祝福を」
「お前のこれからの人生にもなぁ」
　二人は共に、空を眺めていた。漆黒だ。
　一筋の光明も見当たらない。満月は雲によって覆い隠されている。
　重力から解放されたような世界。
　デイエスは酒を飲み干した後、静かに暗い空を眺めながら眠りに付いた。味覚があまり分からないのは、良質のアルコールを使っていない。しかし、妙に美味く感じられる。
　彼は眠りに付く。全身が酷く重い。
　そういえば、昔、彼と愛し合っていた女は今、どうしているのだろう。心の底から幸せを生きた事を願っている。
　ブレイズは激しいシンフォニック・メタルを聴いていた。彼専用に特注して作られたスピーカーから大音量で音楽が響いてくる。彼は自分の聴覚をコントロールして、人間の聴覚へと落とし込んでいく。安眠を妨げてはならない。
　……違和感。
　ふと。ブレイズは気付く。
　やるせないくらいに。
　デイエスの冷たい肌が、更に冷たくなっている。
　ブレイズは脚の鉤爪で、彼のコップを巧みに掴み取った。そして、匂いを嗅ぐ。
　……。ブレイズは何とも言えない複雑な顔になる。

　ブレイズは思い悩むという感覚がよく分からない。それはひょっとすると、人間だけが持っている特性なのかもしれない。
　ブレイズの強靭な肉体に対して、人間の肉体は余りにも脆い。それはどうしようもない差異なのだろう。
　その差異を理解していないと、あらゆるものが失われていく。知っている。
　デイエスの体温が徐々に失われていく。彼が予め持っていた薬物を、酒の中に混入したのだろう。
　彼は空ろな眼をしている。動脈と静脈が激しく脈打っている。全身から脂汗が滲み出ている。ブレイズは翼を広げて、暗黒の地を羽ばたく。
　彼の背中には、一人の優男が乗っていた。飲んだ毒を吐き出させないといけない。
　何としてでも、生きて貰わなければ。
　彼が何を抱えていて、何故。自殺を試みたのか分からないが、衝動的に飲んだのだろう。何故、死のうとしたのか理由は分からない。
　まだ、息があり、心臓が動いている。胃の中を洗浄すれば、間に合うかもしれない。
　ブレイズは彼の友人だと思われる男を殺して、彼の方は救おうとしている。
「おい、てめえ。生きているか？」
　沈黙。代わりに、背中の男は息をぜいぜいと漏らしている。生命の鼓動が急速に失われていっているのだろう。即効性の毒物である可能性が高い。
　この男は自らの意志で死のうとしている、ブレイズには理解出来ない感性。
　欲しいものが手に入らない。
　ブレイズは人間に憧れる、人間を敬っている。此れ程までに強大な力を持っていたとしても、人間が恐れ戦く怪物として生きているのだとしても、それでも人間の方が優れていると思う。自分が何者であるのかという立場。生い立ち、自分自身の存在。
　ブレイズは憎んでいる。人ならざる者達を、彼らの死に対しては無感動に思う。けれども、人間の死は苦しいものだ。

†

　出られないのだ、この迷宮からは。
　オルドルは絶望していた。
　塔の中に幽閉されて、生かされ続けている。人生は迷宮のようなものだった。一体、いつから、あの顔を包帯で隠した男が、彼の中にいたのだろうか。ひょっとすると、何十年も前からかもしれない。しかしふと思う、この館に迷い込んで、すぐ取り憑かれただけでしかないのではないのかと。
　自分自身の人生が、全て他人によって操作されたものであったのならば、どれ程、楽であるのだろうか。そうすれば、全てを他人のせいにする事が出来る。
　けれども、どうしようもなく自分という存在が自分で背負うしかなく。

　何にも為れないという事象、何処にも行けないのだという現実を受け入れなければならない。自殺に対する意思さえも、とっくの昔に通り過ぎてしまった。
　長過ぎる時間、人生に絶望して、怠惰を享受し続けていると。もう、何もかもがどうでもよくなってくる。
　どうでもよいという事が当たり前になってしまって、もはやその事を受け入れて。他の在り方が分からない。
　ただし、やはり自分の人生が無かった事に等しいのと同じだ。
　何も手に入れなかったが、彼は彼なりに、下らない人生の中で色々と選択してきたのだと思っている。
　あの石像の怪物が、またやってきてくれないのだろうか。せめて、この塔の中から出る事は可能だ。だが、この塔から出た後にどうすればいいのだろうか。殺して貰えばいいのだろうか、それとも、以前と同じような人生に戻って生きていけばいいのだろうか。
　何も見つからない、分からない。自分は誰の為に生きて、本当に自分で手にした人生なのだろうか。指針が何処にも無い、羅針盤となる意思や概念が見つからない。
　しかしふと思う。この感覚も、この人生観もまた。全てが誰かによって作られたものだとするのならば？
　彼には渇望が無い。全てが枯渇している。
　結局の処、全てに意味が無かったのだ。何もかもが無であり、無の牢獄の中、時間ばかりが経過していった。

†

「で、お前がシェリダーなんだろう」
　フェンリルは振り向かない。すでに気配で察していたのだから。
　どういう攻撃をしてこようが、自分には届かないだろう。
　こいつを理解してやるつもりさえも無い。
「オレに“憑依”しようとしたな、意味が無いぞ。オレはお前ごときには汚されない」
　鋭利に言葉を投げ付ける。
　この程度の相手に敗北するつもりなど無い。
　自分自身は強いのだと信じているのだから。
　この館にはそれぞれ弱さを持った者達で溢れている。不安、恐怖が満ちている。フェンリルは自分自身の弱さを持っているデイエスなどに会って、分かった。
　みな、弱さを抱えている者達なのだろうと。
　だからこそ、自分は前に出る。決して挫けないように、自分の意志を曲げる事など出来はしないのだから。戦って、勝ち取る事。
　そうやって、自分は自分自身を乗り超えてみせようと。-
　それにしても、弱さとは一体、何なのだろうか。

おそらく弱さとは、他人を自分の鏡のように見てしまって気が付くものなのかもしれない。
だからこそ、フェンリルは他人を嫌い続ける。あるいは、否定したい自分自身を鏡像のように見てしまうからかもしれない。
フェンリルの背後に立った男は無言だ。しかし、間違いなくうろたえているのは確かだった。何故、気付いたのだろうか。
顔を包帯で覆い、マントに覆われた男。
彼はフェンリルに触れられずにいる。
フェンリルは振り返らない。
「もう、大体。お前が何なのか分かった。お前はもう、終わりだろうな。お前はオレに勝つ事など叶わないのだろうな」
乗り移り。
どういう手順を踏まえて、どういう風に相手に入り込むかも予想出来ている。
そして、このシェリダーという男が此れまでどのように生きていたかも予想出来ている。
全ては弱さ故だ。
余りにも、愚かなくらいに。
そう、もうシェリダーという存在の謎は解けているのだから。
「この館はひょっとして。生きる指針。基盤。そういったものが無い者達が集まってきているんじゃないのか？　虚無に閉ざされた者達が。けれども、虚無もまた、生きる意思の一つだとメビウスは言う。お前は虚無の先にあるものなのだろうな」
彼は冷たく笑う。
「思考を剥奪していく行為。それをメビウスは赦さないのだろうな。自分個人だけではなく、多くの者達の思考を奪い取っていく行為。それはメビウスがシステムである以上、倒さなければならない概念。彼女が混沌なるものと呼んでいるものがそれなんだろうな」
振り返らない、どうせ。何も出来ないに決まっているのだから。
フェンリルは歩いていく。
そして、足を止めた。
それは、大鏡のある部屋だった。
フェンリルは自分の顔を覗き込む。
「知っている。お前の包帯の下、それはきっとオレと同じ顔をしているんだろう？」
ううううっと、背後で怪人は呻く。
「きっと大嫌いな自分の顔が映し出されているのだろうな」
フェンリルは眉間に皺を寄せる。この敵も、本当に下らない。どうせ、何にも為れない癖に。虚構だけで生きている。虚構を糧として生きている存在。
激しい嫌悪感が湧き上がってくる。
フェンリルだけではない、おそらくは、このシェリダーと対峙する者。みなが、この男に対しては嫌悪感を抱かざるを得ないのだろう。見てはいけない自分。虚勢と虚構と、世界の全てを掌握していると思い込み、他人など全て自分の掌の中で踊らせる事が出来ると思い込んでいる男。

恐ろしい力だ。自分の人生が何者かによって、左右されていくという事は。
しかし……。
「人は自分の中の嫌悪している部分を他人に投影して、他人を憎むとも言われている。しかし、問題は自分の意志とは何なのかという話なのだからな。決してしまいたい自分。乗り超えたい自分。自分で自分を超えられない自分。そして、オレはお前を倒す」
倒す。力強く、言った。
迷いは無い。
フェンリルの両腕には、いつの間にか。二つの剣が握られていた。
そして、強い意志の下。虚空を睨み付ける。
「どうせ。お前の中身は空っぽなんだろう？　誰かに乗り移っているんだろう？」
本当に相手にするだけ、馬鹿馬鹿しくなる。
ざわざわと空間が歪んでいく。
そして、無数の顔のようなものが浮かんでは消えていく。
気付くと、妙な世界が広がっていた。時間軸も場所も超えて、様々な景色が広がっている。あらゆる文化形態が広がっている。上流貴族、国王、騎士、音楽家、画家、革命家。様々な人間の生きた形跡のようなものが、イメージとして広がり続けている。
これが、彼の力なのだろう。そして、彼の視ている世界なのだろう。
妙に納得してしまう。
成る程な、とフェンリルはせせら笑う。
「さてと、オレは自分に似ている奴が大嫌いだ。自分の弱い部分に似ている奴はもっと、大嫌いだ。この館はきっと、オレにとって倒さなければならない者達の集まりなんだろうな？　オレは目的を見い出す、この意志を向けるべき敵を探す目的をだ」
観念の世界で、生きているわけじゃない。
虚空から、無数のナイフが飛び出してくる。それらは、シェリダーの全身に突き刺さっていく。フェンリルがいつの間にか、投げていたナイフだ。
迂闊に触れるつもりは無い。今のナイフでの攻撃にも、多少、戸惑った。
何かよく分からない攻撃を、彼は行ってくるのだ。
……いや、分からない筈は無かった。何となく、分かっている。
この敵がやっている事は、大した事なんかじゃなくて。それ処か。
おそらく、こいつは……何も、していないのだ。
何もしていないのにも、関わらず。館の他の者達に影響を与え続けている。
やはり、シェリダーのマントの下には何も無かった。誰かに乗り移っているのだろう。既にだ。
ひょっとすると、自分に乗り移っているのかもしれない。
とっくに、このシェリダーという男によって。行動を操作されているのかもしれない。しかし、自分の意志は確固たるものだ。
「次は何処に向かったんだ？　段々、あいつがどのような人生を送り。どのような攻撃をしてく

るのかは分かってきたんだけどな」
　憑依。乗り移り。
　フェンリルは思考する。
　ひょっとすると、そんな事さえも。……本質的には、やっていないんじゃないのか？

†

　とてつもなく、汚い場所によってエピゴーネンは生まれた。
　腐った汚水、残飯の蔓延る路地裏。その中で生きてきた。
　この世界に神は存在しない。そう告げられていた。
　彼はデイエスを信仰している。デイエスは美しいからだ。
　継ぎ接ぎだらけの肉体。この肉体が変容していき、化け物へと変わっていった今でもなお、人間であった時の事が苦しく辛い。
　彼は人生の大半を囚人として生きてきた。
　刑務所内での、酷い扱い。虫の入れられた食事。部屋の隅には、汚物とカビが固まっている。悪臭を共として生きてきた。南京虫を好んで飼ったりした。汚物汲みのような仕事もよくさせられた。
　少年期の頃から、窃盗などを繰り返していた。
　そして、青年期の頃には。ナイフでついに殺人を犯して死刑になる処を、革新的な弁護士によって精神病や人格障害、幼少期の不遇を指摘されて、無罪を言い渡された。
　彼は幸福というものを知らない。愛を知らないのかもしれない。
　家畜小屋で、藁を寝床にして育った幼少期。幼少期の頃、奉公に出されて、貴族の召使をしていた。家事を一通り叩き込まれて、よく殴られた。十歳を過ぎて、それに嫌気が指して、貨幣と家財の幾つかを盗み出して逃げ出した。それから、人生は見事に転落していった。
　彼は湿った泥のような場所しか知らない。それ以外の世界は在り得なかった。
　錆び付いた小さな十字架が無数に捨てられている場所に住んでいる。
　あのフェンリルという男は、デイエスの為に始末しなければならない。今度は敗北など赦されない。主人の名に従って生きるしかない。
　彼は怪物として、生きるしか無かった。徐々に肉体が変形していった。
　彼はよく人肉を貪り食らった。血液を啜った。
　神なるものの、血と肉を冒涜するかのように。彼は背教を生きたかったのだ。
　彼は聖物冒涜を繰り返し続けてきた。
　ある邪教を崇拝するカルト団体のメンバーに加わって、あらゆる背徳的な事を教わった。
　その過程において、更に。身体が変質していった、硬化していく皮膚、生えてくる鱗のようなもの。背中や胸に瘤のようなものも出来ていった。爪や体毛は伸び続けていく、どんどん人間というものを止めていった。
　そして、いつしか“力”を身に付けていた。

　自身の姿そのものを、悪魔へと変貌させる力。彼は人間を止めて、悪魔へと進化したのだった。
　そして、あらゆる動植物を食す事によって。そのパーツを身体を変形させて扱う事が出来た。
　彼はフェンリルを倒さなければならない。
　それが、この館においての彼の使命なのだから。
「おい、エピゴーネン」
　地下室のワインセラーの中で、酒瓶を開けている怪物に向けて。石像の姿をした怪物が呼び掛けた。
　マレブランケは翼を畳む。
「デイエス様が館を出られた。俺達は付いて来るなだってさ。お前らの人生を生きろって。酷いよな？　俺にどうしろって話だ。まあ、仕方が無いんだけどな」
　このガーゴイルの男は、はあっと。深い溜め息を漏らす。
「じゃあな。俺も館を出る決心が出来た、お前も好きにしろ」
　陰鬱な気分で、溜め息を吐く。
　マレブランケは階段へと向かう。
　そして、咄嗟に何をされたのか理解が出来なかった。
　どうやら。
　片翼を切り落とされたのだという事を理解する。
　振り返ると。
　山羊頭の男は、彼に攻撃を仕掛けていた。
　石像の怪物は、唸る。こいつに説得が通じない事など承知している。何処か知性が壊れている奴だろうと、デイエスも指摘していたからだ。
「おいおい、お前。仲間だろ？　一緒にデイエス様を慕って……」
　マレブランケは、階段から転げ落ちる。鋭利な何かによって、階段が破壊されていく。
　この悪魔の姿を持つ男、エピゴーネンの能力の全貌は不明だ。デイエスは知っているのだろうが、マレブランケは今まで興味が無かった。ちゃんと知っておくべきだった。
　そもそも、同じ化け物相手に奮闘するだけの力が無い。
　しかし、精一杯に。マレブランケは虚勢を張る。
「デイエス様が何だって？　てめぇ、俺様が一番、デイエス様に忠誠を誓ってるんだよ。俺が奴隷であるべき方は、あの方だけでいい。逆に言うならば、あの方は俺だけを奴隷とするべきだ。てめえなんざ、只の腰巾着だろ？」
　石像の怪物は顔が引き攣る。
　こいつには説得など出来ないし。
「フェンリルを殺す。そしてお前も殺す」
　ガーゴイルは苛立った。こいつの思考展開のおかしさに吐き気がする。
　何かが部屋の中を駆け巡っている。
　マレブランケは咄嗟に、切り落とされた翼を拾おうとする。まだ、くっつく筈だ。

　しかし、山羊頭の方は。彼の弱点をよく知っている。密室、閉塞的な場所。彼の機動力を殺す場所。
　マレブランケは力を使うしかないと思った。
『クリプト・クロス』。それが、彼の能力だ。
「おい、エピゴーネン。お前、自分の力に何て名付けている？」
「『リーフ・ソイル』。質問は終わりだろ？　お前の顔面を砕く時間を早めたいんだよぉ。お前、石で出来ているからジャムやミート・ソースにはならねぇんだよなあああ？　ふんっ、つまんねええっぇぇ」
「オーケー、オーケー、俺の話を聞いてくれ。俺は裏切り者じゃない。デイエス様が悲しむ、同志の諍いなんてな？　あの方、俺達に自由になれ、って言ってくれたんだぞ？」
　気付けば。
　両足に、何かを打ち込まれていた。
　内部から、破壊されていくような感覚。彼は石像であるが故に、苦痛こそ無いが。激しい痙攣を引き起こす。
　小さな白蟻や魚などが、彼の両足を食い散らかしていっている。
　ああ。畜生。
　デイエスの話を聞く限り、あのフェンリルならば。とっくにこの男の力の正体を見破っている筈だ。しかし、マレブランケの頭脳じゃ分からない。何をされているのかが。
　だが、出来る事はある。
　彼は自分の両足に息を吹き掛ける。
　すると、足の中で蠢いている者達が動きを止めていく。みな、石へと変わっていって、マレブランケの肉体の一部へと変わっていく。彼は近くの壁などにも、息を吹き掛けていった。それらも石へと変わっていく。
「こいよ？　てめえも石へと変えてやるよ」
　エピゴーネンは怯まない。
　また、何かを飛ばしてきた。
　今度は、マレブランケの右肩が激しく抉れた。
　おそらくは、鋭利な何かを操っているのだろう。
　風を引き裂く音が聞こえる。同時に、自分の肉体の一部、一部も削り取られていく。
　マレブランケはようやく気が付いた。
　彼は身体の一部を鞭状に変えて、鋭い刃のように振るっているのだ。それがかなり強力な攻撃になっている。
　マレブランケは、何とか攻撃の軌道を予測して避けていく。
　ワインセラーの一部に、山羊頭の男の鞭が食い込む。
　ワインのボトルの部分部分を石化させる事によって、石化箇所をエピゴーネンから見えなくしたのだった。
　それは鋭い蔓草のようだった。

　マレブランケは迷わなかった。
　捥がれた部位を手にして、階段を駆け上る。
　追撃が無いように、戸棚で障壁を作って。それを石へと変えていく。
　生きる事に、今、必死になっている。
　虚空の中で生きて、石像の肉体を持っている自分が、今、必死になっているのだ。
　地下室から脱出する事は出来た。
　彼は捥がれた翼をくっ付ける。巧くくっ付かない。
「ははあああああっ、畜生、畜生」
　地下室の扉を閉じる。そして、全力疾走した。

†

　マレブランケは絶望の表情へと変わる。
　エピゴーネンの背中。そこから、一人の男が浮き上がっていく。
　そいつは、顔を包帯で隠した男だった。
　デイエスから散々、聞かされていた存在。憑依する者シェリダー。
　ぼとり、ぼとりと、山羊頭の男の口の中から、魚やタコ、貝などが飛び出していく。そして、頭が弾け飛んでいき、無数の蝿が生まれ出していく。
「はあああっ、畜生……」
　マレブランケは戦慄していた。こいつの能力が一体、何なのか理解が出来ない。
　もはや、それは塊としか言いようがない生き物だった。背中から軟体動物の脚や、無数の昆虫の脚が生え出している。
　そして。
　一体、何処から湧き上がってきたのだろうか。その気配を感じ取る事が出来なかった。あるいは、初めから。何処にでもいたのかもしれない。
　この館の中にいる以上、何処にでも出くわすような。
　マレブランケの背中に、顔を包帯で覆った男が覆い被さっていく。
　今、二人の敵と戦っているのだと理解する。
　だが、遅かった。
　もう、自分は敗北するのだ。
　そして、シェリダーに肉体も精神も操作されるなり、エピゴーネンによってばらばらにされるなり、分からない。けれども、明確に負けて自分は死んでいく。
　これまでの記憶の痕跡を辿ってみる。
　デイエスを信じ続けようとした。
　彼の持っている美を。
　グロテスクな容姿を持つマレブランケにとって、デイエスは神のようなものだった。

†

「フェンリルか」
　ラハブの背後に、一人の青年が立っていた。
　金色の髪の中に、水色が混ざっている。
　彼の名はシームルグという。
　ラハブと対峙したフェンリルに、興味を持ったみたいだった。
　シームルグはラハブの友人だった。親友だと言ってもいい。
「奴はお前と戦いたがっていたみたいだけど。お前は争いを好まないんだもんなあ？」
　彼もまた、細身の青年だった。とても好戦的とは思えない。
　薄桃色の唇に、乳液のような肌をしていた。
　漆黒のタンクトップに、ボンテージ・スカートを穿いている男だった。両腕には、アーム・カバーを嵌めている。
　彼は数本のナイフをポケットの中から、取り出す。
「俺は彼と戦ってみる。戦い甲斐がありそうだからな？」
　ぱん、ぱん、ぱん、と。シームルグの周囲で閃光が弾け飛んでいた。
　更に、閃光は回転しながら彼の周りを回っている。
　彼は陰惨に笑っていた。
　強く強く、美しく。
「ふふふふっ。需要と供給が合っているんだね？　君は強くなりたいんだよねえ」
　魔女帽の少年は笑った。
「ああ、強くなってな。自分の限界を見たいんだ。何処まで行けるのかとな？」
　彼は髪を掻き揚げる。
「それにしても、お前はどうするつもりだ？　あの場所は終わってしまった者達の世界だぞ？お前が興味を持つものは俺も大概、興味を持つから。付き合ってみたんだが、しかし、下らんな」
「そんな事無いよ。みんなみんな、面白いんだよ？」
「そうか、じゃあ、俺は俺のやりたい事をやるぜ」
　そして、大地を軽く蹴った。すると、彼はあっという間に、空へと向かっていった。
　彼の姿が見えなくなる。
　くすくすくす、と黒衣の少年は楽しそう。
「鳥は何処まで飛ぶんだろうね？　ふふっ。君はいつだって戦いが好きなんだからねえ」
　ラハブは楽しそうに空を見上げた。空は何処までも広く遠い。

†

　メビウス・リングは無数の虫が集っている部屋に入り込んでいく。

　虫達は楽器のように、泣き喚いていた。
　全てはメビウスへと到達する事が出来ない。それは圧倒的なまでの彼女の無価値なものに対する否定の意志から根差している力であるとも言える。
　部屋の中から、囁き声が聞こえてくる。
「我が名は。ミニオン。お前は何？」
「シェリダーを探しているのだが、知らないだろうか？」
　ぶわわっ、とざわめきが響いていく。
「おそらくは館の者達に、次々と乗り移っているのだろうな。理解しなければならないな、奴の能力を」
　だが、大体。既に概要は分かってきている。
　後は、どう消去するべきかだ。
　無数の虫達が、弾け飛んでいく。
　それは爆裂して、強烈な攻撃となって空間を弾き飛ばしていく。
　ミニオンはメビウスが何をやっているのか、理解していない。只、無為に攻撃を繰り広げている。強い衝撃を与え続けていれば、メビウスに届くのだと思い込んでいる。
　メビウスはこの化け物の存在をいないように扱っている。
　そう、メビウスの残酷さは。彼女は意味も無いと思う存在はさながら、存在していないかのように扱う部分がある。彼女はシステムとして存在するが故に、他者への関わり方は冷酷そのものでさえある。

†

　無数の骸骨達が彼を出迎えた。
　ブレイズは街へと着地する。
『歯と爪』と呼ばれている場所だ。人骨に竜の生体エネルギーを注いで、仮の生命を与えられた動く骸骨達が住んでいる街だ。彼らは『ドラゴン・トゥース・ウォーリアー』と呼ばれている。
　骸骨達は様々な職業を持っていた。機械工作員、建築作業員。最近では、電子機器を扱える者達まで存在する。
　大きな洞窟の中へと、デイエスは運ばれていく。
　此処には医療施設も揃っている。
　骸骨達によって。デイエスに点滴が施され、胃洗浄が行われる。
　屍達は人間の意思の残骸によって動いている。ひょっとすると、この骸骨達は、かつて医療に携わっていた者達の意思の集積体が乗り移っているのかもしれない。
　かたかたと、まるで意思があるかのように。骨達は忙しく動き回っている。
　此処はドラゴンと骸骨ばかりが住んでいる場所だった。
　骸骨達がしきりに何かを唸っていた。ブレイズには聞こえる、駄目かもしれないと彼らは言っている。

ブレイズは彼の心が分からない。何があって、あのような行動に移ったのだろうか。
人間の持っている肉体の脆さ。おそらく、それは強く心の弱さに左右されるのだろう。
昏睡状態のデイエスを蘇らせる事など出来るのだろうか。
彼は生きる事を望んでいない。死を渇望している。ならば、生かす事に何の意味があるのだろうか。
ブレイズは難しい哲学など考えたくはない。
只、助けたいから助ける。それだけなのだ。
命の鼓動。命の鐘。
それは、きっと救うべきものなのだ。
怪物達にも、信仰はあるのだろうから。人の命の鐘の音を、止めてはいけないのだろうと。

†

フェンリルは館の屋上にいた。
冷たい風が吹き抜ける。
どうすれば、シェリダーを倒せるのだろうか。彼の全貌を何とかして突き止められそうな気がしているのだが。
憑依する力とは、一体、何なのだろうか。
ひょっとすると、シェリダーは誰でもあって。誰でも無いのかもしれない。
そして、観念を実体化させて、他者を理解出来ると思い込み。他者に憑依する。
それが、彼の恐るべき能力。
だが、そんなものを恐ろしいとはもう、とても思えない。
「都合の良い場所にいるじゃねえかよ」
フェンリルは溜め息を吐いた。
もういい加減に馬鹿馬鹿しくなっている。
観念で世界を操作して、万物を理解して、結局の処。自分自身というものを築いていかない。それはどうしようもなく、滑稽なものでしかないのだ。
そう、空虚なものでしかない。
「で、お前は今度は何だ？」
「シームルグ。覚えておいて欲しい。あのラハブの連れだ」
ふん、とフェンリルは鼻で笑う。
二人の髪が風に靡く。
フェンリルはつまらなそうに彼を見下げていた。
「で、いい加減。オレはうんざりしているんだけどな？」
金色に薄い蒼が混ざる青年は、フェンリルを見据える。
無駄の無い肉付き。
シームルグは、男として異様なまでに美しい。

「俺と戦わないか？　戦う相手を探しているんだろう？」
　声のトーンに嘲笑を含んで、挑発するような物言い。
「お前が強そうには見えないんだけどな？」
　言いながらも、フェンリルは対峙する相手の両眼を凝視していた。
　この男は認めざるを得ない、確かな実力を有している。
「シェリダーなんてどうだっていいだろ？　俺と戦おうぜ？　心行くまで。別に殺し合いじゃないんだ。お互いが強くなる為のな？」
　彼は楽しそうに、フェンリルを見据えていた。
　戦いたくて、うずうずしているといった趣。
「ラハブの方が強いんだろう？」
「俺だって、かなり強いぜ？　この館の連中じゃ話にならないぜ」
「ラハブは何者だ？」
「傍観者」
　ふん、とゴシック・ロリィタを身に纏う青年は鼻を鳴らす。
「何に対しての傍観者だ？」
「この世界の秩序と混沌。それを俯瞰し続けたがっている。この世界の異能を理解したいんだ、彼は」
「そうか。で、お前は？」
「ラハブといると。強い奴と巡り合える。俺は強くなりたい、戦おうぜ？」
　男の髪が風に靡いていく。
　フェンリルは。
　いつの間にか、右手に細長い剣を握り締めていた。
　そして、暗い森の方を眺めている。
　お互い、仕掛けられない。
　相手の実力を肌で感じ取っているからだ。
「強さを求めた先にお前は何が在るって思っているんだ？　オレは多分、他人が嫌いなだけなんだろうけどな？」
「自分自身が解放されていくような気分がするのさ、分かるかな？」
　ああ。似たような連中ばかりだ。
　自分のある部分と、類似する部分。人はそれぞれ、そういったものを他人に見ているのかもしれない。
　お互い、相手の持っている力の秘密が分からない。
　ぞくぞくとするような快感。
　力の出し惜しみ、駆け引き。
「フェンリル、お前。凄いな？」
「何がだ？」
　シームルグは楽しそうに言った。

「たとえば強い武術の達人ってのは、相手の立ち振る舞いを見ただけで相手の実力が分かるってあるだろ？　その感覚なんだよ。いや、本当にお前は凄い。だって」
　シームルグは言い掛けて、止める。
　この黒白のドレスを纏う美青年の前では、何も出来ないのだ。動けない。
　攻撃する隙を見計らっている。しかし、その隙が見当たらない。
　おそらくは実力は拮抗していると踏んでいる。それだけの自負はある。けれども、動けない。
「確かに。お前は強そうだ」
　フェンリルは笑った。少し悪意のある笑みだった。
　少しずつ、仕掛けるタイミングを見計らっている。
「お前の考えている事は手に取るように分かる。お前は多分、直接的に攻撃を仕掛けられる能力を有しているんだろう？　小手先を使わずに真っ向から挑める力をだ。それは実際、凄いんだろうな？　教えておいてやると。オレはかなり、変則的だぞ？」
「だろうな……」
　金色と水色が混ざる男の顔が引き攣る。
　相当、やっかいな牽制の言葉。嫌味ばかりを感じる。
　言葉の一つ一つに、何かの探りが入っているかのような。
　口で言葉を発する以上に、フェンリルは何かを思考している。
　シームルグの動作の一つ一つを確認していっている。
「相当な実力者なんだろ？　お前の武勇を聞いてみたいもんだが」
「強力な怪物を幾つも倒してきた。この辺りに生息している化け物だったら俺の敵じゃない」-
「成る程な。ちなみにオレはそれ程、攻撃力や破壊力に長けているわけじゃない」
　謙遜的な事を言いながらも、強い自信に満ち溢れていた。
　フェンリルは、シームルグの眼を覗き見ていた。
　眼からは様々な情報が伝わってくる。顔の表情からも。そこから次の動作を予測出来る。
　そして、フェンリルは自分の鼓動を確認している。
　自分がどれだけ踏み込めるのか、自分がどれだけ動けるのか。
　相手の動きをイメージしている。
　フェンリルはシームルグの能力など見抜いていない。只、此れまでの戦いの経験の中から記憶情報を引っ張り出してきて。何が来ても対応出来るように構えている。
　お互いに、相手を見透かそうとしている。そして、どう動けばいいのかと。
　大体の動き方はもう、フェンリルは予測しているんじゃないのか。
　シームルグは身震いが止まらなかった。
　もう、どうしようもないくらいに。これまで戦ってきた相手とは違う。
　分かりやすい強大なまでの力は使って来ない。しかし、こいつは余りにもクレバーで無駄の無い動きをしてくる。そして、本当に鋭利な刃物か何かのような趣さえ出している。
　怖いと思った。
　戦っているうちに、怖いと。

　強い死の危険に晒されているわけではない。守らなければならない何かを壊されそうになっているわけでもない、それでも。
　この敵が怖いのだ、それはもうどうしようもない程に。
　お互いに相手のイメージを探り合う事が続いていく。
　相手側から見える自分。
「どうした。かかってこいよ？」
　楽しそうに挑発してくる。小馬鹿にしている感じ。
　シームルグは焦る。感情を揺さぶられる。
　こいつは、思っている以上の手練だ。

詩篇の七　亡びの出口－Fenrir－

　コッペリアは負傷した者達を絵として記録し続けていた。
　捥がれた手足。焼け爛れた顔。
　軍医の許可を得て、彼はこの部屋で写生を続けている。
　丁寧に細部に渡って、描写を続けていく。本来ならば眼を逸らしたくなるような傷口、包帯に滲んだどす黒い赤。化膿していく箇所。骨の覗いた箇所。
　眼を背けてはいけない、オブジェとしてではなく、生きて叫んでいる人間の姿として。自分自身の中に刻印する為に。
　泣き喚き、呻き叫び続ける者達の声を聴き続ける。
　心の中が焼け爛れていきそうだった。
　心の全てが真っ暗なものへと侵食されていき、様々な妄想が入り込んでくる。
　それを何とか、刻み続けたい。
　人形の輪郭を削るように、心をすり減らせばすり減らす程、何かに至れるんじゃないのかと。
　この施設では敵味方関係無く受け入れて、一つの治療機関を作っている。
　コッペリアは部外者だ。何とか許可を得て、熱心に患者達を観察している。
　言わば、他人の痛みに土足で踏み込んでいる行為なのだ。
　ある意味で言えば、そんなものは冒涜的な行為なのかもしれない。余計に、痛みに対して踏み躙っているんじゃないのかと。
　それでも自分自身の心に痛みを刻印しようと、此処に訪れた。
　彼には彼の信念があるのだから。それは医師達には伝わった。
　珍しい芸術家もいたものだ、と面白がられた。
　患者達と同じように、医師達もまた、苦しんでいるのが伝わってきた。どうしようもない、やるせなさ。救えない命を目の当たりにするという事。
　怪我人達の傷口に蛆が這っていく。化膿した傷口が腐って、切断しないといけない手足が出てくる。麻酔が足りていない。麻酔無しで手足を切り落とすと、そのまま怪我人はショック死してしまう。
　見ないといけない、苦しみや痛み。コッペリアは心がぼろぼろになっていきながらも、その光景を眺めている。自分の苦しさと対比させて眺めている。
　彼らの傷を眺め続ける事によって、自分の傷も塞ごうとしているのだ。けれども、逆に、より深く傷が広がっていくような感覚も覚える。何時間でも凝視した。視たものを、記憶の底から何度も、何度も反復して取り出せるように。自分自身をテープ・レコーダーか何かに見立てて。
　そうやって、自分自身は神なるものへと近付いていけるのだと。けれどもだ。
　どれだけ傷付けば、何かを得られるのだろうか。
　コッペリアは人形作家として表現するしか生きる道が無かった。それ以外には在り得なかったのだから。それ以外の生き方なんて出来なかった。彼は心が弱過ぎたから。女性的な感受性。見え過ぎてしまう世界の傷。

ひょっとすると、全部。自分が感じたものであって、他人の傷を理解したつもりになっているだけなのかもしれない。それでも、彼は他者の痛みを知りたいと願っている。
そうすれば、いつかは自分の中の苦しみが癒えると信じて。あるいは苦しむ事によって、自分自身が解放されるのだろうと信じて。
けれども、終わらないのだとも知っている。何故ならば、自分で選んだ道なのだから。それ以外には、自分にとって何も無いのだから。
コッペリアは、他に何も無かったのだから。
真っ暗な世界の中をまだ彷徨っている。
自分の傷口も化膿して腐っていくのだろう。
鋭く自分自身の心を精神を抉っていく。それは、肉体の痛みにも等しい。
世界全体が傷口ばかりに見えてしまう。パラノイア的なものに、蝕まれていく。
もしかすると、このまま狂ってしまって自分は発狂して壊れてしまうのかもしれない。それでも、彼は戦い続けている。
それが、彼にとっての宿命なのだから。他には何も出来なかったから。
コッペリアは幸福であり、生きる意味を見い出している。
メビウスにとっての理想のボディを創りたい。
それから、苦しむ者達の傷を投影した究極の人形を創りたい。
彼を生かしている意思。揺ぎ無いもの、流れていって、入り込んでくるものを吐き出して、吐き出して自分自身をズタズタにして強くなるしかないのだ。
まだ、折れない。
トラウマなどを抱えて、生きる事に絶望を見い出していった人々の為にも、まだ折れるわけにはいかないのだ。それにしてもだ、一体、自分は痛みとどのように対話しているのだろうか。痛みを捻じ込んで、捻じ込んで、捻じ込んでいって、それでも自分の創作物を見て。人は救われるのだろうか、むしろ、自分の表現によって、より人を追い込んでいってしまうのではないのだろうか。
分からない、本当に分からない。
人形という存在、それが意味するもの。
コッペリアは自分は、パラノイアなのかと疑ってしまう事がある。
痛みなんて、実体として存在しないにも関わらず、痛みは存在しているのだと。他人の痛みを自分の痛みとして捕らえる事が可能なのだと。
それでも、伝えたいものがあるのだから。
たとえ、自分の視ている世界が観念でしかなかったとしても。それでも、自分は苦しみ、他者の痛みをイメージして、人形を作り続ける。毎日、毎日、苦しくて、苦しくて仕方が無い。それでも、自分は人形を作り続ける。そう、人形を作る事によって世界中の痛みと向き合っているのだと錯覚する。全ては傲慢でしかないのかもしれないのだけれども。
コッペリアは結局は自分自身と戦っているだけなのかもしれない。
メビウスは、コッペリアに可能性という仕事を与えているだけ。

別に、コッペリアじゃなくても良かったんじゃないのかと思えてくる事さえある。
別に、自分は大した才能には恵まれていないと思っている。
けれども、個展を開いて、小さな美術展に自分の人形が展示される為に、好きになってくれる者達も。少数ながらも存在する。ならば、彼らの為に表現し続けたい。
そして、これから出会うであろう、様々な痛みを持った人達。苦しんでいるのは、君達だけじゃないんだよ、と伝えたい。そして、自分なんていう存在なんて、踏み越えていって欲しい。
自分は、痛みを表現する事しか出来ないのだから。
メビウスが、システムという位置を使って。コッペリアに衣食住を提供してくれている。そう、自分は痛みを表現する事以外は全てが無能だった。何をしても駄目だった、それは子供の頃から、ずっとずっと続いている。
だからこそ、他人は自分のようには為って欲しくないと思っている。
自分という存在を乗り越えて、生きて欲しいのだと。
何も無かった自分がたった一つだけ手にしたもの。メビウスのお陰。
烙印を背負って生きていかないといけないのだと。
表現者としての烙印を。
メビウスのボディも、少しずつだが出来上がっていっている。
長い目で作ってくれと、彼女からは告げられている。遠回りして、色々な人形を作っていって、メビウスの肉体を完成していって欲しいと。何度、しくじったって構わない。それでも、創るごとに、日々、成長していっているのだからと。
けれども、自分がおかしくなりそうになる。世界には自分一人だけ。師であるメビウスさえも疑ってしまう時がある。どうにもならないし、どうする事も出来ない。
妄想が入り込んでくる。
他人の思念がだ。
こういう風に、傷んでいるんじゃないのかとか。記憶が飛び飛びになったり、まともに生活が出来なくなったり。一日の殆どを寝たきりで生活せざるを得なくなる時も多い。

†

デイエスは深い暗闇の中にいた。
未来は無い……閉ざされていく。
光の当たる世界で生きていく事なんて出来ない。隣にいたセイタンの死を垣間見て。そう直感した。何故か戸惑っていたブレイズ、彼を信じられる事は出来なかった。ならば、自分から死を選ぶしかないのだと。
みんな大きな鳥篭の中に、引き篭もっているのだ。
出たいと願っても、出られない。
だからこそ、外側の事を夢想して生きる。
デイエスは顔と言葉の力で。外の女性達に崇拝される。

フェンリルと対峙して、敗北して分かった。自分の能力は生身の他者には通じないのだろうと。
結局の処、自分の自閉世界の中で完結された力。
それは何処までも滑稽で、醜悪でさえあるのだ。
本当の自分を知ってしまって、自分の心の脆弱さ。女々しさを知られて、女達は自分を否定するのだろう。生身の自分はどうしようもなく、醜い本性を抱えているのだ。
だから、女達は彼を嫌うだろう。
シェリダー。誰にでも為れる力を持っている男。彼は本と情報だけで、他者に憑依して、他者の人生を操作する事が可能だ。
彼のように生きられる事を、セイタンも望んでいた。
観念、自意識からなる他人。
それは全て、自分のイメージの延長でしかないのだろうと。
そして、みな。イメージの世界から抜け出せないのだろうと。
本当はみな、分かっている。この館に来た者達の全てが。

†

シームルグの『サンダー・バード』。
それは熱エネルギーの摩擦を操作出来る能力だ。
物体と物体に生じる熱の膨張や振動をコントロールする事によって、光や雷、炎などを発生させ。肉体にエネルギーを加えて、高速移動や飛翔が可能になる。
それは、変幻自在な応用が可能な力となっている。
彼はナイフや剣の柄を手にしている。
試しに、それを空中に放り投げてみた。
先に仕掛けた方が、不利かもしれないが。シームルグは焦り始めていた。
フェンリルの両眼。それを見つめているだけで、おかしくなりそうだ。
刃物や冷気を思わせる。それから、霊廟さえも喚起させる。
周囲一帯に、閃光が撒き散っていく。
そして、光の粒の雨が降り注いでいく。更に、それが環となって広がっていく。
光の環は、辺り一面にゆらゆらと蠢いていく。
完全に、これは牽制だ。
フェンリルの能力を見破らなければならない。
シームルグは背後に気配を感じる。
背中を鋭利な何かによって、切り付けられた。……浅い。
攻撃の軌道が見当たらない。
シームルグは飛翔していた。
空高く舞い上がる。

フェンリルの姿が見えない。
まるで、煙が溶けるように消えている。
いつの間にか、死角に回り込まれているのだ。
彼はシームルグの見えない場所で移動している。
おそらく、彼の能力は空間と空間を自在に移動出来る。ならば、瞬間移動だろう。
シームルグは、彼の攻撃を受ける事によって。彼の能力を見定める。
同時に、相手も此方の力を知ってしまっている。
次は、力の効果と範囲がどの程度のものなのか知る必要がある。
実力がどの程度、開いているのか確認出来る筈だ。
シームルグは。
自分の力の応用力と威力には自信があった。
自分は誰よりも強くなれる可能性を秘めているのだと思い込んでいた。
シームルグは誇大なまでの、自信過剰さな性格をしている。実際、大体の敵には勝ってきたし。負ける事があっても、再戦して、敵を倒す事が出来た。
しかしだ。このフェンリル、こいつは本当にやっかいだ。
胸の高まりを抑えられない。
フェンリル、彼は相当に熟練された力を持っている。
強く、隙が無い。
そして、彼は面白いまでに歪んでいる。
その歪みは、まるで彼の生きてきた痕跡さえ滲み出ているかのようだ。
あの眼を見ていると、背筋が凍りそうだ。
相当、強い他者に対する憎悪を抱えている。
彼の心は凍て付いているのだろうか。身震いする。
靄や霧、雨や吹雪、氷河の只中にいるかのよう。
呼吸が次第に出来なくなり、心拍数が上がっていく感じ。
瞬間移動だろうと当たりを付けているのだが、その全貌が掴めない。
今度は脇腹に痛みが走る。
皮を切り裂かれただけだ、傷は浅い。
しかし。
シームルグは一瞬、目の前が真っ暗になる。
本来ならば、間違いなく殺されている。
その位置にいて、その体勢を取っていた。むしろ、自分の方が相手に取らせていた。戦いにおいて、どうにもならない場所へと連れ込む位置。
シームルグは仮に“絶対空間”と呼んでいる。
それは戦いにおいての死線と呼ばれるものかもしれない。
本気の戦いにおいての、瞬時の読み合いと一手。
本来ならば、シームルグは死んでいる筈だった。フェンリルがその気ならば。

となると……彼は、何らかの理由でシームルグを殺す気が無いのだろう。
「成る程……。俺も勝てればいいからな？　お前はやっぱり最高だ」
今、楽しくって仕方が無い。これこそを望んでいたのだから。
殺し合いではない、純粋な力と力の勝負。
それを自分は望んでいる。
サンダー・バードを開放していく。
彼の周囲は光の帯によって包まれていく。
それは、まるで天空を飛翔する雷鳥のようだった。
下手な小細工はつまらない。全力を打ち込んでみたい。
手にした柄から、光の剣が伸びていく。
これをフェンリルへとぶつけてみたい。
攻撃を与える為に、よりフェンリルの下へと近付かなければならない。
胸の鼓動が鳴り響いていく。限界を超えられそうな歓喜。
樹木の陰にて、フェンリルの姿が見えた。
シームルグは迷わなかった。
“ロック・オン”した。
全身に持っている可能な限りの力を引き出そうとする。
閃光が撒き散っていく、それはミサイルのように辺り一面へと飛んでいく。
それは、フェンリルの姿を追跡していき、撃ち込まれていく。
森の一部が蒸発していった。
フェンリルの残像を追いながら、光の剣は追撃していくのだ。
光の剣は槍へと変わり、矢へと変わり、それが辺りに撒かれていく。
変幻自在に光と炎と雷をコントロールする事によって、シームルグの能力は強大なものとなっている。理屈としては同じものなのだが、その応用で何だって可能にする。
森の中へと、光の矢を降り注いでいく。
完全にこれも、牽制の為だ。
シームルグは、自分の周囲に。本命である攻撃を張り巡らせていた。
この光の矢によって、相手は動揺しないだろうか、そんな期待をしている。
しかし。
「幾らやったって無駄だぞ」
そう言われて。
シームルグは強く、腹を打たれた。次に側頭部を蹴り飛ばされて。完全に、全身のバランスを失う。
「お前も駄目だ。オレの相手には為らなかった、なあ。オレは強くなりたい。弱い自分が赦せないのだから。お前は確かに強いのだろう。それは認めていいんだろうな？　それが、お前自身にとっての生きる意思なんだろうからな？　しかしだ」
冷気を帯びた眼。それは何もかもを、諦観しているようで。

しかし、同時に。自分自身に対しては……。
「オレはオレの為に強くなっている。それは、どうしようも無い事だ」
彼は鼻を鳴らして、シームルグを見下す。
ああ、崩れそうだなと。金色と水色の髪をしていた男は思った。
自分が此れまで信じていた自分の強さ。
人生の中で積み上げてきたもの、そういったものがまるで通用しない。何て馬鹿馬鹿しく、下らないのだろう。一体、自分は何に対して強さを求めてきたのだろうか。
フェンリルによって。右肩を抉られていた。
この敵には、決して敵わないのだろうと思った。きっと、こいつはこの先も、ずっとずっと強くなっていくのだろう。
けれどもだ。
まだ、自分の本気を見せていない。
サンダー・バード。
全身が無数の色彩へと、発色していく。
光と溶け込む自分。とても、心が落ち着く。
このまま、何処までも飛んでいけそうな感覚。たとえ、世界の果てまでだって。
気付くと、全身が加速している。加速の上に、更に加速を重ねていっている。
自分は何処まで、速くなっていくのだろうか。分からない。
辺り一面の視野も、明晰に網膜に映っている。
フェンリルの強さの限界も、段々、分かってきている。
彼は、一定以上の速度に付いていく事が出来ない。
そう、初めから本気で戦うべきだったのだ。そうすれば、難なく勝利していた。
余計な好奇心を出さずに、全力で戦って、彼を倒せば良かった。
空を、森を加速していく。
自由という解放感。
この全力の力を使っているのならば、本当ならば、殺されているような状況に立たされる事なんて無かった。醜態を晒す事なんて無かった。
もっと、全力を底上げしていこう。もっともっと、自分の限界というものを超えられる筈なのだ。これ以上に無いくらいに、解放感と共に。
ふと、気付いた。
フェンリルの姿が何処にも見えない。
「……なあ、ひょっとして」
強い屈辱感に襲われる。今まで経験した事が無いような怒りが込み上げてくる。
途中で、飽きて。戦闘放棄をしたのか？
シームルグは明らかに引き攣って、愕然とした。

†

　マレブランケは。
　窓の外を眺めていた。
　もう、自分は敗北してしまうのだろう。そればかり、思っていた。
　しかしだ。
　照明によって、包帯の男の影はうろたえていた。
　どろどろに様々な生物が混ざった怪物の方も、戸惑っていた。
　石像の男は、必死で走って逃げた。
　二人の敵から、逃れなければならない。
　窓を割って、脱出する。
　そういえば、ちゃんとくっ付かなかった腕と翼はそのままだ。そんなもの、関係が無い。
　とにかく、生き残る事。
　生きて、デイエスの為に人生を尽くす事。しかし、彼の主人は一体、何処へ行ったのだろうか。森の中をうろうろしていく。
　すると、仄かな明かりのようなものが見えた。
　一人の魔女帽を被った少年が、壷を眺めていた。
　この辺りの景色は変形して、まるで童話や絵本の世界のようになっている。
「お、お、お前は一体、何なんだ？」
「よく来たね。僕の名前はラハブ。まあ、歓迎するよ」
「お、お、お、俺を化け物達から守って欲しい。あの得体の知れない連中から」
「ふふふふっ、同属嫌悪なのかな」
　石像の怪物は苛立った。
「違う、違うぞ、ふざけるな？　俺は俺は、奴らが怖いんだ。この館全体を支配しているシェリダーを、デイエス様を同じように崇拝していたエピゴーネンを。俺は自分が何故、化け物なのかも分からない。だからこそ、化け物が怖いのかもしれない、なあ」
「ああ、助けて上げるよ」
　ラハブは難なく言った。
「この辺りにいてくれれば、見守って上げる事が出来る。離れないでね」
「ありがたい……しかし、それにしても。俺達が住んでいる館は一体、何なんだ？　お前が何者なのかこの際、どうだっていい。あの館は一体、何なんだ？」
「大きな可能性で、宝箱だよ」
　屈託の無い笑み。
　ラハブは木の葉によって包まれた食べ物を差し出す。
　それは、硬い餅のようなものだった。
　マレブランケはそれを差し出されて、思わず口にする。
「美味いな……」
「特性の団子。といっても、そこら辺で市販されているものだけどねえ、さてと。君は他にも何

か聞きたい事があるんじゃないかな？」
　完全に人を食っていた。
　しかし、何だか悪い感じはしない。悪意らしきものも感じ取れない。
「そうだ。デイエス様を見かけなかったか？」
「ああ」
　黒帽子は空を見上げる。その後、森の奥を眺めた。
「彼と光の男の子は、遠い場所へと船で旅立ったよ。一体、何処に行くんだろうねえ。彼らは、どのような生活が待っていて、どのような運命へと辿り着いて行くのか。とても、とても興味があるよ」
　極寒のような眼をしていた。底知れない深海に連れられていくかのような感覚。
　マレブランケは片腕と片翼で、ラハブの示した場所へと向かっていく。
　ラハブは彼の結末がどうなるのかも、楽しそうにしていた。
　みんな、みんな、移り変わっていく。きっと、人生はくるくると回転していくのだろう。それを、彼は傍観していたい。とっても、楽しい遊戯なのだから。
　ラハブは思う。
　おそらくは、この館にいる者達は閉ざされた世界を生きざるを得なく。そして、自分自身が変わってしまうという事を恐れ、結果。変われなくなってしまっているのだろうと。
　けれども、ラハブは信じたい。変わらない理由の意志をだ。
　あのフェンリルがそうであるように。
　館の者達は抜け出せない世界を生きて。
「ふふっ」
　ラハブは笑う。とても、楽しそう。
　人はそれぞれ、決まってしまった人生の中を歩み続けるしかない。過去も現在も未来も、そうやって構築していくしかない。
　けれども、もし。自分は何者でも無いのだと悟ってしまった瞬間に。
　他人の人生こそが、本物だと思い込み、確信し、あるいは諦めてしまった瞬間に。世界は閉ざされていく。人生というものには、可能性や限界が存在するのかもしれない。
　この館を出て行った者達は、何処へと向かっていくのだろうか。
　館の中でしか生きなかった者達。それから、館に辿り着いた者達。
　フェンリルとシームルグの戦いは、じきに終わるだろう。
　それから、メビウスとシェリダーの戦いもだ。
　そうやって、館の中が。更に空虚なものと化していった後、何が見えるのだろうか。みな、何を見て。何を信じて、生きていくのだろうか。それをとてつもなく、楽しみに思う。
　ラハブは思う。自分はシェリダーと何が違うのだろうかと。
　観念の中に生きて、他者に憑依するシェリダー。
　観念と現実を一体化させていくラハブ。
　くすくすっと、ラハブは何もかもを嘲笑していく。全部、馬鹿みたいだからだ。

「ふふふっ、どうだっていいじゃない。みんな、それぞれの可能性があるんだからさあ」
　ラハブが信じているものは、混沌ではなく。システムの方だ。
　メビウス・リングという存在を追っている。
　それにしてもだ。
　シェリダーとは、一体。何なのだろうか。
　みんな、思考している。
　あの光の男、セイタンも。デイエスも。
　フェンリルも、メビウスも思考している。
　シェリダーは、他人の人生の全てを否定していく。生きた痕跡を、意志を。存在しているという個々の歴史を。観念の中で生きていながらも、他人の体験を我が物として生きて、他人の人生を操作していく。そう、彼は他人が生きて戦う事を無価値にしていっているのだ。それこそを、メビウスが否定しなければならないものなのだ。
　メビウスは仮に“混沌”と過程している存在。
　メビウスが決して、その存在を赦してはいけないもの。
　ラハブはそんなメビウスが好きだ。彼女の存在を追っ掛けている。
　ラハブは色々なイメージを巡らせていく。
　あの大きな館は、巨大な牢獄で。迷宮なのだ。
　立ち止まってしまった者達は、みな、諦めて生きてきた。
　他者のいないまま、自分だけの世界をみな、構築していっている。
　どうしようもない、閉ざされた世界。
　シェリダーには、実体が無いのかもしれない。
　包帯で巻かれた顔の下には、自分自身の顔が映っているのかもしれない。

†

　シームルグは地面を伺う。
　様々な感情によって、抑制が効かなくなっている。
　火花を辺り一面に撒いていく。
「ああ、畜生。あの野郎、クソ。あの野郎……」
　苦々しい、声になる。
　ふと。
　背後に何かが佇んでいた。反応する余裕も無く。
　彼は全身に、衝撃を受けて。酩酊し、昏倒し、意識を失っていった。

†

　コッペリアは様々な病気を抱えている者達と触れ合っていく。

そうやって、心の苦しみを理解していきたいのだから。
各地の精神病院を巡っていった。
幻覚や幻聴に魘されたり、何年もの間、妄想によって苛まれたり。狂った論理体系を吐き出し続ける者達もいた。
白い病室、空白の羅列が続いている。
忙しなく、医師達が動き回っている。
途中、妄想に苛まれて暴れている患者を取り押さえたりしている光景を見た。
コッペリアも、体験として一度、入院してみようかと思った。実際、彼自身が狂気の中へと埋没していきそうになっているのだから。
此処にいると、無数の妄想が心の中に入り込んでくる。それから、諦め、絶望。他者に対する敵意。自分の殻に閉じ篭り、全ては失われていくのだという思念。
実際、彼らの人生は終結しているのだろう。
只、薬物によって生かされて、寝台の上で過ごす日々。
家族や国家の経済によって生かされ続けている者達。
下手をすると、コッペリア自身。彼らの中の中に混ざる事にも為りかねない。少なくとも、自分自身。入ってくる痛みや苦しみと戦っているのだから。
自分で自分を傷付けていく。
コッペリアの過去。今はまだ、思い出せない。今はまだ、記憶の中が朦朧としている。自分が何故、此れ程までに痛みを表現しようとしているのか、その痕跡が分からない。
封印している記憶が沢山あるのだろう。
もしかすると、それは此処にいる者達の体験に近いものなのかもしれない。
コッペリアはずっと、他人に生きる苦しみを言えずに育ってきた。
メビウスだけが、コッペリアの才能を認めてくれた。
コッペリアの精神的支柱はメビウスだけだった。もし、彼女から存在を否定されたのならば、コッペリアの生きる道筋の全てが失われてしまう。
自分には、これしかないのだからと。
コッペリアは痛みを背負って生きている。
けれども、考えれば考える程に分からなくなる時がある。
自分の本来の心の傷とは、一体。何なのだろうか。
苛め？　虐待？　性的被害？　それとも、別の何かなのか？　まるで分からない。色々なものが混ざっていって。コッペリアという人格を構成していっている。
むしろ思うのは、自分自身が自分の人形の模造品になっているのではないのかと。
もはや、幻覚も妄想も。イメージとなって入り込んでいって、どれが他人の感覚で、どれが自分の感覚なのか区別が出来ない。
様々な苦痛や苦悩、それらと格闘していかなければならない。
人間は此れ程までに、色々な種類の苦しみの感覚を持っているとは思わなかった。
人は弱く、この精神病棟のように、苦しみの中から抜け出す事が極めて難しいのだろう。コッ

ペリアの人形は、きっと本質的には誰も癒せない。只、少しだけ楽にして上げられるだけだ。それが、一体、何になるのだろうか。
　自分の人形では、誰も救済出来ない。分かっている。
　哲学や小説などの表現方法を持っていたのならば、また違ったのだろうか。あるいは、音楽とか絵画とか。でも、自分は所詮、人形を作っているだけなのだ。人形なんて、受け皿がとても狭いんじゃないのかと。
　実際には、此処にいる医者達の方が患者達を救っているのだ。この前行った、戦争の負傷者達、彼らも医者達によって救済されている。そう、自分は無価値な事ばかりをしているんじゃないのかと。表現なんてものは、所詮。観念を与えていっているものでしかないのではないのかと。
　そんな事を思って、自分が酷く無価値に思えた。自分のやっている事も何もかも、結局の処、自分はメビウスに迷惑を掛けてばかりで。メビウスの理想のボディを創造する事が出来ずにいる。そんな自分に一体、何の意味があるのだろうか。
　前に出会ってきた、様々なコッペリアのファンの子達。
　みんな苦しんでいた。みんな彼の作る人形を見て、心が癒されるといった。けれども、その人達の心の傷を塞ぐ事なんて出来なかった。結局の処、自分は向精神薬や注射器、レントゲン、手術室。そういったものに、限りなく劣っているのだ。
　人形制作とは……芸術とは一体、何なのだろうか。
　伝える事。自分にとっては、痛みを伝える事。
　一体、それに何の意味があるのだろうか。まるで、分からない。
　日々の食事を作っている者達、衣類を作っている者達。建築に携わっている者。
　彼らこそが、人々を生かしている。
　自分は、結局の処。何もしていやしないのではないのだろうかと。
　それでも。
　それでも、自分には人形を作る事しか出来ないのだ。他には何も出来ない。
　そういった使命を与えられている以上、作り続けるしかないのだから。
　本当に、他人の痛みなんて理解する事なんて出来るのだろうか。
　全部、自分の観念でしかないのかもしれない。
　それでも……それでも、彼は創り続ける。痛みを刻印した人形を。
　それは、生涯。続いていく作業なのだろうから。

†

　ブレイズは。
　空を飛んで、世界を眺めていた。
　デイエスは死亡した。彼の墓を探している。何処に埋葬するのが、良いのだろうか。
　生還する意志が彼に残っていれば、峠を越える事が出来たかもしれない。けれども、彼は死にたがっていた。それはもうどうしようもないくらいに。

思い出す、ちょっとしたやり取りで。彼の眼は、何処か他人が怖いのだと思っていた。
何故、簡単に死んでしまったのだろう。
何故、彼は生きられなかったのだろうか。分からない。
何故、人間は自殺を選ぶのだろうか。まるで、分からない。
ブレイズは死にたいという感覚が分からない。それは、彼の肉体の強さがあり、長寿もあるからなのだろう。そして、敵を葬るだけの強い力が存在する。
だからこそ、それを無闇に振るう事に意味を感じない。
何百年、怠惰に生きた処で。ブレイズには別にどうとも思わない。
むしろ、生存しているだけでも、有り難いと思ってしまう。
弱さというものは、強き肉体を有している者には分からない。それはどうしようもない事なのだろう。
幽霊船が見えた。
そこから、また何者かがやってきた。
腕と片翼の失われた動くガーゴイルだった。
彼もまた、憔悴していた。メビウスからの指令は人間に見えないものが、幽霊船からやってきた場合、始末しろ、との事だったが。躊躇して止めた。
もう、浅はかな事はしたくないからだ。
「お前は何だ？」
ブレイズは大きな体躯で、ガーゴイルに声を掛ける。
石像はぶつぶつと、うわ言のように呟いていた。
「デイエス様……。俺は、俺は貴方と同じように、館を抜け出しました。俺は貴方様に付いていきます、お供しますとも、ずっと……」
ブレイズは少し考えて言った。
「デイエス……。彼ならば、死んだぞ。薬物自殺だ」
ガーゴイルは虚空を眺めていた。
しかし、確かにブレイズの言葉は聞いているみたいだった。何の目的も無さそうな眼。巨大な飛竜はいたたまれなくなる。何故、此れ程までに小さき者達は弱いのだろうか。
どうにもならない、強き者と弱き者の差異。
やはり、この石像の怪物からも死を感じさせられる。
どうすればいいのだろうか、何を言えばいいのだろうか。

†

山羊の頭をして、色々な生き物が混ざった怪物エピゴーネン。
彼はあらゆる動植物を肉体に埋め込んで、その特性を使う事が可能だ。
エピゴーネンは。
通り掛かったメビウス・リングの捩れの攻撃によって、完全なまでにひき潰されて、圧縮さ

れて。殺された。
　黒衣の人形はふうっと、一息付く。少しだけ、人間らしい仕草。
　そして、彼女は何処までも冷淡で。感情というものを有していないような立ち振る舞いに戻る。
「シェリダーはひょっとすると。実体として存在していなく、館の者達全体が抱えている。想念……イメージの総称なんじゃないのか？」
　メビウスはそんな事に辿り着く。
　そう。
　元々、他者に憑依していく力を持った怪物なんて何処にもいないのだ。
　おそらくは、館の者達のイメージだけが作り出した架空の存在。そして、架空の存在にして幻影。館に生きる者達がいなくなった今となっては、消えていってしまうのではないのだろうか。
　そう、シェリダーとは人間の持つ弱さの一形態なのだろう。
　彼らの持っているイメージの中から生まれた怪物こそが、シェリダー。
　この館の者達の情念、観念世界を修正していけば、シェリダーという“混沌なる存在”は自然消滅していくのだろう。
　メビウスは状況を把握しようと、考える。
　セイタンとデイエスは、館の外へと向かった。彼らは一体、どのような人生を送り、どのような結末を辿っていくのか分からない。
　それから、デイエスを慕うマレブランケも外に。想念の中によって生まれた怪物達も、一通り始末した。この館は、徐々に“混沌なるもの”を失っていくのだろう。
「さて、それにしても。まだ、シェリダーの気配が消えない。何処にいる事やら」
「ああ、あいつじゃないのか？」
　暗い廊下の中で、開いた窓。
　黒白のゴシック・ロリィタのドレスを纏った青年フェンリルは、どうでも良さそうな顔をする。
「結局の処、オレ自身。自分の為に戦っている。自分自身の自己愛の為に。誰も為でも無いな。メビウス、オレはお前が嫌いだが。戦いの場を用意してくれて礼を言う」
「そうか……。私は後始末がある」
「好きにしてくれ、オレはもう帰る」
　そう言って、二人は別れた。

†

　圧倒的なまでの敗北。
　シームルグは、何故。自分が森の木々に全身を打ちのめされて、倒れているのか考える。
　身動きが取れない程、全身に痣が作られている。肩の関節も外されていた。

けれども、後遺症は残らなさそうだった。
そう、フェンリルの強さは異常だった。
つまらなそうな顔で、シームルグを打ちのめしてくれた。
フェンリル自身、気付いていないかもしれないが。あれは、シームルグの感覚で言う処の所謂、“達人の域”という奴ではないだろうか。
無駄な動きが一切、無い。そして、ゆるりくるりとシームルグの動きを凌駕していく。
「ああ……俺。本当に、小さかったんだなあ」
また、彼とは再戦してみたい。本当に次が楽しみだ。次はもっと、強くなれる。
そんな自信が湧いてくる。
「さてと……。傷が治り次第、俺も抜け出るか。自分自身を、ああ、しっかし。本当に悔しくて悔しくて、仕方が無いな？」
負けられないという意志。フェンリルは、相当に負けられないという意志を持っている。
彼は哄笑していた。まだまだ、自分の才能の限界に近付けるという事に対して。
サンダー・バードの応用力、反応速度。威力。まだまだ、先があるかもしれない。
敵対出来る者があるという事の幸福。それは自分が最強だと思い込んでいた時期よりも、ずっとずっと充実している。
あのフェンリルに、それからメビウス・リングというのも凄く強いのだろう。
まだまだ、自分には先があるのだという可能性。自分以上の強者。
「ははっ、俺って本当に単純だよなあ？」
彼は幸せそうに、ゆっくりと。傷んだ肉体を休めるべく、静かに眠りに付いた。

†

時計塔の上。
メビウスは塔の中へと入り込んでいく。
此処には、狭いながらも基本的な生活用品が揃っている。
人生を消費していくのは、充分過ぎるくらいの道具が揃っている。
「さてと、お前もシェリダーなんだろう」
メビウスは何かに気付いていた。
シェリダーという存在が何なのかに。
オルドルは塔の中に入り込んできた、謎の人物を眼の辺りにする。
そして、何事かを呟こうとするが。言葉にならない。
「さてと。お前に提示したい事がある。単刀直入に述べるぞ」
中年の男は後ずさりした。
「生きるべきか死ぬべきか。お前にそれを問い掛けたいのだが？」
オルドルはぼんやりとしている。全てが夢幻であるかのよう。
人形は冷たく彼を見下ろす。

「お前は何も無いから。この館へと迷い込んだ。此処はそういう場所だからな。さてと、お前もシェリダーを形作っているものの一人だ。お前を始末するべきかどうか」
　オルドルは口から泡を吹き始める。
　そして、近くの戸棚を倒した。がたがたと、食器などが転がって割れていく。
「お、お、お、お、俺、俺、俺には何も無いんだ。此れまで生きてきた中で、何も出来なかった。どうしようもない、空虚で虚偽に満ちていた」
「そうだろうな」
　メビウスは下らなそうだった。
　彼を相手にする事に対して、何の意味も感じなかった。
　だが。
　メビウスの背後に、亡霊のようなものが現われた。
　それは、顔を包帯で覆った男。
　この怪物は、イメージの中から生まれて暴走していっている。そして、今はメビウスの方へと乗り移ろうとしている。
　その包帯の顔は、無数に生まれては消えていく。ぐるぐる、ぐるぐると、顔達は。狭い部屋の中を駆け巡っていた。彼は意思が在るようで、意思は無い。
　彼は概念なのだろう。
　むしろ、彼を知覚してしまう者達にこそ問題があり、シェリダーというものは。人間が根源的に持っている弱さの一つなのだろう。
　観念の中に閉ざされていくという事。
　顔、顔、顔、顔。包帯で覆われた顔ばかりが、部屋の中に無数に現われて消えていく。きっと、この包帯の顔の下には。自分自身が映っているのだろう。
「私に憑依して、コントロールしようとしても。無駄だぞ」
　メビウスは詰まらなそうに告げた。
　オルドルは悲鳴を上げていた。
　観念によって形作られているもの。館の中に入り込んでいるもの、館で生活しているものは。シェリダーという存在を幻視し続けていく。その存在はまるで、影のように。みなの心に浸透していく。
　メビウスは、冷たく言い放つ。
「お前は生きるつもりが無いんだろう。ならば、どうするべきか。私に始末されるのか？」
　オルドルは呆然とした顔をしていた。
　そして、はらはらと涙を流そうとした。けれども、もう泣くべき感情さえも無くなっている。このまま、殺されてもいいのだと思ってしまっている。
　シェリダーは。
　メビウスのウロボロスの攻撃を受けて、雲散霧消していく。
　捻じ曲げられて、捻じ曲げられて、捻じ曲げられて、顔達の全ては消滅していく。
　それは、実体として本当に存在したのだろうか。

　光の男。セイタンは確かに、シェリダーを見た。
　オルドルも見た。
　館に訪れた者達は、みんなみんなシェリダーという存在を見ていた。
　しかし、果たして彼は実体として存在していたのだろうか。
　全ては虚構で虚偽、全ては消えていく。
　それはもう、無かったものなのだ。
「さて、どうしたものだろうか」
　メビウスは考える。
　そして、冷淡な眼で彼を凝視していた。
　オルドルは完全に竦んでいた。

†

　ラハブとフェンリルは再び、対峙していた。
「お前の本気と戦ってみたいんだけどな？」
「意味が無いと思うよ」
　ラハブは、やはり飄々としている。
　彼の周りに、無数の半透明な幽霊達が生まれては、消えていく。
　どろどろと、彼の傍にある鍋は煮え滾っている。
　どうやっても、全貌を明かしてくれそうにない。しかし、大体。彼の能力も理解してしまった。ただ、どの程度の強さなのかまでは分からない。
「いつか、オレと戦ってくれるか？」
「さあてね。でも、そういったものに囚われているのって。君やシームルグとか、一部の者達だけだよ。みんな、色々な生き方を持って。与えられた力を活用しているんだからさあ」
　そう言いながら、ラハブは薪に火を付けていた。
　香料の匂いが一面に広がっていく。
　無数の顔の形に刳り貫いたかぼちゃ達が笑っていた。
　フェンリルは詰まらなそうに、ラハブの下を後にする。
「ああ、そうそう。お前の友人。結構、面白かったぞ。中々の強敵だったと言っておく。只、彼からは弱点が丸見えだな。無駄が多過ぎる。確かに威力や反応速度は凄いものがあるが。隙が多過ぎる。その辺りを改善すれば、もっと強くなるんだろうな。おそらくは、オレみたいなタイプとは此れまで、余り戦って来なかったんじゃないのか？」
「ふふっ。よく見抜いているね。まあ、君も彼も応援しているよ？」
「まあ、オレは好きなように生きていくだけだ」
　フェンリルは、弱さと強さを同時に抱えて生きねばと思う。
　他人を殺害したい弱さと、自分を肯定したい強さ。
　フェンリルはこの場から、立ち去る。

戦える次のステージを目指して。自分の実力をもっと、底上げしたい。
ラハブ、シームルグ。楽しみだ。特にシームルグは今度、再戦してくるかもしれない。
その次は、敗北するかもしれない。
だが、自分自身。決して負けるわけにはいかない。
自分は他者を拒絶して生きる。自分自身が汚されたくないから。
フェンリルは迷わない、迷わずに。戦い、生きる。

†

オルドルは結局、生きる事となった。
空漠の中、また館の外へと放り出された。
シェリダーがまた実体化する事などあるのだろうか、分からない。
とにかく、メビウスは。みなの観念によって実体化したシェリダーは始末したと告げた。
オルドルは投げ出される。空漠の中へと。
一体、これからどんな人生が待っているのだろうか。いや、とっくの昔に自分の人生が終わっているのは知っている。後は只、虚無的に何も見つからずに生きていくだけなのだ。
それでも、それこそが彼に与えられた罰のようなものであり、彼が何も培ってこなかった事に対する罪に対する解答でしかないのだ。
オルドルは空を見上げる。
無数の透明な魚達の群れが泳いでいた。
天空の水族館だ。此処は、何処にも無いような場所だ。
オルドルは地面を見て、蹲る。もう、自分の人生はどうにもならないのだと知る。
シェリダーは、きっと誰の中にもいる。
包帯の下には、自分の顔が眠っている。
シェリダーをみんな、幻視する。観念の中に閉ざされていった時に。
オルドルは、只。無常に生きていくだけだ。
それが、彼に与えられた結末なのだから……。
死よりも苦しい結末……。

†

マレブランケはブレイズから、デイエスの死を聞かされた。
何故、デイエスは死んでしまったのか。何となく、分かっていた。
彼は外の世界へと女達に恋文を送る。けれども、実際、出会ってみないと分からない部分が多過ぎた。そして、彼は自身の意識と物質を溶かしていく力に頼り過ぎた。
現実を目の前にして、悲観して。死を選んだのだろう。
心の弱さとは、どうすれば無くせるのだろうか。

マレブランケは自分の醜い姿を対比して、デイエスを崇拝していた。
けれども、もう信じるべき相手は何処にもいない。
今、片腕と。片翼だ。それでも、生きていこうと思う。
ブレイズは何かと面倒を見てやると、言ってくれた。
怪物達の住んでいる場所に連れていってやると。
その腕も翼も治してやるよと言った。
しばらくは、彼に甘えようと思う。強き者を信じていれば、何か見つかるのかもしれないから。

†

今、少しだけでもメビウスに近付けたのだろうか。
コッペリアは人形を創り続けて、ふと思った。
自分の中で完成されたもの、まだ未完成で未消化の技術のみで作られているのだが。
それでも、メビウスを象った人形がまた一つ完成した。
粘土の捏ね方や輪郭の削り方、節々の彩色など。複雑な設計を為さなければならないのだが。それでも、以前よりはより良い作品に仕上がったと思う。
眼球を嵌めて。
黒衣を着せる。
この世には存在しないかのような人形へと仕上がっている。
彼はメビウスを待っていた。
また、叱咤される事を望んでいる。けれども、またより良い作品を創っていきたい。
一つ、作品を完成させるごとに。自分自身が生きている証を築いているみたいだ。それが、決して伝わらないかもしれないと思っていても。何も出来なかった自分に未来を与えてくれるような気分になる。
いつか、もっと技術が上がって。色々なデザインの人形を作れるだろうか。表現力が上がって、様々な多種多様の人形を作る事が出来るのだろうか。
しかし、テーマは決まっている。「痛み」を表現したいのだと。
いつか、自分の人形だけで飾った店を開こうと思っている。その時は、いつになるのだろうか。今から、楽しみだ。
彼はメビウスの帰りを待っていた。
また、批判、評論して欲しい。自分の作り出した子供のような作品。
「メビウス様。俺は貴方に生きる意志を貰いました」
コッペリアは自らの作った、新しいメビウスのボディに傅く。そして、彼の主人をずっと待ち続けているのだった。
……。
コッペリアは、独り。暗い部屋で泣いていた。

誰にも、自分自身の心の傷を言えなかった。
彼は観念とイメージだけで、生きていくしかなかった。
傷に傷を重ねて、愛する事も愛される事も出来ずに。傷口が膿んで広がっていった。
誰も信じられず、何も信じられず、生きてきた。
いつか、メビウスの言っているフェンリルという存在に出会おうと思う。
ひょっとすると、彼の傷の欠片だけでも理解してくれるような気がして。
今、生きられない。
メビウスに、自分の過去の傷の事を言えない。傷が反復していって、それを言語化する事さえ出来ない。だからこそ、人形という表現行為を行い続けている。
自分の苦痛を、言葉に出来ないのだから。体験とか記憶が明滅していって、それを巧く形にする事が出来ないのだから。いつ、観念の牢獄を抜け出す事が出来るのだろう？
分からない……生涯、無いのかもしれない。
ふと、メビウスに見捨てられたら。どうなるのだろうと思う……考えるだけで辛い。
だから、彼は人形制作に必至に縋り付いている。それ以外に生きる意味なんて何も無いのだから。
何故、自分やフェンリルは男として生まれてきたのだろう。
こんなに女性的なのに……こんなに少女的なのに。いつか、フェンリルと会って、話す事によって。少しでも自分の中の苦痛が和らぐならそれでいいのかと。
コッペリアは妄執的に希望を捨てない。いつか……なんて言葉は信じるべきではないし、信じられないものなのだけれども。
ずっと、ずっと自分は傷付いていって、傷の上に傷を重ねていくのだろう。
リスト・カットなどの自傷行為の代わりに、痛みを表現する人形を創り続けているのだから。

ＥＮＤ